

2021年12月25日

中央大学文学部

英米文学研究

第39号

目次

学部卒業論文

- フォーティンブラスはなぜ次期国王に選ばれたのか
.....荒井 葉月 (3)
- 『ドゥ・ザ・ライト・シング』と『ジャングル・フィーバー』にみる
スパイク・リーのウェイクアップ・コール.....國廣 光 (19)
- 『マグニフィセントセブン』における多様性.....道廣 芽生 (37)
- ジェーンの人生、3つのターニングポイント
ーグレアム・スウィフト『マザリング・サンデー』を読み解くー
.....高濱 和優 (53)
- 『若草物語』における結婚ー「心」と「魂」のありか.....野口 暁生 (71)
- 日本語を母語とする英語学習者による動詞補部の選択：小節か定節か
.....若林 知也 (89)
- Effects of Music Tempo and Lyrics on Physical Activity
.....Miki Kuwashima (113)

中央大学英米文学会会則
英語文学文化専攻専任教員/編集後記

中央大学文学部英米文学会

学部卒業論文

フォーティンブラスはなぜ次期国王に選ばれたのか

荒井 葉月

序論

『ハムレット』(*Hamlet*)はウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare)が執筆した四大悲劇のうちの一つで、主人公でデンマーク国王子のハムレット(Hamlet)が叔父で現王のクローディアス(Claudius)の謀略を暴き、父の仇を討とうと奮闘する壮絶な復讐劇である。ハムレットを取り巻く登場人物たちの多くが死んでゆくラストは特に壮絶であり、顧問官ポロニアス(Polonius)の死を皮切りに、その娘でハムレットの恋人オフィーリア(Ophelia)の溺死、ハムレットの母であり王妃のガートルード(Gertrude)の服毒による死、そして決闘でのレアーティーズ(Laertes)、クローディアス、ハムレットの死に至るまで、畳みかけるように人が死んでいくという非常に印象深いラストとなっている。そんな『ハムレット』の幕切れで、主人公ハムレットは隣国ノルウェーの王子であるフォーティンブラス(Fortinbras)を次期王にすると、親友ホレイシオ(Horatio)に遺言を遺す。『ハムレット』では、次期王を命じられたフォーティンブラスの出演シーンはたったの2シーンであり、セリフも19行のみとなっているため、突然フォーティンブラスが推薦されたことに疑問が残る。しかし深く読み進めると、ハムレットの行動や性格からフォーティンブラスが選ばれた理由が徐々に浮かび上がり、ハムレットの人物像として新たな見方、そしてこの物語の違った解釈を見つけることができる。この論文では、フォーティンブラスというキャラクターを分析し、ハムレットがフォーティンブラスに国政を任せたのはなぜなのかを論じる。

第一章ではまず、主人公ハムレットの人物像を読み解く。ハムレットは作中、狂気を演じているシーンが多く、本音や本質を見抜くのが難しい。しかし作中に七つある独白は、彼の本心に近い発言であるため、主に独白を元に彼がどのような人物なのかを論じる。第二章ではハムレットの父である先王ハムレットと、その先王を殺害した叔父で現王のクローディアス

を比較する。性格だけでなく、王として行う政治という視点からも比べたうえで、ハムレットが目指した国がどのようなものなのかを推測する。第三章では、第一章と第二章の内容を踏まえ、なぜハムレットはフォーティンブラスを次期王にしようと決めたのか結論付けていく。

第1章 ハムレットはアンチヒーローか

本章ではまず、ハムレットという人物の特徴、性格を本文より推察する。特に彼の考え方が顕著に表れている独白部分を軸に分析し、彼の本質を見ていく。そのうえで、彼はこの戯曲においてヒーロー (hero) なのか、アンチヒーロー (antihero) なのかを論じる。ヒーローとは、英雄のことで、ここでは具体的には「知力や才能、または胆力、武勇などに特にすぐれていること。また、その人。」(『日本国語大辞典』) を言う。アンチヒーローとは、「ヨーロッパ文学において、プロットの中心的位置を占めていながら、偉大さ、賢明さ、力強さなど、伝統的なヒーローがもっている英雄的資質とは正反対の性格を帯びている登場人物。しばしば無能で、弱く、不運でもある社会的不適合者」(『集英社世界文学大辞典』) を指す。まず、ハムレットの印象は陰鬱で優柔不断な暗い青年というものが多い。河合祥一郎氏の著書『謎解きハムレット』にも「広く世間一般に受け容れられているハムレット像として、くよくよと思い悩む繊細な青白い若者というイメージ」(19) があると記されている。確かに、ハムレットの台詞には鬱々と苦悩しているものが目立つ。この戯曲ではハムレットによる独白が全部で七回あり、独白だけを見ても彼の心情の変化が分かる。第一独白では叔父とあっさり再婚した母への嘆きが描かれ、第二独白では父の亡霊と話し事実を知り衝撃を受けている様子が描かれる。第三独白では一度復讐心を燃やし行動を起こすと決意するが、第四独白ではその決意を揺らがせている。この独白中には彼の迷う気持ちが以下のように表現されている。

The undiscover'd country, from whose bourn
No traveller returns — puzzles the will,

And makes us rather bear those ills we have
Than fly to others that we know not of? (3.1.79-82)

一度行けば誰も戻らない
未知の国、それは意志をゆらがせ、
そして我々の持つこの痛みを背負う方が
我々の知らない他の所へ行くよりはましではないかと思わせる。

この独白では、ハムレットにとっての復讐の実行が“The undiscover’d country”、すなわち死後の世界と喩えられ、復讐をせずじっと耐える状況は“bear those ills we have”と喩えられている。この独白冒頭の“To be, or not to be — that is the question” (3.1.56)「生きるか、死ぬか、それが問題だ。」という文と呼応しており、復讐を実行するか、実行しないかを迷っているハムレットの苦悩が見て取れる。ハムレットは生きていようが痛みはついて回り、復讐をすることは死後の世界へ行くことと同義であると考えており、前向きな考え方ではない。作中にはこのような死と結びつけられた台詞が多く、ハムレットに暗く陰鬱な人物というイメージがついてしまったのだと推測される。そして、このネガティブな考え方は、典型的なヒーローの姿には見えない。

しかし、果たして彼は本当に暗く陰鬱な人物なのだろうか。前述のとおり、彼の発言は後ろ向きで優柔不断なものが多いにもかかわらず、彼の周りからの人望は厚い。オフィーリアは彼のことを次のように表す。

The courtier’s, soldier’s, scholar’s, eye, tongue, sword;
Th’ expectancy and rose of the fair state,
The glass of fashion and the mould of form,
Th’ observ’d of all observers— (3.1.151-54)

宮廷人の、闘士の、学者の、眼差しで、弁舌で、剣術の、
この国の期待とも華とも言われ、
ファッションの鑑や礼節の手本で、
多くの人の注目を集めた方。

これは、ハムレットの第四独白で気が狂ったハムレットを目の当たりにしたオフィーリアが、以前のハムレットの様子を形容したものである。本来のハムレットはこのように、文武両道で周りから尊敬の眼差しを向けられるような人間なのだ。また、正義感も強く、不正を見逃せなかったり、節度を守らない周囲に対して反感を抱いたりしている。第二独白中の“*How weary, stale, flat and unprofitable, / Seem to me all the uses of this world!*”「俺にはこの世の全てがいかにうんざりする、腐りかけた、平坦で、無益なものに見えることか！」(1.2.133-34) という台詞からは、父の死後あっさりとは再婚した叔父と自分の母親の節操のなさに憤り、憂いている。その後、叔父が亡き父に手を下したことを知ってからも、“*The time is out of joint. O cursed spite, / That ever I was born to set it right!*” (1.5.188-89) 「世の中の籐が外れてしまった。俺はそれを正すために生まれてきたのか。」と、露わになった不正を罰することで、世の中を自分が正すと意気込んでいる。作中で描かれる彼の姿は、父の死後であること、母の再婚が早すぎたこと、そして叔父への復讐心から陰気な印象を受けるものが多いが、彼自身の性格としては非常にカリスマ性があり英雄的であることから、アンチヒーローというよりはヒーロー的な性質を持つキャラクターだと言えるだろう。

彼をアンチヒーローではなくヒーローと分類したが、なぜ彼は復讐を決意したにも関わらず、優柔不断ともとられるほど行動に移さないのか。これは彼が「くよくよと思ひ悩む繊細な青白い若者というイメージ」を抱かれてしまう所以であり、正義感の強い希望を持った青年とは思われにくい理由だ。彼の独白から気の迷いが読み取れることは前述した。迷いを表した第四独白ののち、第五独白冒頭では、次のように話す。

'Tis now the very witching time of night,
When churchyards yawn, and hell itself breathes out
Contagion to this world. Now could I drink hot blood,
And do such bitter business as the day
Would quake to look on. (3.2.383-87)
今、まさに夜も更け、逢魔が時、

墓場が口を開け、地獄の染み渡るような毒気を
吐き散らす。今なら私は生き血も飲める、
そしてつらい仕事もできる、昼間には
見るに堪えないような仕事も。

この独白は、クローディアスが国王を殺した経緯に似せた劇中劇を上演した
後のものである。ハムレットの計画が進み、第四独白とは対照的な復讐の決
意と実行の宣言の独白である。しかし、この独白は次にこう続く。

O heart, lose not thy nature; let not ever
The soul of Nero enter this firm bosom.
Let me be cruel, not unnatural:
I will speak daggers to her, but use none. (3.2.388-91)
ああ心よ、お前の本質を失うな。
ネロの魂をこの変わらない胸中に入れてはいけない。
冷酷になっても、人情に背くな。
短剣のように話しはするが、使ってはいけない。

これは一幕五場で亡霊が“*But, howsomever thou pursuest this act, / Taint not thy
mind, nor let thy soul contrive / Against thy mother aught; leave her to heaven*”
(1.5.84-86)「しかし、どんなにこの行動がお前に付きまとおうが、お前の
心を腐らせるな、お前の魂に、母に対し何かしようなどと企ませるな。彼女
のことは天に任せなさい。」と、母に危害を加えないようにするための警告
を思い返す場面である。母の再婚はハムレットにとって許しがたい行為であ
ったが、彼は父の魂であるという亡霊の言うことを忠実に守ろうとしており、
ここに彼の父への誠実な忠義心が現れている。その後の第六独白では、クロー
ディアスが自らの罪を懺悔しているところにハムレットが訪れ、暗殺しよ
うとする。しかし、ハムレットはそこで思いとどまる。“*... and am I then
reveng'd / To take him in the purging of his soul, / When he is fit and season'd for
his passage?*” (3.3.84-86)「[前略]そして、私は彼が魂を清め、死ぬ準備がで

きているときに殺して、それで復讐したことになるのか？」という台詞にあるように、ハムレットはクローディアスへの復讐を中途半端なものではなく、完全なものにしたかったためタイミングを見計らっているためだ。確かに、このシーンでの彼の行動は優柔不断にも見える。しかし見方を変えれば、彼は己の感情に身を任せることはせず、冷静に状況を判断する力を持っているといえよう。亡霊の忠告や信仰する宗教など自分の信じるものを守ろうとして感情的な行動には移さなかったと推測できる。第四独白以降のハムレットの行動には一貫性があり、彼の持つ性質として優柔不断を提言するにはいささか短絡的すぎる。彼は殺すか殺すまいか迷っているのではなく、自分の昂ぶる感情を抑えつつ慎重に行動に移そうとしているのだ。

以上のことから、ハムレットは世間一般のイメージに近いアンチヒーローではなく、実際はヒーローに相応しいキャラクター性を持つ人物である。ヒーローとしての資質を多く持ち、悪を罰するため慎重に行動するハムレットは、正義感に溢れた、王子としてふさわしい人物と言えよう。

第2章 ハムレットが目指した王国

この章では、ハムレットが尊敬した前国王であり実の父であるハムレット王とクローディアスを比較し、前章と絡めつつハムレットが目指した国王像を読み解いていく。前章ではハムレットの持つヒーロー性と王子としての資質を論じた。ハムレットの父とクローディアスについて、ハムレットはこのように表している。“So excellent a king, that was to this / Hyperion to a satyr” (1.2.139-40) 「とても素晴らしい王だった、今の王と比べれば、ヒュペリオンとサテュロスほど違う。」ここでは、ハムレットの父をヒュペリオンに、クローディアスをサテュロスに喩えている。ヒュペリオンとは、「ギリシア神話中の巨人で、チタン族の一人。ウラノスとガイアの息子。太陽神ヘリオス、月の女神セレネ、曙の女神エオスの父。のちにヘリオスの別称ともなった」(『日本国語辞典』)という神話上の登場人物である。また、ヒュペリオンは「高天をゆく者」という意味も持ち、ハムレットは父を国民の上に立つ人として相応しいと表現した。クローディアスはサテュロスに喩えられたが、

サテュロスとは「ギリシア神話の山野の精。山羊の特徴をもつ半獣半人の男の姿をし、快楽を好む」(『日本国語辞典』)というキャラクターであり、ハムレットはクローディアスを獣のように理性に欠けた人物ということを表した。ハムレットの父は愛妻家だったようで、“so loving to my mother, / That he might not beteem the winds of heaven / Visit her face too roughly.” (1.2.140-42)「母上をととても愛し、天の風が彼女の顔に強く吹くことさえ許さないほどだったのに」と、ハムレットが話している。また、第一章でも言及したように、父の霊魂を持った亡霊が「妻には手を出すな」と忠告していることから、妻を大事にする誠実さを持ち合わせていた人物であることが伺える。反対に、クローディアスは自分の兄の喪が明ける前に義姉と結婚してしまうほどには貞操観念が低く、ハムレットがサテュロスに喩え言及するように好色家とも解釈ができる。もしくは、王座を奪うためならば、常識や思慮を捨てる人物であるともいえる。以上のように、先王ハムレットと現王クローディアスには誠実さに差が表れている。

また、ハムレットの父とクローディアスでは政治でも大きな違いがみられる。この作品では、ハムレットの復讐が進むだけでなく、デンマークの国政の変化も描かれている。特にノルウェー国との関係は物語のなかで多く語られる。ハムレット王が生きていた間の政治は、冒頭でホレイシオがこう話す。

At least, the whisper goes so. Our last king,
Whose image even but now appear'd to us,
Was, as you know, by Fortinbras of Norway,
Thereto prick'd on by a most emulate pride,
Dar'd to the combat; in which our valiant Hamlet —
For so this side of our known world esteem'd him —
Did slay this Fortinbras (1.1.80-86)

少なくとも、このように噂は流れている。我々の前の王、
まさに今我々の目の前に現れたお方が、
知っての通り、ノルウェー王フォーティンブラスが、
負けず嫌いの性格から、その気になって、

戦いを挑んだのだ。あの勇敢な先代のハムレット王に—
そして西側の国中から尊敬されているその方は、
そのフォーティンブラスを討ち取った。

ここでのフォーティンブラスは、幕切れにハムレットがデンマークの政治を
任せる人物ではなく、その父であり先王のフォーティンブラスのことである。
以上の文章から、先王ハムレットは武勇に長けており、戦上手であったこと
が伺える。この戦いののち、デンマーク国はノルウェー国の領地を譲り受け
ることになる。

... who, by a seal'd compact,
Well ratified by law and heraldry,
Did forfeit, with his life, all those his lands
Which he stood seiz'd of, to the conqueror. (1.1.86-89)

敵は、騎士道の掟に従って
申し分なく承認された約定により、
全ての土地を命と共に失った。
所持していた土地を、勝者の手へと。

ハムレット王が生きていた間は、国の権力は王自らが戦い強めていく方法が
とられていた。行動力のある人物であると推測できる。それに反してクロー
ディアスの政治はどうだろうか。第一幕第二場で、このように語られている。

Holding a weak supposal of our worth,
Or thinking by our late dear brother's death
Our state to be disjoint and out of flame,
Co-leagued with this dream of his advantage—
He hath not fail'd to pester us with message
Importing the surrender of those lands
Lost by his father, with all bands of law,

To our most valiant brother. (1.2.18-25)

我々のもつ価値を低く見積もってか、
もしくは我々の親愛なる兄上の死によって
我が国の籬が外れたとでも思ったか、
有利であるという根拠のない思い込みに支えられて
しつこく書状を送ってくる、
奪われた領地を明け渡せ、
彼の父が固い法律により失った土地を、
我らが勇敢な兄上が手に入れた土地を返せと。

クローディアスに政権が渡る前に、先王フォーティンブラスは戦いにより命を落とした。その息子フォーティンブラスが父の失った土地を取り返そうと書状を送っている。それに対しクローディアスは、以下のような対応をとる。

... we have here writ

To Norway, uncle of young Fortinbras —

Who, impotent and bed-rid, scarcely hears

Of this his nephew's purpose — to suppress

His further gait herein . . . (1.2.27-31)

ここに手紙を書いた、
若きフォーティンブラスの叔父であるノルウェー王に。
無力で寝たきりの、甥の計画さえも
ほとんど聞こえないその王に、甥がさらに
ことを進めるのを阻止せよと書いた[後略]

クローディアスは、先王ハムレットとは反対に武力行使ではなく、手紙での外交を推し進めた。この後、第二幕第二場にてこの政策は成功し、フォーティンブラスはデンマークを通過してポーランドを侵攻する方針に変えた。クローディアスの政治は現代のものに近く、先王ハムレットの政治よりは平和的と言える。しかし、ここで使われた“suppress”という言葉には、「(権力・法

によって) <人・団体などの>活動をやめさせる」(『小学館 ランダムハウス英和辞典』) という意味がある。デンマーク国はノルウェー国との戦いに勝ち、支配下に置いている状態にあるため、クローディアスはその権力を利用し、自分の手を汚さずに問題を解決したことになる。先王ハムレットの政治を武力行使というならば、クローディアスの政治は権力行使と言えよう。

では、ハムレットが目指した国はどのようなものなのか。まずは、本章冒頭で述べた、先王ハムレットのような誠実さが必要だ。これは、政治に関しても同じことが言える。ハムレットは、この戯曲を通して、権力を嫌う傾向にある。権力で人を見ることはせず、その人の本質を見ようとしている。例えば、友人ホレイシオがハムレットに対し“*The same, my load, and your poor servant ever.*” (1.2.162) 「そのホレイシオです、殿下、あなたの卑しいしもべです。」とへりくだった表現を使った時、ハムレットは“*Sir, my good friend. I'll change that name with you.*” (1.2.163) 「友達だろう。僕が君のしもべとなるう。」と、あくまで友人であることを示し、そして人として尊重した表現を用いた。また、当時身分の低かった劇団の役者たちに劇の上演を依頼した際、ポローニアスは“*My lord, I will use them according to their / desert.*” (2.2.518-19) 「殿下、それ相応に扱いましょう。」と提案するが、ハムレットは“*God's bodykins, man, much better.*” (2.2.520) 「とんでもない、もっと丁重に扱え。」と返す。この考察を踏まえると、権力でものを見るのではなく、そのものもつ特性や能力を見るハムレットが目指した国の政治は、クローディアスのように権力を行使した政治ではないだろう。王が直接戦い、実力を以って名誉を得る、まさに先王ハムレットが行っていたような政治であると推測できる。だからこそハムレットは父親を尊敬し、その父親のいないデンマーク国を憂いているといえよう。

第3章 フォーティンブラスの資質

本章では、ハムレットが幕切れでノルウェー国王子フォーティンブラスに国政を任せた理由を、第一章と第二章の内容を踏まえ読み解いていく。

そもそも、ハムレットに作中では直接関わらなかった、他国の王子フォー

ティンブラスに国政を任せることは可能なのだろうか。ハムレットが彼を跡継ぎに選んだ理由の一つとして、彼らが本当は従兄弟同士であることが挙げられる。小室金之助氏著の、『シェイクスピアの謎 法律家のみたシェイクスピア』に「原ハムレット」(“Ur-Hamlet”) などによると、二人は、従兄弟同士ということになっているのである」(小室 158) と書かれており、血筋的にはフォーティンブラスが次期国王に選ばれることはさして不自然ではないことが分かる。また、第二章でも述べた通り、ノルウェー国はすでにデンマーク国に敗戦しており、一つになっているため、国の関係としても難しいことではない。

しかし、ハムレットはこれらの理由だけでフォーティンブラスを選んだわけではない。フォーティンブラスにはハムレットが次期国王に指名する資質がきちんとあり、それが作中でも示されているのだ。

この戯曲でフォーティンブラスについて言及されている箇所は少ないが、それらの台詞から彼の性格が読み取れる。第一幕第一場で、ホレイシオは“Now, sir, young Fortinbras, / Of unimproved mettle hot and full” (1.1.95-96) 「その息子のフォーティンブラスは、血気盛んで熱いやつだが、」とフォーティンブラスについて話している。また、その後の以下の文でフォーティンブラスはこのような行動に出ている。

Hath in the skirts of Norway, here and there,
Shark'd up a list of lawless resolute,
For food and diet, to some enterprise
That hath stomach in't; which is no other,
As it doth well appear unto our state,
But to recover of us, by strong hand
And terms compulsory, those foresaid lands
So by his father lost (1.1.97-104)

ノルウェー国郊外のあちこちで
がむしゃらにしたたかな無法者の一群を掻き集め、
腹の足しにも胆試しにもなる仕事をさせ、

代わりに食べ物と日当を与えた、そのわけは
もちろん他でもなく、わが国を
武力と強制力で取り返そうというのだ、
例の、彼の父親が失った
あの土地を。

フォーティンブラスは、自分の父が失った土地を取り戻そうと企てている。結局この計画は、クローディアスの外交により収められるのだが、父親の失ったものを取り返そうとするという点が、ハムレットの復讐とよく似た構図である。この計画が収拾されたのち、フォーティンブラスはポーランドに侵攻することになる。廷臣であるヴォルティマンド (Voltemand) の報告ではこのように言及されている。

With an entreaty, herein further shown,
That it might please you to give quiet pass
Through your dominions for this enterprise,
On such regards of safety and allowance
As therein are set down. (2.2.76-80)

さらに、この書簡にあるように、
この戦いのためにこの国の領地を
静かに通過したいと懇願しています、
書簡に記したとおりの安全遵守および
認可にかかわる条項にもとづいて。

ホレイシオの台詞には“unproved mettle”「血気盛んな若者」とあったが、この対応を見ると彼は冷静さや常識も持ち合わせている人物であるということが読み取れる。また、行動力も高く、一つことが済んだらまた次へと、行動的なキャラクターであることが分かる。他国に自ら攻め入ろうとするほどの武勇をもち、ことを必要以上に荒げない知力や冷静さもあることから、第一章で論じたヒーロー性は、フォーティンブラスも持ち合わせているのでは

ないだろうか。

また、ハムレットの彼への評価も重要である。ハムレットがフォーティンブラスと出会うのは第四幕第四場のみで、クォート版のみの収録となっている。しかし、このシーンでは、ハムレットがフォーティンブラスについて多くを語っている。フォーティンブラス率いるノルウェー軍がポーランドに向かい、デンマークの領地を通る時に、ハムレットが偶然居合わせる。ハムレットがどのような土地を攻めるのかと問うと、ノルウェー軍の隊長は“Truly to speak, and with no addition, / We go to gain a little patch of ground / That hath in it no profit but the name.” (4.4.17-19)「正直に、余計な言葉なしに言いますと、我々は、名声の為だけに、何の利益にもならないほんのわずかな土地に向かっているのです。」と答える。フォーティンブラスは名誉のためにポーランドを侵攻しようとしていることが判明する。それに対しハムレットは独白でこう言及する。

Witness this army, of such mass and charge,
Led by a delicate and tender prince,
Whose spirit, with divine ambition puff'd,
Makes mouths at the invisible event,
Exposing what is mortal and unsure
To all that fortune, death, and danger dare,
Even for an egg-shell. (4.4.47-53)

あの軍隊の規模と経費がその証拠だ、
率いるのは繊細で優しげな王子だ、
その心は、崇高な野心で膨れ上がり、
予知できぬ結果など気にせず、
運命も、死も、危険な挑戦で
自身を死の運命にさらしているのだ。
卵の殻ほどのことのために。

この独白は、ハムレットがフォーティンブラスを見て自分を恥じ、復讐の決

意を新たにしている内容になっている。“an egg-shell”「卵の殻」ほどのことのために総力をあげ、名誉をかけて戦おうとする姿に心打たれ、また、第二章で述べた、ハムレットの目指す国の政治として「王が直接戦い、実力を以って名誉を得る」という条件にも該当する。

シェイクスピアは意図的にフォーティンbrasをハムレットと似た境遇にし、彼らの持つキャラクター性もヒーロー的と言えるものにしたと推測できる。河合氏の著書『謎解きハムレット』では、ハムレットと、野心をもつ若者として比較できるレアティーズ、そしてフォーティンbrasのうち、「最も気高く行動したのが理性と情熱のバランスがとれたフォーティンbras」(河合 95) と記述されている。もともと敵国だったとはいえ、先王ハムレットの功績により一つになったノルウェー国の王子であるというだけでなく、王としての資質が十分にあり、名誉を大切にすることができるという観点からもハムレットは今後のデンマーク国を任せる人物としてフォーティンbrasが適任だと判断したのである。

結論

ハムレットとフォーティンbrasという、作中ではほとんど関わりのないキャラクターに着目し、『ハムレット』を読み進めた。この二人は、王座につく資格がありながらその座にはついていないという、似た立場にある。また、2017年4月から東京芸術劇場など全国7箇所にて上演されたジョン・ケアード氏演出の舞台「ハムレット」では、ハムレット役がフォーティンbras役も演じるという演出になっている。第一章では、ハムレットは世間から持たれているイメージとは実は異なっていて、非常にヒーローらしいキャラクターであることを論じた。第二章ではそんな彼の目指す王国がどのようなものか先王ハムレットとクロードディアスの比較を通して読み解き、第三章でその王国づくりを任されるフォーティンbrasの持つ資質と、ハムレットが彼を次期国王に任命した理由を述べた。「フォーティンbrasの名は「強い腕」を意味する」(河合 93) が、亡くなった先王フォーティンbrasの「強さ」とその息子であるフォーティンbrasの「強さ」は違った意味を持つ。

青年フォーティンブラスの持つ強さは単なる力の強さではない。人としての強さであり、シェイクスピアは若者の持つ新しい強さをこの戯曲で表そうとしていたのだ。この戯曲のテーマとして、ハムレットの復讐や死生観があるが、こうして別の視点から読むと、結末はバッドエンドではあるものの、ハムレットというヒーローが世の中の箍をはめ直そうとする勸善懲悪の物語にも見えてくる。『ハムレット』は、単なる悲劇ではなく、未来への希望と期待というシェイクスピアのメッセージが込められた戯曲なのである。

引用文献

河合祥一郎『謎解きハムレット』三陸書房、2000年。

小室金之助『シェイクスピアの謎 法律家のみたシェイクスピア』三修社、1997年。

ウィリアム・シェイクスピア『ハムレット』高橋康也・河合祥一郎編注、大修館、2001年[Shakespeare, William. *The Tragedy of Hamlet, Prince of Denmark*. London: Collins, 1951]。

『集英社世界文学大辞典』Japan Knowledge Lib

<<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=52310h0013566>>

(参照日 2020年12月11日)

『小学館 ランダムハウス英和大辞典』Japan Knowledge Lib

<<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=40010RH172023000>>

(参照日 2021年1月15日)

『日本国語辞典』Japan Knowledge Lib

<<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=200200793ff063Cziop>>

(参照日 2020年12月11日)

『ドゥ・ザ・ライト・シング』と『ジャングル・フィーバー』 にみるスパイク・リーのウェイクアップ・コール

國廣 光

序論

2020 年はアメリカ史、とりわけ黒人の地位向上をめざす運動の歴史において重要な 1 年となるだろう。ジョージ・フロイド (George Floyd) 氏が無抵抗であったにも関わらず白人警官に殺された事件を契機に、2013 年に発足したブラック・ライヴズ・マター (#BLACK LIVES MATTER) というムーブメントは世界中に拡散され、これまで明るみに出ることのなかった警察による残忍行為に目が向けられた。日本を含む世界各地で正義を求めるデモ活動が行われたが、それらすべてが平和的・民主的なものではなかった。一連の騒動は、1992 年のロサンゼルス暴動¹に多くの共通点がみられる。警察の行き過ぎた取り締まりが動画で拡散され、警察への刑罰の軽さに大衆の怒りが爆発しデモだけでなく暴動・略奪にまで発展してしまう。約 30 年経った現在も人種差別の実態や抗議方法には変化がないといえるのではないだろうか。ロサンゼルス暴動が起こる 3 年前の 1989 年に、これを予知していたかのような映画 *Do the Right Thing* 『ドゥ・ザ・ライト・シング』を制作したのがスパイク・リー (Spike Lee) である。

リーは、それまで白人が牛耳っていたアメリカ映画界において黒人主体の映画を撮ることで活躍の場を拓き、黒人の地位を主張し続けている黒人監督である。本稿ではリーの作品の内『ドゥ・ザ・ライト・シング』と *Jungle Fever* 『ジャングル・フィーバー』について論じる。

第 1 章では作品が制作された時期のアメリカ社会を分析する。当時の人種比率、ジェントリフィケーションやドラッグの蔓延などの事象、実際に起きたヘイトクライムに目を向け、人種対立の背景を考察する。加えてキング牧師 (Martin Luther King, Jr.)、マルコム X (Malcolm X) の思想にも言及し、黒人の根底にある精神性を示す。

第 2 章では作品のストーリーに着目し、人種対立の描かれ方について論じる。単に白人対黒人という構図のみならず、同人種異世代間の摩擦や同人種同世代間の軋轢などさまざまな対立が描写されていることを明らかにし、そ

の渦中にいる人物の心境を考察する。

第3章では、リーがそのような人種対立を描いた意図を、タイトルと同じ楽曲名で依頼制作するなど力を注いでいた挿入歌の観点から分析する。作品が明るい未来を予期させるものでない点を踏まえ、リーが音楽に宿したメッセージがその未来を変えるためのウェイクアップ・コールとして作中に響いていることを論じる。

第1章 社会背景

第1章では、2作品が生まれた背景を整理する。『ドウ・ザ・ライト・シング』は1989年、『ジャングル・フィーバー』は1991年に公開されており、双方とも公民権運動後1980～90年代のアメリカを舞台としている。まず当時の人種構成に着目したい。『ドウ・ザ・ライト・シング』の舞台であるベッドスタイ (Bedford Stuyvesant, Brooklyn, New York City) や『ジャングル・フィーバー』におけるベンソンハースト (Bensonhurst, Brooklyn, NYC) が含まれるブルックリン区、『ジャングル・フィーバー』におけるハーレム (Harlem, Manhattan, NYC) が位置するマンハッタン区、1992年に暴動が起こったロサンゼルス (Los Angeles, California)、そしてアメリカ全土の人種比率を比較する。

	Brooklyn borough	Manhattan borough	State of New York	Los Angeles city	State of California	The United States
All persons (%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
White	46.9	58.3	74.4	52.8	69.0	80.3
Black	37.9	22.0	15.9	14.0	7.4	12.1
American Indian, Eskimo, or Aleut	0.3	0.4	0.3	0.5	0.8	0.8
Asian/ Pacific Islander	4.8	7.4	3.9	9.8	9.4	2.9
Other race	10.0	11.9	5.5	22.9	13.2	3.9

以上の表から、白人が8割以上を占めていた当時のアメリカではマンハッタン、ブルックリンのどちらにも比較的人種の多様性がみられたといえる。これに鑑みて作品に目を向けると、リーが描いた街では同じエスニシティを持つ人々が隣人として生活している様子がうかがえる。黒人居住区では白人、韓国系などの他人種が異質な存在とされており、イタリア系の近隣では黒人が立ち入ることが許されない空気が漂っている。ブルックリン、マンハッタンのように全体としては人種多様性が確保された地域でも、より細かい街単位では人種が融合することはなく、それぞれ同じ民族的バックグラウンドを持つ人同士が生活空間を共有していたことがわかる。

当時のアメリカでは、社会構造に多大な影響を及ぼす現象が起きていた。1つ目にジェントリフィケーションが挙げられる。ジェントリフィケーションとは、都市において比較的貧困な層が多く住む地域に、再開発や新産業の進展などの理由で比較的豊かな人々が流入し、地域の経済・社会・住民の構成が変化する都市再編現象を指す。これにより貧困層が多く住む地域の地価が高騰し、社会的格差の拡大が助長された。2つ目に、1984年から1990年頃に流行したクラックブームに言及したい。クラック（＝クラック・コカイン）とは、吸引できる状態にした粉末状のコカインを指し、通常のコカインより安価であったため貧困層の若者の間で特に大流行した。これを法律は逆手に取り、コカインよりはるかに重罪であった上に量刑が科されていた。この時期には麻薬中毒者や路上生活者が増加し、殺人・窃盗などの犯罪率が高まった。当時の大統領ロナルド・レーガン（Ronald Reagan）はこれに対し「麻薬戦争」（“War on Drugs”）と呼ばれる施策を講じ、刑務所への予算を確保しクラックを厳しく取り締まることで有色人種の逮捕者が増加しただけでなく、その政策で多くの南部票を獲得した。『ジャングル・フィーバー』でもクラック蔓延の様子がうかがえる。主人公フリッパー（Flipper Purify）の兄ゲイター（“Gator” Purify）をはじめとする若者たちが中毒に陥り、感情の激しい起伏がみられ金銭的に困窮していてもクラックから離れられない状況が描かれている。量刑が科されるような描写はないが、現実には黒人がクラックで逮捕され終身刑になるケースもあった。

このような状況下で人種間の対立は緊張状態にあり、日常的にヘイトクライムが起こっていた。リーはそれらの事件から着想を得て作品に落とし込んでおり、現実味のある人種対立を描いている。『ドゥ・ザ・ライト・シング』

ではそのような事件により命を落としてしまった6名の名前がクレジット画面に挙げられており、主に白人警官による残忍行為の犠牲者に追悼の意が示されている。中でもマイケル・グリフィス (Michael Griffith) が亡くなった事件は、加害者が警官ではないものの作品に多くの影響が見受けられる。1986年12月20日、当時23歳のグリフィスは、友人とドライブ中に白人の多い地域であるニューヨーク、ハワード・ビーチ (Howard Beach, New York) 付近で車が故障したため、助けを求めに行った。道中で白人青年たちと口論になり、その場を去ったものの後に暴力に発展し、もみ合いの末車にはねられて死亡した。白人青年には有罪判決が下った。事件現場のピザ屋というロケーションが映画にも反映されている。『ジャングル・フィーバー』にはユセフ・ホーキンス (Yusef Hawkins) が亡くなった事件の影響が色濃く表れている。1989年8月23日、当時16歳のホーキンスはニューヨーク州ベンソンハーストにて30人ほどのギャングの白人青年達に囲まれ、射殺された。当日、ギャングの1人とかつて交際していたヒスパニック系のルーツを持つ白人女性の誕生日会が行われていたが、白人と黒人のギャング同士の対立が緊張状態にあったため、黒人やヒスパニックの友人と交友のあった彼女は彼らに当日ベンソンハーストには来ないようにと伝えていた。それでも誕生日会に向かったホーキンスは女性と交際していたと勘違いされ、激しい暴行の末発砲された。主犯者には第2級殺人罪で有罪判決が下った。以上の事件は、青年同士の白人対黒人という構図になっている点、白人居住区で起こった事件である点、裁判に関して黒人の反感を買った²ものの被告には有罪判決が下っている点の3点において共通している。リーは都市の中でもマイノリティが多く住む地域に焦点を当て、日常的に起こる事件を忠実に描くことで、表面化されずにいた黒人をはじめとするマイノリティの現状を世界に発信するという役割を果たしたといえることができる。

もう1点、作品を語る上で欠かせない要素となるのが、公民権運動を率いたキング牧師³とマルコム X⁴の思想である。リーは『ドゥ・ザ・ライト・シング』のエンドロールで暴力に関する教えを説いた以下の言葉⁵を引用しており、2人がリーの考え方に多大な影響を与えていることが示唆される。

Violence as a way of achieving racial justice is both impractical and immoral . . . Violence is immoral because it thrives on hatred rather than

love . . . Violence ends by defeating itself. . . .

人種差別に暴力で戦うのは非現実的で不道德だ [中略] 暴力は、愛ではなく憎しみを糧にしているため不道德だ [中略] 暴力は暴力によってのみ終わらせられる [後略]。(キング牧師)

I think there are plenty of good people in America, but there are also plenty of bad people . . . you and I have to preserve the right to do what is necessary to bring an end to the situation, and it doesn't mean that I advocate violence, but at the same I am not against using violence in self-defense. I don't call it violence when it's self-defense, I call it intelligence.

アメリカには善人も多いが悪人も多い [中略] 私たちはこの状況（人種差別）を終わらせるために必要なことをする権利を守らなければならない。私は暴力を擁護はしないが、同時に自己防衛のための暴力には反対しない。自己防衛のための暴力は暴力ではなく知性と呼ぶ。(マルコム X)

この暴力への考え方を紐解くため、それぞれの主張の核を整理したい。キング牧師は、ガンディーに影響を受けた非暴力の姿勢を暗殺直前まで貫き、人種統合を目指していた。プロテスタント系パブディストの教会を持つ父のもとに生まれ幼少期からキリスト教の教えを学んだという家庭環境から、キリスト教的な隣人愛を基にしている。初めて差別を目の当たりにした際にも「白人を憎んではならない、愛するのがクリスチャンの義務だ。」と両親に教えられたという。しかし、日常的に差別を被り続けている黒人に「白人を愛せ」という主張は受け入れられがたい。そこでキング牧師は、白人は生まれながらヘイトを植え付けられているため差別により魂が歪められているのは実は白人で、道徳的に上の立場にある黒人が愛を以て白人を救済してあげるよう説いた。また、非暴力の実行は白人側の良心をも目覚めさせられると訴えた。実際に彼の運動には徐々に白人の参加者も増え、多様な人種の人々を巻き込んでワシントン大行進やシットイン運動などの活動を展開した。

一方、マルコム X は当初分離主義を唱えており、暴力をも肯定していた。彼は 10 代の頃アンダーグラウンドの世界に魅了され、ドラッグに溺れギャングのハスラーになるまで至ったが、強盗罪で逮捕された際に獄中で熱心に

勉強し、そこで出会ったアフリカ系アメリカ人のイスラム教組織ネーション・オブ・イスラム（以下 NOI）に入信した。NOI はブラック・ナショナリズム⁶の影響を受けており、白人を排斥し黒人が経済・政治ともに独立した社会の形成を目指していた。マルコムも NOI 加入時には白人は悪魔だとまで言い過激な分離主義的姿勢をとっていた。しかし、NOI 脱退やメッカ巡礼時の正統派イスラム教との出会いを経て白人観も次第に融和的になり、宗教に関係なく黒人の人権獲得を目指すアフロ・アメリカン統一機構（OAAU）を組織した。マルコムの活動は演説がほとんどでキング牧師のような大衆運動にはいたらなかったが、その雄弁で力強い演説は民衆に多大な影響を与えるのみならず黒人に民族的自尊心を持たせることにも寄与した。キング牧師との意見の相違は明確で対立関係にあったと捉えられることがあったが、晩年にはかつて掲げていた分離主義を否定し、白人からの暴力に耐え続ける戦術こそ受け入れていないものの公民権運動にも賛成の意を示した。

映画の舞台となった 1980 年代から 1990 年代にかけ、黒人間ではマルコムの再ブーム⁷が訪れていた。同時期に彼とともに称賛された人物に元 NOI 信者のルイス・ファラカン（Louis Farrakhan）がいる。ファラカンの名前は『ドゥ・ザ・ライト・シング』でも言及されているが、彼は NOI が人種統合を目指すようになって脱退し、当初の NOI のような過激派組織を再構築した。マルコムが思想の変化を遂げたことは理解されず、初期の攻撃的な思想が厳しい生活を強いられている貧困層の黒人の若者たちに表面的に受け入れられた。作品の登場人物にも同様の思想が影響していると推測できる一方、このような過激派を擁護する風潮により白人の抱く黒人へのステレオタイプ化されたイメージが強まり、対立を助長したのではないかと考えられる。

第 2 章 作品にみられるさまざまな対立構図

第 2 章では、映画にみられるいくつかの対立構図を分析する。はじめに、『ドゥ・ザ・ライト・シング』におけるコミュニティを構成する人物対彼らを対象に商売をする人という構図を取り上げたい。この作品は住民の黒人比率が高いベッドスタイという地域を舞台としている。終盤での暴動シーンの強烈な印象から、黒人対白人という単純化された対立が際立っているが、この作品で特筆すべきは日常的に蓄積されていく「フッド」と「よそ者」との

間にある葛藤だと考える。ここでの「フッド」を、ベッドスタイに住んでおりコミュニティへの愛情を持っている人々と定義したい。彼らの帰属意識には、身体的黒人性のみならず精神的黒人性を帯びていることが必要とされているといえる。例として、他人種に過激な対抗意識を持つバギン・アウト (Buggin' Out) が、サル (Salvatore 'Sal' Fragione) の店で働くムーキー (Mookie) に“Stay Black!” 「黒のままな！」と釘を刺すシーンを挙げたい。ここでバギン・アウトは、サルとムーキーの関係性について雇い主と従業員という上下関係ではなく白人と黒人の階層構造として捉えている。よって、サルを黒人から金を吸い取っている白人と認識しており、サルの言い分を聞き入れるムーキーに対し白人に魂を売ったと感じていると考えられる。このことから、彼は同胞と結託して白人に抗うという彼なりの精神的黒人性をムーキーに求めているということができ、前章で述べたマルコムやファラカンの思想に通ずるものを感じ取ることができる。対するムーキーは、サルの言い分を聞き入れつつバギン・アウトも諭しているためどちらにも抵抗していない。この事なかれ主義な態度から、彼はバギン・アウトの求める精神的黒人性を帯びていないといえる。

一方、サルへの敵対心を露にしているのはバギン・アウトやラヒーム (Radio Raheem) のみで、暴動以前の他の住民はむしろ友好的である。バギン・アウトとラヒームがボイコットを呼びかけた際の皆の反応にそのような肯定的な態度がうかがえる。若者も壮年者も、20年以上同じ場所でピザ屋を経営しながら、社会的弱者である高齢のメイヤー (Da Mayor) や精神障害を持つスマイリー (Smiley) にも情を持って接しているサルの店をボイコットすることはもってのほかだと考えている様子がみられる。この点において、ベンソンハーストから通勤しているサルに対する「よそ者」という意識は感じ取れない。また、バギン・アウトからボイコットの話を持ち掛けられた際のムーキーの妹ジェイド (Jade) に注目したい。“What good is that gonna do? . . . If you tried hard, you could direct your energies more in a useful way. . . I'm down for something positive in the community.” 「それにどんな利益があるの。[中略] もっと有益なことにエネルギーを使うべきよ。[中略] コミュニティのためになることになら私は賛成よ。」という発言からジェイドは、バギン・アウトの求める精神的黒人性を体現することはコミュニティ全体にとってプラスになりえないと考えているといえる。ジェイドは女性でありながら自ら働

き家賃を払って暮らしており、登場する住民の中で唯一経済的に自立していると推測される。このような社会的立場にあるジェイドの視点からは、人種の垣根を無くしたベッドスタイという町全体での発展を望んでおり、それが黒人の地位向上にも繋がると考えていることが示唆される。この点に、同コミュニティ内で白人に取って代わろうとすることに精神的黒人性を求めるバギン・アウトとの意見の相違がみられる。

しかし、バギン・アウトの持つような対抗意識を抱いていない住民も最後には暴動に加わっている。表面化せずとも皆バギン・アウトのように白人を妬む気持ちが潜在的にあると考えられる。また、作品では暴動の翌朝までが描かれているが、住民にはまた変わらぬ日常が訪れる様子が見受けられる。このことから、一連の騒動はラヒームが殺されたというきっかけから暴動にまで肥大したが、このような事件が日常的に起こりうるほど住民間の葛藤は蓄積されており、対立は常に緊張状態にあったと捉えることができる。

一方で、サルと同じくベッドスタイで商売を営んでいる韓国系の夫妻には暴動の飛び火が及んでいない。20年以上ピザ屋を経営しているサルと比較して韓国系夫妻は新入りで、英語もまだ流暢に話せていないため、フッドに蔓延るよそ者という意識さえまだ芽生えていないのではないかと考えられる。当時の人種比率を見てもアジア系は1割未満と少数で、アメリカ全体においてまだ異質な存在であったといえる。しかし、作品が公開された3年後に起きたロサンゼルス暴動では、ラターシャ・ハーリンズ射殺事件⁸の影響もあり、作品とは異なり韓国系が営む商店も略奪・放火行為の標的となった。これに鑑みると、リー作品においては重要視されていないが、フッドにとって普段は蚊帳の外とみなされていたアジア系に対してもわだかまりは蓄積されていたのではないだろうか。

次に、『ジャングル・フィーバー』にみられる黒人对イタリア系アメリカ人という対立構図を取り上げたい。『ドゥ・ザ・ライト・シング』では黒人居住区ベッドスタイが舞台とされていたが、今作品では黒人居住区であるハーレムに加えイタリア系が多く住む地域であるベンソンハーストについても同等の割合で描かれている。ベッドスタイにおいては、黒人居住区における他人種との関係性が描かれていたが、『ジャングル・フィーバー』でのハーレム、ベンソンハーストはより閉鎖的で他人種を受け入れない街として描かれており、作品の随所からこの閉塞感を感じ取ることができる。一例とし

て、ハーレムのレストランでは白人のアンジー (Angela Tucci) を連れてきたフリッパーに対しウェイトレスの黒人女性が悪態をつき、他の客は白い目を向けている。またベンソンハーストでも、アンジーが黒人と関係を持ったという噂は瞬く間に広がり、アンジーの元配偶者ポーリー (Paulie Carbone) に皆が同情している様子がみられる。さらに、前章で述べたユセフ・ホーキンスの事件もベンソンハーストで起こっており、他人種を受け入れない街の様子を垣間見ることができる。そして、この作品内での対立は暴動のような直接的な衝突ではなく、他人種へのコンプレックスを元にしたコミュニティ内での摩擦という形で描かれている。

『ドゥ・ザ・ライト・シング』でのバギン・アウトが身も心も黒人らしくあることにこだわっていたように、『ジャングル・フィーバー』での各コミュニティにも人種に強く執着する人物がおり、反対に人種の壁を越えようとする人物も見受けられる。黒人コミュニティでの摩擦の例として、フリッパーと妻ドリュー (Drew) が言い争うシーンを挙げたい。2人は共通して肌の色にひどく執着している。フリッパーは彼を除く全員が白人という会社に勤めていたが、能力に見合った待遇を得ることができず、個の努力で人種を越えられないことを身をもって経験している。またドリューは、混血であるため肌の色が周囲より薄かったことをコンプレックスと感じており、自らは黒人だという自負がありながらも黒人になり切れない感覚を抱いていることが示唆される。フリッパーが彼女より白いアンジーと関係を持ったことで、黒人らしくあることにこだわっていたフリッパーにも白人女性への羨望があったという事実を目の当たりにし、自らのアイデンティティを否定されたと感じたのではないだろうか。フリッパーは会話の中で“Color’s got you fucked up too!”「君は肌の色に心まで負けてしまっている。」という言葉が発しているが、これはフリッパーにも当てはまることであり、男女の関係が人種を越えられないことが描写されている。

イタリア系コミュニティにおいては、ポーリーと彼の経営する店に来る客との摩擦を取り上げたい。ここに集う人々は若者から高齢者まで年齢はさまざまだが、皆黒人への偏見・憎悪を口にしてしている。当時のニューヨーク市長である民主党の黒人ディンキンズ (David Norman Dinkins) と敗れた共和党のイタリア系ジュリアーニ (Rudolph Giuliani) の選挙に関する会話の際、実際に投票していたのはポーリーのみであった。しかし、薬物で事件を起こし

たワシントン市長、後に冤罪と証明されたセントラルパークでのジョーガー性的暴行事件⁹など、当時問題となっていた黒人を引き合いに出してステレオタイプ化された黒人の劣等性を説き難癖をつけている。一方で、先陣を切ってポーリーに盾突いている青年は、政治的メッセージを前面に押し出したヒップホップグループ、パブリック・エナミー (Public Enemy) を好んでいる。黒人の中でも音楽、スポーツなどの才能がある人に対し例外的に興味を持っており、彼らの生み出したカルチャーを消費しながらもリスペクトはなく黒人を蔑視しているといえる。

対するポーリーは、白人至上主義者の父親と暮らしており、幼少期から黒人の劣等性を押し付けられていたことが推測できる。ポーリーは仕事に加え家事の一切を担っており、派遣として働きながら父や兄の世話をしていたアンジーと同様の環境下にある。アンジーの父親は彼女が黒人と関係を持ったことについて人殺しの方がマシだと激しく暴力を振るっており、これも黒人女性の元へ向かうポーリーを厳しく罵倒したポーリーの父と共通していることから、当時のベンソンハーストにおけるイタリア系の家庭ではこのような白人至上主義や家父長的関係が通例であったことが示唆される。そのような環境下でもポーリーは、本を読んで差別の歴史を学んでいるシーンにもみられるように、黒人に短絡的な対抗心を燃やすことはせず自身が学ぶことで人種観を創り上げている。彼は作品終盤、白人至上主義者の父親や働きもせず投票にも行かない青年らを置いて自立した黒人女性オリン (Orin Goode) のもとへ向かう。この描写は閉塞的なコミュニティからのポーリーの精神的離脱を示唆していると考えられ、淡々と歩を進める表情からもその意志の強さを読み取ることができる。人種間の対立という構図に重きが置かれていた『ドゥ・ザ・ライト・シング』と比較して、『ジャングル・フィーバー』では同人種間での世代の対立や同人種同年代での個々の対立も詳細に描かれており、より複雑化された摩擦が描写されているといえることができる。

第3章 作品のメッセージ性

第3章では、2作品の持つメッセージ性についてタイトルと挿入歌の観点から論じたい。はじめに『ドゥ・ザ・ライト・シング』について考察する。ここで問われているのは、何が“right”なのかということである。作中で“Do

the right thing.”「正しい事をしなさい。」という言葉を使うのはメイヤーただ 1 人だが、このメッセージは受け取る対象によって異なる解釈が必要となるだろう。人種差別主義者に対してこの言葉が投げかけられた際には、彼らが盲信する人種の劣等性への真偽や行いの善悪を見直し正すよう促していると捉えることができる。対して被差別側に向けられた際には、その行動が将来を見据えたものなのか熟考するよう訴えていると考えられる。とりわけこの作品においては、黒人が自らの地位向上を目指し取るべき行動を取れというメッセージだと言い換えたい。事なかれ主義のムーキー、女性でありながら自立して働くジェイド、現状の不平をこぼすばかりの中年男性 3 人組などコミュニティを形成する人物の多様性を描くことで、このメッセージがより際立っていると考えられる。

この作品のアンセムとも言える挿入歌「ファイト・ザ・パワー」(“Fight The Power”) はリーがパブリック・エナミーに依頼して制作され、ミュージックビデオの監修も務めたが、作品に止まらず差別に抗うための同胞へ向けたメッセージが集約されている。歌詞やミュージックビデオから数節を抜粋して分析したい。冒頭、“1989!”と力強く叫ぶ歌詞から曲が始まるが、これには公民権運動の時代から 20 年以上経っても状況が何も変わっていないことへの怒りが込められている。“Our freedom of speech is freedom or death”「言論の自由は生死にかかわる」という歌詞からは、警官の不当な取り締まりなどにより今日を生きられるか分からないという逼迫した状況を読み取ることができ、後の“What we need is awareness, we can’t get careless”という歌詞にもみられる無関心や受動的な態度でいることへの警句と捉えることができる。また、ミュージックビデオの冒頭、メンバーのチャック D (Chuck D) がリスナーに訴えかける場面では、“the march in 1963, that was a bit of nonsense . . . we rollin’ up with seminars, press conferences, and straight-up rallies. . . .”「1963 年のワシントン大行進はナンセンスだった [中略] 我々はセミナー、記者会見、直接抗議デモで立ち上がる [後略]」という台詞があり、人種問題への具体的な抗議方法が挙げられている。これらは暴力に訴えかけるようなものではないため作中の暴動は正しい方法ではなかったと解釈できるが、同時に目新しい方法でもない。キング牧師の非暴力不服従の姿勢を、マルコム X のような力強い雄弁さで説いているとも取ることができる。

以上のメッセージがラップという表現方法を取ることに、どのよう

な意味があるのだろうか。作中でラヴ・ダディ (Mister Senor Love Daddy) がヒップホップ、ソウル、R&B などさまざまなジャンルの黒人ミュージシャンを列挙するシーンからも読み取れるように、リーは音楽で黒人の新たな道を切り開いてきた先人たちへのリスペクトを強く抱いている。ジャズミュージシャンの父の影響もあり、リーの音楽の趣向はジャズに傾倒していた。これに関して池城美菜子は以下のように分析している。

「スパイク・リーはヒップホップ・ジェネレーションに属していない」という重要な点を指摘しておきたい。ヒップホップ・ジェネレーションとは、ヒップホップの誕生と盛り上がり強く影響を受けた世代で、一般的に 1965 年から 1984 年までの生まれ、現在の 30 台半ばから 50 代前半を指す。(中略) スパイクがジャズの人であるのは、91 年の『ジャングル・フィーバー』以来、ジャズ・トランペッターにしてコンポーザーのテレンス・ブランチャードを音楽監督に据えている点からもうかがえる。(ユリイカ. 118)

加えてリーは、ヒップホップの中でも金・ドラッグ・暴力などをテーマにしたギャングスタ・ラップを否定的に捉えていた。ではなぜ、この作品のアンセムにラップというジャンルを選んだのだろうか。大きなきっかけとなったのはパブリック・エナミーというグループの登場ではないかと考えられる。デビューアルバムのジャケット下部に“THE GOVERNMENTS RESPONSIBLE” 「政府に責任あり」と印刷したり、セカンドアルバム収録曲「ブリング・ザ・ノイズ」 (“Bring the Noise”) の中でルイス・ファラカンに言及したりと、政治的テーマを扱い NOI の教義やマルコム X の弁舌に影響された主張を発信している点において彼らは音楽シーンに革新をもたらした。ジャズと異なり、ラップという音楽は楽器がなくても成立する、つまり「言葉」無くして成立しない。このことからラップにメッセージ性が宿るのは必然と考えられる。ここに、リーは新たな抗議方法としてのラップの可能性を見出したのではないだろうか。「ファイト・ザ・パワー」には“Swinging while I’m singing” という歌詞があるが、まさにこの一節にパブリック・エナミーが放つラップの力強さにリーが自身の投げかける問題提議を重ね合わせたことが表現されていると考える。このようなアンセムが、警官によって殺害されたラヒームが

常時持ち歩くラジカセから作品の随所で流れることにより、作品全体として抗議の色が強く表れているという印象を創り上げている。

『ジャングル・フィーバー』においては、リーはスティーヴィー・ワンダー (Stevie Wonder) に「ジャングル・フィーバー」という挿入歌の制作を依頼した。これは作品に止まらない人種問題への抗議を声高に訴えた「ファイト・ザ・パワー」とは異なり、作品内のテーマである異人種間の恋愛を描写している。アップテンポなメロディーから受ける明るい印象とは裏腹に、人種の壁を超えることができない男女関係が描かれている。『ドゥ・ザ・ライト・シング』でサルがラップを“jungle music”と表現したことからも読み取れるように、“jungle”という単語はアフリカや黒人を連想させる。よって、肌の色が違う相手との関係を“Jungle Fever”によるものと表現することで、一時的な熱で判断能力が低下したことによる誤りと捉えている。『ドゥ・ザ・ライト・シング』でのラヒームが“LOVE”と“HATE”の戦いを語るシーンではラヴがヘイトに打ち勝ったが、この作品ではラヴがヘイトに敗れる様子が描かれている。

ワンダーは、生まれつき盲目ながらもその研ぎ澄まされた聴覚で幼少期からピアノ、ハーモニカ、ギターなどの楽器の技術を身に付け、11歳でモータウン・レコードと契約して以降もさまざまなジャンルの音楽を吸収し自らのスタイルを創り上げていった。彼も、キング牧師の誕生日を祝日とする法案制定を勧める「ハッピー・バースデー」(“Happy Birthday”)を1980年に、反アパルトヘイトの強烈なメッセージを表現した「イツ・ロング (アパルトヘイト)」(“It’s Wrong (Apartheid)”)を1985年にリリースするなど、作品の舞台となった1980年代に黒人の地位向上を目指すメッセージを音楽で発信していた。そんな彼にリーは現実を忠実に描いた作品の挿入歌制作を依頼したのである。“She can't love me, I can't love her / 'Cause they say we're the wrong color”「彼女は僕を愛せないし、僕も彼女を愛せない/皆が僕らは肌の色が違うと言うから」という歌詞に異人種間の関係性が集約されている。本人らは相手を心から愛しているつもりでも、周囲からの視線や長年にわたり形成された異人種間の関係を許さない社会の病理に気づかぬうちに冒されているため、潜在的に人種の壁を意識せざるをえないことが表現されている。“Everyone's created equal / Hell with all you ignorant people / Trying to stereo type us”という歌詞は、独立宣言を彷彿させる構文でありながら、ほぼ無意識的

に差別主義者となっている人々とも同じ空間を生きなければならないことへの苦言が呈されている。

一方で、今作品ではもう1曲「フィーディング・オフ・ザ・ラヴ・オブ・ザ・ランド」(“Feeding off the Love of the Land”)も依頼制作されている。これは「ジャングル・フィーバー」とは打って変わってスローテンポのバラード調である。タイトルは「御国の愛にすぎるだけ」と訳すことができ、無知で短絡的且つ身勝手な人々の行いが世界からラヴを奪っていることを示唆している。また“Living off the love of the Lord”「神の愛に甘えるだけ」という歌詞からは、厳格なキリスト教信者であり浮気・レイプ・殺人など全てを悪魔の仕業と考えるフリッパーの父が想起される。不平をこぼすばかりのイタリア系青年たちに加え、祈るばかりで行動を起こさないフリッパーの父のような人々にもリーは警句を促していたのではないかと考えられる。異人種間の関係を通じて描かれた、ラヴがヘイトに打ち負かされる様の無念さを表現しながらも、また自らの手で愛を世界に広げていくことの必要性を歌っていると解釈することができる。

2作品に共通してリーは、希望的観測を描くことを意図していない。『ドゥ・ザ・ライト・シング』では、力強い抗議メッセージを残しながらも物語はラヒームの死や暴動という暗い結末に終わっている。抗議方法に関しても、具体的手段を挙げているが革新的なものではない。『ジャングル・フィーバー』では、人種という厚い壁に阻まれる異人種間の関係をリアルに描いている。ポーリーとオリンの関係のみ、互いに心から愛することができており明るい将来が予想できるが、それはポーリーが人種差別主義の閉鎖的なコミュニティから離脱した上で成立するものである。また、最後にはフリッパーの娘もドラッグに侵されるという描写から、作品全体として楽観的に将来を描くものではない。実際にリーは『ジャングル・フィーバー』に関するインタビューの中で「異人種間のロマンスについて楽天的視点で描くことは私の仕事ではない」と答えている。以上のことから、リーは2作品を通して人種問題と闘うためのウェイクアップ・コールを同胞に届けることを目的としていたのではないかと考える。そして、現実を忠実に描いた彼の作品は同胞へのメッセージに止まらず、マイノリティの現状を知らしめることを通じ他人種へのウェイクアップ・コールとしても受け取ることができる。『ドゥ・ザ・ライト・シング』がラヴ・ダディの“Wake up!”を連呼する台詞から始まる

ように、現状に無関心なままでは作品にみるような暗い結末になるのだから早く目を覚まして「正しいこと」をしよう、憎しみを捨てて愛を持ち続けようと訴えようとしたのではないだろうか。

結論

本稿では、スパイク・リー作品より『ドゥ・ザ・ライト・シング』と『ジャングル・フィーバー』について論じてきた。第1章では当時のアメリカ社会における人種比率や薬物問題、実際に起こったヘイトクライムに言及し、1980年代のアメリカが人種間の緊張が高まっている時期にあったことを明らかにした。また、作品を考察するにあたり不可欠なキング牧師とマルコムXの思想を分析し、黒人登場人物の心境を紐解く手がかりとして提示した。第2章では、作品のストーリーに目を向け、白人対黒人に止まらないさまざまな対立構図を明示した。『ドゥ・ザ・ライト・シング』では白人対黒人という大枠に内在する同人種同世代間の考え方の違いが、『ジャングル・フィーバー』では異人種間の恋愛を介した同人種異世代間、同人種同世代間などの摩擦が描かれており、人種問題に対する認識の差異を個のレベルで捉えることができた。第3章では、タイトルや挿入歌に着目し、リーが作品にメッセージ性を宿すにあたり音楽を重要視していることを明らかにした。人種問題、薬物問題をはじめ、当時のアメリカ社会を忠実に描いたリーの作品は、敢えてハッピーエンドで終わらないことにより人々へのウェイクアップ・コールとしての役目を果たしていると結論付けた。

ここで、リーが映画を撮る動機について述べた高村峰生の言葉を引用したい。1915年に公開され、黒人をステレオタイプ化して犯罪者、レイピストというイメージを植え付け Ku Klux Klan の再生を呼び起こした映画『国民の創生』に言及しながら、以下のように語っている。

リーの言うように、『国民の創生』は南北戦争直後の南部における KKK を描いているだけではなく、新たな KKK 会員を勧誘するためのプロパガンダとして使われ、1920年代における KKK の猛威を用意した。映画は表象＝再現の装置であるだけではなく、実際の社会や政治を形成する重要なファクターである。「映画の父」が白人至上主義史の強力

なイデオロギー装置として機能してきた以上、黒人映画監督リーにとっての重要な課題の1つは「ファックユー」という「答え」を出し続けることにあったのだ。(ユリイカ. 63)

彼は自身の映画に、同胞たちを目覚めさせるためのプロパガンダとしての役割を持たせようとしたのではないだろうか。そして、1990年代前後を描いた彼の作品には現在とも繋がる点を見出すことができる。序論で述べたジョージ・フロイド氏の事件とそれに付随して起こった暴動は『ドゥ・ザ・ライト・シング』を彷彿とさせる。表面的な答えを提示するのではなく、本質的な解決に事態を導くためにはどうすればよいのかと問題提議をしている点において、2020年現在においてもこれらの作品を考察することは非常に有意義なことであったと考える。

注

- ¹ ロサンゼルス暴動 (1992年4月29日～5月4日) 1991年3月3日、スピード違反を犯したとして逮捕されたロドニー・キング (Rodney King) に対し、20人にも及ぶロサンゼルス市警の白人警官が激しい暴行を加える事件が起きた。キングが激しく抵抗したためやむをえなかったとの警官の訴えが認められ92年4月29日に不起訴処分、無罪判決が言い渡されたが、近隣住民が撮影した無抵抗なまま暴行を受けるキングの様子を捉えたビデオが報道されたことにより怒りが膨らみ、大規模の暴動に発展した。ラターシャ・ハーリンズ射殺事件の影響もあり、韓国系が営む商店が主に放火・略奪の標的とされた。沈静には州兵が派遣され、キング自身が平静を呼びかけたことや多人種がともに暴動への抗議集会を開いたことも重なりようやく事態が鎮まった。
- ² グリフィスの事件に関する裁判では、目撃者らが地方検事ジョン・J・サントゥーチへの協力を頑なに拒んだため、ニューヨーク市長マリオ・クオモが代役となる特別検査官を任命する事態が起こった。事件を公平に扱うにあたりイタリア系のサントゥーチは不適切とみられ、黒人活動家たちが彼を外すよう圧力をかけたことによる任命だった。ホーキンスの事件では、白人青年らの主導者とされていた青年が殺人ではなく武器の不法所持などの軽罪で有罪になったことや他の青年への軽い刑罰に怒りが募り、黒人コミュニティによる抗議行進が行われた。
- ³ キング牧師 1929年1月15日、ジョージア州アトランタに生まれる。1968年4月4日、テネシー州メンフィスでの演説を終えた後、貧しいアイルランド系の家庭に生まれた元軍人ジェームズ・アール・レイによって射殺された。
- ⁴ マルコム X 1925年5月19日、ネブラスカ州オマハに生まれる。1965年2月21日、NOI信者により暗殺された。1週間前には1度目の作戦が実行され失敗に終わっていたが、マンハッタンにあるオーデュボン舞踏場でのスピーチ中に射殺された。
- ⁵ 出典 キング牧師：Les Prix Nobel en 1964
マルコム X：“Communication and Reality” to Peace Corps on Dec 12, 1964
- ⁶ ブラック・ナショナリズム マーカス・ガーベイに代表され、白人劣等・黒人優位の思想を持つ。白人らしい装いをする黒人中産階級の価値観をも否定し、黒ければ黒いほど美しいと説いた。黒人に民族的自尊心を持たせるという意味合いがあった。

⁷ 1992年、マルコム X の自伝を基にリーが制作した映画『マルコム X』(Malcolm X)が公開された。

⁸ ラターシャ・ハーリンズ (Latasha Harlins) 射殺事件 1991年3月16日、韓国系が営む商店を訪れた当時15歳のアフリカ系アメリカ人少女ハーリンズが万引きと疑われ射殺された。店主に暴行を受けながらも支払いの意志を見せていたとの目撃情報があり万引きの事実はなかったが、彼女が引き下がり店を去ろうとした際に背後から発砲された。店主への刑罰は殺人にしては軽すぎるものであった。

⁹ 1989年4月19日に発生した、セントラルパークをジョギングしていた白人女性は何者かにより性的暴行を受けた事件。有色人種の少年5人が逮捕され、弁護士や保護者を付けないまま自白を強要するなど未成年に対して不当なニューヨーク市警による取り調べの末、証拠不十分にも関わらず有罪判決を受けた。2002年、事件の犯人と名乗る男が自白したことをきっかけに5人への有罪判決は棄却された。

参考文献

- Do the right thing. 1989. Directed by Spike Lee, Universal Pictures Japan, 2004.
- Jungle Fever. 1991. Directed by Spike Lee, United International Pictures, 1992.
- スパイク・リー・SKY-HI・綾戸智恵・荒このみ・吉岡正晴・ダースレイダー、
『ユリイカ 2019年5月号 特集=スパイク・リー — 『ドゥ・ザ・ライ
ト・シング』『マルコム X』『ブラック・クランズマン』・・・ブラック
ムービーの新しい目覚め— 』、青土社、2019年。
- 1990 Census of Population General Population Characteristics New York.
<https://www2.census.gov/library/publications/decennial/1990/cp-1/cp-1-34-1.pdf>. April 28, 1992.
- 1990 Census of Population General Population Characteristics California.
<https://www2.census.gov/library/publications/decennial/1990/cp-2/cp-2-6-1.pdf>. August 16, 1993.

『マグニフィセントセブン』における多様性

道廣 芽生

序論

1954年に公開された黒澤明の『七人の侍』は、国内外を問わず映画界に大きな影響を与えた。その6年後である1960年にアメリカ合衆国で公開された『荒野の七人』(*The Magnificent Seven*)は、『七人の侍』を西部劇としてリメイクした作品である。さらに、この『荒野の七人』をリメイクした同名の映画が2016年に公開された。本稿では、1960年に公開されたものを『荒野の七人』、2016年に公開されたものを『マグニフィセントセブン』と表記することにする。

時代劇である『七人の侍』がアメリカで西部劇としてリメイクされることは特段珍しいことではない。四方田犬彦は以下のように述べている。

... とはいえ日本の時代劇がまず最初にアメリカで西部劇に翻案されるのは、映画史的に考えてみてけっして不思議ではなかった。というのも戦前から時代劇はつとに西部劇の影響を強く受け、その翻案をもってジャンルとして興隆を遂げてきたからである。現に黒澤明にしても、西部劇映画の代表的監督であるジョン・フォードの大いなる讃美者であって、フォードの雄大な形式の影響を、機会あるたびに公言してきた。『荒野の七人』はその意味で、二つの大ジャンルの間での先祖返りの現象であると理解できる。(四方田 28-29)

このように、時代劇と西部劇とは密接な関係があり、互いに強く影響し合いながら各国での地位を築き上げたのである。

大きく二度のリメイクを経た上で、『七人の侍』から『マグニフィセントセブン』へ変わらず受け継がれたテーマが、マジョリティにより圧迫されるマイノリティという構図と勝者は農民であるという点である。『七人の侍』では、ラストシーンで勘兵衛が「勝ったのは百姓たちだ。農たちではない。」と言うセリフが印象的である。

ゆっくり暗転して田植えの場面。勘兵衛がつぶやく。「今度もまた負け戦だったな。…いや、勝ったのはあの百姓たちだ。…おれたちではない」。シナリオによれば勘兵衛の科白は次のように続くはずだった。「侍はな…この風のように、この大地の上を吹き捲って通り過ぎるだけだ…土は…何時までも残る…あの百姓達も土と一緒に何時までも生きる」。巡礼を続けねばならぬ三人の根無し草の侍とは異なり、百姓には土という確かな基礎がある。(岩尾 91)

このように、百姓達には自分の守るべき土地があり、それを子供の世代へと続けて生きてきた。それが行くあてもなく彷徨ってきた侍達とは異なり、またその姿こそが勝利であると語っているのである。

百姓や農民が勝者とされていることは共通のテーマであるが、『七人の侍』と『荒野の七人』、『マグニフィセントセブン』では描かれ方に差が出てきている。『荒野の七人』からは、守られる農民達がただの臆病者から、自分たちの家族を養い守ることに責任を持つという側面を持ち始めるのだ。これは劇中の“*You think I’m brave because I carry a gun? Your fathers are braver because they carry responsibility for you, your brothers, sisters, and mothers.*”「銃を持っているから俺が勇敢だと思っているのか？ お前たちの父親の方が勇敢だ。なぜなら彼らは君たちや君の兄弟、姉妹、母親たちの責任を負っているからだ。」(『荒野の七人』よりベルナンド (Bernardo) のセリフ) という発言からも分かる。これには、農民達に善良な人間という役割を持たせる効果があると考えられる。

『七人の侍』において非常に重きを置かれているポイントが百姓というマイノリティを作り出したのが侍であるという点である。これは劇中の菊千代のセリフによって語られる。

… 「よく聞きな…百姓ってのはな…けちんぼで、ずるくて、泣き虫で、意地悪で、間抜けで、人殺しだア!!ちくしょう、おかしくって涙が出らア……だがな…そんなけだものつくったのは、誰だ？…お前たちだよ!!…侍だってんだよう!!……ばかやろう！…戦のたびに…村ア焼く…田畑踏ン潰す…食べ物ア取り上げる…人夫にゃこき使う…女アあさる…手向かやア殺す…おい！…いったい百姓はどうすりゃいいんだよ

う...ちくしょう、ちくしょう...」。(岩尾 72)

ここから、百姓が良い人間として描かれておらず、また助けを求めた侍によって百姓たちは苦しめられていたのだという複雑な構図になっていたことが分かる。そして、この構図こそが『七人の侍』において重要なテーマになっているのである。また、百姓が良い人間として描かれていないことに関しては四方田が以下のような指摘をしている。

野伏せとの戦闘が終わってしまえば、百姓にとって侍などもはや何の意味もないという事実が、ここで白々地に語られているのだ。それを強調しているのが、志乃と勝四郎に対する無視の態度である。彼女にとって重要なのは現実の田植えであって、侍とのラヴロマンスではない。戦いは表向きは野伏せと侍の間で行われたように見えるが、実のところは百姓と侍の間でなされたのであった。百姓は望み通りの村の安全を勝ち得、侍は同士の半数以上を喪失した。百姓は当初の目論見どおり、侍を巧みに利用することに成功したのである。勘兵衛が口にする「敗戦」とはそのような意味であった。(四方田 175)

このように、『七人の侍』は一見すると野伏せから貧しい農民を助けるという勧善懲悪の物語であるが、複雑な構造をしており、マジョリティやマイノリティの存在自体への疑問を持ちかける奥深さがある。

しかし、『荒野の七人』や『マグニフィセントセブン』では、単純にマジョリティに苦しめられるマイノリティに救いの手を差し伸べるという構図に変わっている。そして、その構図を際立たせるに当たって、農民に善性が与えられたのではないかと考えられる。つまり、善良な農民達を追い詰める魔の手から救うという勧善懲悪の物語の要素がより強くなったのである。また、ハリウッド式の物語におけるステレオタイプの・通説的設定が反映されていると見ることができる。これは、アメリカ社会に深く根付いている人種などのマイノリティの問題を作品に入れ込むに当たって、より観客にわかりやすく、馴染みのあるものになった結果であると言えるだろう。

『マグニフィセントセブン』において注目すべきポイントは、主人公の七人全員がマイノリティで構成されているという点である。このマイノリティ

とは、人種に限らず様々な要因からマイノリティに属しており、ここには 21 世紀の現代アメリカ社会における多様性を表現していると考えられる。この映画のプロットが長年にわたり世界中に親しまれ、リメイクされるようになった要因の一つとして、このように時代背景に合わせて、柔軟に内容を変化させて製作されてきたということが挙げられる。舞台は同じ 19 世紀のフロンティアにあったとしても、常に公開される年代の背景を汲み取り、アップデートされているのである。

本稿は、『マグニフィセントセブン』を用いて、西部劇という映画のジャンルがいかに世相を反映して形作られた作品であるか、また今作がどのように現代アメリカ社会の多様性を投影しているかということについて論じていく。第一章では、西部劇というジャンルが 19 世紀アメリカを舞台にした作品にも関わらず、製作された当時の時代背景を吸収して描かれてきたということについて、具体的に西部劇を例に用いながら論じる。第二章では、『マグニフィセントセブン』に反映された 21 世紀アメリカ社会の多様性に焦点を当てて論じる。ここでは、人種のマイノリティの他にも、社会的な要因からマイノリティに属している登場人物にも触れていく。そして結論では、『マグニフィセントセブン』を通じ、多様性であふれた現代アメリカ社会のメディアにおけるマイノリティの描かれ方について考察していく。

第 1 章

この章では西部劇がどのように製作当時の社会背景を反映させながら作られてきたかを、1960 年の『荒野の七人』、1985 年の『シルバラード』(*Silverado*)、1992 年の『許されざる者』(*Unforgiven*) を比較しながら考察していく。その上で、これらの年代において重要になる、1960 年から活発化する公民権運動についても触れながら論じていく。

西部劇とは主に 19 世紀後半のフロンティア開拓が進められていたアメリカが舞台となっており、20 世紀の初頭から盛んに製作された映画のジャンルの一つである。1960 年以前の西部劇の多くが、パイオニア精神に溢れる白人が無法者の先住民と対決するという単純な勧善懲悪物語であった。ここでの白人は、人種的にマジョリティとされていた白人のことを指す。さらに、先住民を悪役に置いた映画は、白人の都合のいいように史実とは異なった形

で製作された。

しかし、この後 60 年代から活発化した公民権運動の影響により、西部劇の描かれ方もそれまでとは大きく変わることとなる。『荒野の七人』は、この運動の活発化した最中に公開されており、過渡期の作品と言える。内容は白人が無法者と戦うというこれまでの流れを汲んでいるが、マイノリティに対する差別的な描写は見られない。しかし、白人がメキシコ人を守るという構図は進歩的であるとは言えない。それまでの「先住民を倒す白人」という構図と「メキシコ人の盗賊団を倒す白人」の構図は、白人から見て他者となる敵を懲悪するという面において変化は見られないからである。

1985 年に公開された『シルバラード』を例に見てみる。『荒野の七人』などに見られていた白人が中心として描かれた西部劇と比べると、黒人であるマル (Mal) が主人公のうちの一人名として描かれるようになったことから公民権運動の影響を受けていることは明白である。さらに、黒人のマルが酒場で不当な扱いを受け、土地の権利が脅かされていたマルの父親が殺されるなど、不平等な扱いを差別的であると観客に強く訴えかけるような描写が多く見られる。ここから、当時の社会において観客に、黒人への差別的な描き方を不平等だと感じる共通認識があることがわかる。

さらに、1992 年に公開された『許されざる者』では、マイノリティの描き方への変化が見られる。この作品にも、人種的にマイノリティと言えるキャラクターが登場する。ネッド (Ned) とネッドの妻は、黒人と先住民というマイノリティにあるが、作中ではあまり言及されていないことが分かる。特にネッドは、三人組の特徴を述べられる時でさえ馬の特徴をあげられただけで、黒人であることに言及されなかった。

ここには、先述した作品との違いが見られる。1980 年代に描かれた権利を主張する黒人という姿はある種のステレオタイプとして映るようになったのではないだろうか。『許されざる者』において一番重要度の高いテーマは、殺人を犯した人間が自分とどう向き合うかというテーマである。人種以外のことを重要度の高いテーマとして捉えている映画作品において、人種について言及することは作品に内在するテーマを不鮮明にする恐れがあるのではないかと考えた。こうした人種的にマイノリティである俳優を起用することで作品のテーマをぶれさせるリスクを背負っていても、そのような俳優を起用することが今日の映画作品においてのスタンダードとなっているこ

とは明らかである。これらのことから、西部劇という映画のジャンルには、19世紀後半が舞台となっているにも関わらず、公開される年代の時勢を大きく反映されているということが分かる。

この章では、『荒野の七人』、『シルバード』、『許されざる者』を用いて各年代の背景が西部劇に影響を及ぼしていることを確認した。その中でも、マイノリティの描かれ方は年代によって顕著に変化を繰り返していることが見てとれる。次の章では、『マグニフィセントセブン』において描かれている多様性について論じる。2016年に公開された本作ではどのようなアメリカ社会が反映されているのだろうか。

第2章

第二章では、『マグニフィセントセブン』に見られる多様性について論じていく。初めに人種の多様性について論じ、次に人種以外のマイノリティについて考察する。『マグニフィセントセブン』はリメイク元の『荒野の七人』と異なり、主人公の七人全員がマイノリティに属しているという重要な変更が見られる。その次に『マグニフィセントセブン』に見られる宗教観について考察し、最後に劇中で見られたパートナーシップについて考察する。

『マグニフィセントセブン』で描かれている登場人物の多様性のうち、人種に着目して考える。七人のメインキャラクターのうち、マイノリティに属するのは黒人のサム・チザム(Sam Chisolm)、東洋系のビリー・ロックス(Billy Rocks)、メキシコ人のバスケス(Vasquez)、先住民のレッド・ハーヴェスト(Red Harvest)である。

まず初めに黒人のチザムは、黒人でありながらも劇中で一度も **black** という人種をほのめかす呼び方をされていない。チザムの身につけている衣装は黒づくめで、彼の馬までも黒で統一されているにも関わらず、一度も **black** という単語は出てこない。チザムは委任執行官という地位のある職を持っており、マイノリティとして描かれていない。このことはアントワーン・フークワ(Antoine Fuqua) 監督の解説からも読み取ることができる。“One of the things I wanted to do is challenge the audience on how they perceive race. Does a man walk into a bar and everything stops because of the color of his skin or because he’s a gunslinger?” 「私がやりたかったことの 하나가、観客に人種をどのよう

に認識しているか挑戦することだ。バーに入って(客が)動きを止めるのは、その男の肌の色のためか、または銃の名手だからか。」(副音声付き本編より監督の解説)と語っている。ここでの監督の挑戦とは、映画の中ではチザムが黒人であるということを他のキャラクターは殆ど意識しないように描かれているが、それを見た我々観客が黒人のガンマンと認識するか、劇中のキャラクターのように凄腕のガンマンだと認識するかという挑戦だと考えられる。

次に、東洋系のビリーについて考察する。彼はチザムに“My manservant. He’s harmless. Saved his life in Shanghai.”「私の召使いだ。無害だよ。上海で命を救ってやったんだ。」(本編よりチザムのセリフ)と紹介されるシーンがあるが、これは敵を油断させるためにこのような言い方をしているのもあって、差別の意図は感じられない。また、メインキャラクターの一人であるグッドナイト・ロビショー (Goodnight Robicheaux) の会話から、かつて大陸横断鉄道を建設するために中国から苦力として渡米し、白人から差別を受けていたことがわかる。

メキシコ人のバスケスは、劇中でメインキャラクターの一人であるジョシュ・ファラデー (Josh Faraday) からスペイン語でメキシコを表すメヒコ (Mejico) と呼ばれているが、この二人の間に上下関係は全く見られない。また、あだ名のように定着しからかいあう様子からも対等な関係が築かれていることが分かる。

最後に、先住民のレッド・ハーヴェストはコマンチ族の青年である。彼は初登場のシーンでは恐れられ、銃を向けられるがコマンチの言葉が分かるチザムとの会話で仲間に加わった後は、他のキャラクターと同じように仲間として扱われる。特筆すべきシーンとして“**He asked that you kindly stop staring at his hairline.**”「生え際を見つめるのをやめてくれと言っている。」(本編よりチザムのセリフ)という部分が挙げられる。このシーンは、食べ慣れない白人の豆料理を犬の餌のようだとコマンチの言葉で言ったレッド・ハーヴェストに対し、コマンチの言葉が分からないジャック・ホーン (Jack Hone) がチザムに尋ねたことに対する答えである。これは、かつて先住民の頭の皮を政府に売ることによって生計を立てていたジャック・ホーンと言葉の通じないレッド・ハーヴェストをからかっている。しかし、ここにも差別的な意図は感じられず、あくまでも冗談の範疇を出ない。ちなみに、この当時は頭の皮を剥

がされるのは白人であるという俗説の方が流布していた。また、レッド・ハーヴェストはコマンチ族から追い出される形で旅をしていた。戦闘シーンで部族の特徴的な化粧をしながら、銃を使う場面がある。これは彼がそれまで育ったコマンチの伝統的な文化を継承しているが、西洋の文化とも折り合いをつけて順応しようとしている様子がわかる。コマンチ族は騎馬に優れた民族で、西部開拓を進めるにあたりアメリカ政府とたびたび戦闘が起こった。

平和委員会の活動は一定の成果を収め、南西部のネイティブ・アメリカンの諸部族もいくつかの保留地に納められた。しかしながら、遊牧生活を放棄し農耕生活に定着することは極めて困難であり、先住民たちは再び戦いに立ち上がった。シャイアン、アパラホ、コマンチはブラック・ケトル (Black Kettle; 1803-1868) の指導のもとカンザスで猛威を振るった。これに対してフィリップ・シェリダン将軍 (Philip Henry Sheridan; 1831-1888) は 1868 年 11 月 26 日夜襲をかけブラック・ケトルを含む 103 人の先住民を殺害した。(吉浦 161)

レッド・ハーヴェスト自身は映画のラストシーンでチザムやバスケットとともに旅立つことからわかるように、当時アメリカ政府との戦いを選んだ自分の民族とは離れどちらでもない生き方を選ぶ。これは自身の文化を捨てることはできないが、住む場所を奪われるこれからの先住民としての生き方に未来がないと悟っていると考察した。レッド・ハーヴェストは先住民というマイノリティに属しながら、1879 年からみて今後多くの先住民が要求される西洋文化との折り合いを先取りしたキャラクターという役割を担っていると考えられる。

序論でも触れたように、『マグニフィセントセブン』では七人全員がマイノリティで構成されている。人種に関しては先述した通りであるが、他の要素からマイノリティであると考えられる三人について考察する。

ファラデーは白人のガンマンだが、アイルランド系アメリカ人である。当時のアメリカにおいてアイルランド人はカトリック教徒であることを理由にマイノリティの立場にあった。また、当時のアイルランド系アメリカ人は黒人より下に位置付けられる場合があった。

映画の舞台は 1879 年であり、南北戦争が終わってから 14 年後という位

置付けである。グッドナイトはかつて南軍の英雄として活躍したが、戦争が終わると敗戦側というマイノリティに属することとなった。また、PTSDを患っていることもマイノリティである要素と言えるだろう。

ジャック・ホーンはかつて、先述した通りクロウ族の頭皮を政府に売ることによって生計を立てていた伝説のマウンテンマンであったが、フロンティアの消滅が近づき、政府が買い取りをやめたことで無職になってしまった。この無職であるという状態はマイノリティに属すると考えられる。

以上のことから、『マグニフィセントセブン』における主人公七人のキャラクターは、人種や社会的要因なども含め、様々なマイノリティに属していると考えられる。しかし、劇中の会話から互いの関係性は対等であり、仲間内でマイノリティであることには触れられないという描き方をされている。ここから19世紀のアメリカを舞台に置きながらも、現代の価値観を反映させていることが分かる。本来ならば差別されていたはずの七人が対等に扱われているという描写は、19世紀のアメリカにおいては不自然である。フーリア監督が観客に登場人物をどのように捉えるかを挑戦したことを加味すると、この七人の仲間内での態度は多様性溢れる現代のアメリカでの理想の姿なのではないだろうか。つまり、出身や人種、宗教などに関わらずフラットな人間関係を構築している七人は、19世紀のアメリカ人ではなく、21世紀のアメリカ人を体現しているのである。

『マグニフィセントセブン』における宗教観について考察する。映画冒頭で悪役の資産家バーソロミュー・ボグ (Bartholomew Bogue) が“*This country has long equated democracy with capitalism, capitalism with God. So, you’re standing not only the way of progress and capital. You’re standing in the way of God!*”「この国は長い間、民主主義を資本主義と、資本主義を神と同一視してきた。だからお前たちは進歩と資本だけでなく、神の邪魔をもしているのだ。」(本編よりボグのセリフ)と言っている。これは、金を採掘するために村人たちを立ち退かせ、村を強奪しようとしている自分の行いを正当化している。つまり、ボグはキリスト教を自分に都合のように解釈し、利用していると分かる。“*If God didn't want 'em sheared, he wouldn't have made 'em sheep.*”「神が彼らを生かすつもりなら、彼らを羊などにはしなかった。」(本編よりボグのセリフ)という発言からも、弱い人間は自分のような強者の糧になるために存在しているという彼の傲慢な性格が読み取れる。さらに、

そこに宗教を持ち込みまるで自身の行いが正しいことであるかのように振舞っているのだ。また、最後のシーンでチザムに追い詰められ、殺されそうになる際に教会に逃げ込んでいる。映画の冒頭で教会に銃を持ち込み、教会の目の前で人を殺したにも関わらず、“You a God-fearing man? Huh?” 「お前も神を恐れるだろう？」（本編よりボークのセリフ）と言っており、彼が宗教を完全に逆手にとって利用している様が見られる。そして、命乞いをするふりをしてだまし討ちのチャンスを狙う。これらのことから、彼にとって信仰は自分の私欲のために利用するものであったことが分かる。

このような考え方は、奴隷制度をキリスト教により正当化していた 19 世紀初頭での考え方と共通していると言える。

... 当時南部の教会の大多数はメソヂストないしバプティストに属していたが、奴隷制度擁護のために活躍した宗教家は数多くいる。彼らの奴隷制正当化の理屈、議論は概ねこういうことになる。すなわち、奴隷制はギリシャ、ローマの時代から西洋社会に根づいているものであり、聖書においてその存在は当然のものとされ、イエス・キリストにしてもローマに厳然として存在していた奴隷制の問題に関して何も言っていない。むしろ、特定の社会の秩序を何の矛盾もなく構成する主人と奴隷というヒエラルキーがキリスト教的な意味合いにおいて立派に安定的に構築されることこそが、求められるべきである。（高野 215-216）

以上からも読み取れるように、19 世紀アメリカにおいてマジョリティが利益を得るためにマイノリティを圧迫する際、キリスト教を都合よく解釈するという事は頻繁に行われていた。これは、アメリカを植民地として開発する際にスローガンともなった **Manifest Destiny** 「明白な運命」の精神が深く根付いているからである。劇中においてマジョリティである白人の資産家ボークがキリスト教を歪めて解釈していることは、19 世紀の知識層にとってはむしろ当然のことなのかもしれない。

一方、作中で最も信仰心の篤いジャック・ホーンは、戦闘中ですら聖書を引用して唱えている。彼の行き過ぎた信仰心は、自分の行いが正しいことであると信じきっていることを表している。また、自身の行いに対する救いを

強く祈るがゆえに盲目的なほど信仰が篤く、現代の感覚からは大きくずれている。以上のことから、信仰が篤いとはいえ、ジャック・ホーンは善であるとも悪であるとも断定できない立場にある。ここには、多くのハリウッド映画で見られたキリスト教を信仰する人間が必ず善であるというステレオタイプからの脱却を試みているのではないだろうか。

劇中に描かれたパートナーシップについて考察する。グッドナイトは南北戦争で“The angel of the death”「死の天使」という二つ名を持つほどの凄腕のスナイパーとして活躍していた。しかし、その影響で PTSD を患っており、劇中で時折“The owl followed me here.” “I heard the voice.” 「フクロウの声が追いかけてくる。」（本編よりグッドナイトのセリフ）と言っている。そしてビリーはグッドナイトが幻聴を聞くたびにアヘンを分け与え、安定させている。一方グッドナイトは、戦争での名声や白人という自分の立場により東洋人のビリーを差別から守っている。このように、この二人は当人同士で対等な共依存関係を成立させている。

さらに、この二人の関係を特別なパートナーシップの関係であったのではないかと考えられる点に、ソドムとゴモラの引用が挙げられる。劇中のワンシーンでジャック・ホーンがこれから戦場になるローズ・クリーク（Rose creek）を見て“So melt the elements, with fervent heat. Like Sodom and Gomorrah.”

「諸々の元素は猛烈に熱せられて溶け、ソドムとゴモラの町のように滅びるだろう。」（本編よりジャック・ホーンのセリフ）と語る場面である。このとき、グッドナイトとビリーは一瞬目を合わせ、すぐにそらす。ソドムとゴモラとは、旧約聖書の創世記に登場する町のことを指し、このセリフでの“So melt the elements, with fervent heat”は旧約聖書の“*But the day of the Lord will come as a thief in the night; in the which the heavens shall pass away with a great noise, and the elements shall melt with fervent heat, the earth also and the works that are therein shall be burned up.*” 「しかし、主の日は夜の盗賊のようにやって来ます。その日、もろもろの天は大きな音と共に過ぎ去り、もろもろの元素は猛烈に熱せられて溶け、地とそこでの業とは焼き尽くされるでしょう。」

（『創世記』「ペドロの第二の手紙 3」より一部抜粋）の引用である。この神話は度々同性同士の恋愛や男色を示す場合がある。ジャック・ホーンは意図して発言したようには見えないが、この言葉を聞いた直後に二人が目を合わせる様子は隠喩的・示唆的であると考えられる。もちろんこれだけでは二人

が恋人関係にあったとは断定できないが、多様性に重きを置いて考える上で彼らはただのパートナーではなく、同性愛者的な側面を持っていたのではないだろうか。

以上のことから、『マグニフィセントセブン』では、人種以外にも宗教観や同性愛といった 21 世紀アメリカ社会の多様性を多く取り入れ、反映された映画であることが分かる。1960 年に『荒野の七人』としてリメイクされたから 56 年経ち、その間に様々な変容を遂げたアメリカの情勢が『マグニフィセントセブン』に大いに影響を与えたのだ。

この章では『マグニフィセントセブン』における多様性に着目した。主に登場人物のマイノリティ、作品の宗教観、また作品内に描かれたパートナーシップについて詳しく論じた。この作品では、主人公全員がマイノリティに属しているという特徴がある。ここには、アメリカ社会における人種の多様性を表現しようという試みを見ることができる。また、異なる宗教観を持つ登場人物やパートナーシップの関係にあるキャラクターからも、作品内における登場人物の多様性が富んでいることが分かる。

結論では『マグニフィセントセブン』がリメイクされたことによって現代の社会情勢を色濃く反映させた作品であったことを再度確認し、また作品から読み取れるアメリカ社会の課題について考察していく。

結論

以上の事から、『マグニフィセントセブン』は、19 世紀の西部劇を描く上で、過去のリメイク作品である『荒野の七人』とは異なり、マイノリティを主人公に置いている。これは『荒野の七人』では描かれなかった 19 世紀アメリカの人種的な多様性を表現することを可能にし、旧来のハリウッド西部劇でのステレオタイプから脱却することを成功させた。また、仲間内での偏見のある表現をなくすことで、21 世紀の多様性を認めるという新たな動きを取り入れていると考えられる。さらに、様々な人種が集結し資本主義と戦うという構図は、現代のアメリカで資本主義によって苦しめられている多様なルーツを持つアメリカ人たちの様子を象徴していると考えられる。

現代、映画作品の多くに多様な人種のルーツを持った俳優を意図的に配役するというケースが増えてきている。これらのムーブメントに対し、必要以

上に多様な人種の俳優を起用することは史実に反しているというような、ポリコレに配慮しすぎているが故の配役なのではないかという見方をする場合も少なくはない。また、白人が中心であった往年の西部劇のイメージが強く残る観客は、ポリコレの影響で西部劇に様々な人種の俳優を起用しているのだと考えるケースも多い。しかし、『マグニフィセントセブン』における配役はこれに当てはまらないと言える。舞台となった19世紀前半のアメリカには実際に多くの人種が存在しており、すでに多様性があったと言えるからである。

さらに、チザムのようなマイノリティであっても委任執行官という社会的地位をもつ黒人も実在していたことがわかる。2016年9月30日に投稿されたQuincy LeNearによるHuffpostの記事“The Seven Magnificent Historic Facts Behind The Magnificent Seven”によると、バス・リーブス（Bass Reeves）という実在した黒人の保安官がチザムのモデルであると言われている。さらに、チザムという名前に注目すると彼がいかに立場のある人間として描こうとしている意図に気がつくだろう。

... 映画や民謡でお馴染みのチザム・トレールというものがある。これはジェシー・チザムが開発したルートである。チザムは、スコットランド人の父とチェロキー族の母の間に生まれた混血児である。テネシーで生まれ、一八二〇年代は西部地方をさまよい、一時はアーカンソーの北西部に住むチェロキー族の部落で暮らしたことがあった。後に西部の辺境で交易に従事していたが、彼のインディアンの風俗習慣や言語についての深い知識（十四の異なるインディアン部族の言語を話すことができたと言われている。）が、アメリカ合衆国の陸軍に重宝され、インディアンの酋長とアメリカ合衆国の役人との重要な会議でたびたび通訳を務めた。（鶴谷 109）

このように、西部開拓において先住民との架け橋となった実際の人物の名前を黒人の主人公に使っている。劇中でもコマンチ族の青年、レッド・ハーヴェストとコマンチ族の言葉で会話するシーンが見られることから、サム・チザムというキャラクターは実在した黒人の保安官バス・リーブスと先住民とアメリカ合衆国の架け橋となったジェシー・チザムをモデルにして作られ

たキャラクターだと考えられる。つまり、サム・チザムは劇中においてマイノリティに属してはいるが社会的立場を持つ保安官であり、さらに様々なルーツを持つ七人の架け橋の役割も果たしているのだ。

この作品の配役における人種の多様性は実際の 19 世紀アメリカの人種の多様性を表現したものである上、キャラクターの社会的立場においても史実をベースとして作られたものである。これらを踏まえて、この作品が偏ったポリコレによる配役がなされた映画だという見方は不適切である。

『荒野の七人』から『マグニフィセントセブン』への変化において最も印象的な描写を挙げるとすれば、ラストシーンであろう。『荒野の七人』ではチコ (Chico) は農民の娘ペトラ (Petra) と結ばれハッピーエンドを迎える。一方『マグニフィセントセブン』では『七人の侍』のように仲間を弔い、去って行く。なぜ『マグニフィセントセブン』はハッピーエンドではないのだろうか。これは、現代アメリカ人の疲れが表現されているのではないだろうかと考えた。マイノリティが資本主義と戦うという構図は、アメリカが誕生してから現代に至るまで長きに渡って続いてきた永遠のテーマである。この終わりの見えない戦いに対する疲れや諦めがラストシーンで表現されているのではないだろうか。また、チザムはボークに対し、復讐を果たすことができなかった。これも、長い間差別を受けながらも耐え忍ぶことを強要されてきた、アメリカに生きるマイノリティを思わせる描写である。2009 年に就任した初の黒人大統領であるバラク・オバマへと託した希望があまり叶えられなかったことも、アメリカ人の疲れを助長する結果となったのかもしれない。この就任から 7 年後に公開された本作がそれらを反映させているのである。

アメリカ社会において差別の問題は非常に重要であり、人々はメディアという公の場での描かれ方に対して非常に敏感になっている。しかし、権利を主張する黒人という構図がもはやステレオタイプになってしまったように、敏感に指摘しすぎることが差別の問題を解決する糸口とは言えない。ポリコレに配慮し、言葉の表現を気にしすぎるということは結局、表面的な解決に過ぎず、本質的な問題の解決とは別の話であるという気がしてならない。『マグニフィセントセブン』では、史実上で実際にあった多様性を映画の中でフラットな関係で描き、あえて必要以上にマイノリティへの言及を削っている。これこそがこの作品における最大のテーマであり、現代のアメリカ社会にお

いて目指すべき形なのではないだろうか。

参考文献

Silverado. Directed by Lawrence Kasdan, Columbia Pictures Industries, Inc., 1985.

The Magnificent Seven. Directed by John Sturges, United Artists Corporations, 1960.

The Magnificent Seven. Directed by Antoine Fuqua, Metro-Goldwyn-Mayer Studios Inc., 2016.

Unforgiven. Directed by Lawrence Kasdan, Warner Bros. Entertainment Inc., 1992.

The Seven Magnificent Historic Facts Behind The Magnificent Seven. LeNear, Quincy. Huffpost. Web. 30 September, 2016.

〈https://www.huffpost.com/entry/the-seven-magnificent-historic-facts-behind-the-magnificent_b_57ed8648e4b095bd896a097f〉

(Retrieved on 20 October, 2020)

岩尾龍太郎「黒澤明：『七人の侍』はなぜ面白いのか」『西南学院大学 国際文化論集』第23巻 第1号、2008年、43-92頁。

黒澤明『七人の侍』東宝株式会社、1954年。

高野一良『アメリカン・フロンティアの原風景』風濤社、2013年。

鶴谷壽『カウボーイの米国史』朝日選書、381、1989年。

吉浦潤次『映画でなぞるアメリカ史』ウインかもがわ、2009年。

四方田犬彦「『七人の侍』と現代 — 黒澤明 再考」岩波新書、2010年。

創世記 ペドロの第二の手紙 3、KJV版。

〈https://biblehub.com/kjv/2_peter/3.htm〉 (参照日 2020年11月7日)

ジェーンの人生、3つのターニングポイント
ー グレアム・スウィフト『マザリング・サンデー』を読み解くー
高濱 和優

序論

英国作家グレアム・スウィフト (Graham Swift) の中編小説『マザリング・サンデー』 (*Mothering Sunday*) は2016年に出版され、2017年には「最良の想像的文学作品」 (the best work of imaginative literature) に与えられるホーソーnden賞 (Hawthornden Prize) を受賞した作品である。この物語を一言で表すならば、主人公であるメイドのジェーン・フェアチャイルド (Jane Fairchild) が繰り広げるシンデレラ物語だ。しかし本書はただのシンデレラ物語ではない。庶民のジェーンが、イングランドの理不尽な階級制度、そして自分自身の愛と欲に正面から立ち向かっていく生き様が描かれているのである。主に語られる時代は戦間期と呼ばれる、第一次世界大戦と第二次世界大戦の間の時代である。また、本書の特徴的な点として、途中で70歳、80歳、90歳になったジェーンのインタビューの内容が挟み込まれている点が挙げられるだろう。

メイドに許された年に一度の里帰りの日 (マザリング・サンデー)、孤児であったジェーンには訪ねるべき母親はいない。1924年のマザリング・サンデー、3月30日、ジェーンが秘密で付き合い始めて八年になろうとしているシェリングガム家の息子ポール・シェリングガム (Paul Sheringham) に呼び出され、体を重ねた。ポールには婚約者がおり、二週間後に結婚することが決まっているため、二人で会うのは最後になるかもしれないと考えるジェーン。しかし不運にもポールはその日に交通事故で亡くなってしまう。一日の間に生涯忘れられない喜びと喪失を失った彼女はなにを思い、どんな覚悟でその後の人生を歩んでいったのだろうか。

本論文では、後に作家として大成したジェーンが人生を送る中で作家になった瞬間として本書内で表現されている“*And that, you might say, was when she really became a writer. The third time. As well as at birth. As well as one fine day in March, when she was a maid.*” 「そしてこれも、彼女が本当に作家になった瞬間だったと

言える。三度目に。生まれたときが一度目。まだメイドをしていた三月のある晴れた日が二度目なら」(114) という記述を基に、ジェーンの三度にわたる人生のターニングポイントを振り返りながら、彼女の想いや人生観、そして、なぜジェーンは人生を切り拓いていったのかについて考察する。また、本書の作者であるグレアム・スウィフトは、一見何気ない市民生活の様子を文章に組み込みながら、過去と現在の絡み合いや、その背後に潜む人間の内なる部分を描くことに長けた作家である。ここに着目して、本論文では戦間期やそれ以前の社会状況、市民生活とジェーンの置かれている環境を比較することで彼女の人生についての考察を深めていく。第1章ではジェーンが一度目に作家になった瞬間とされている生まれた時に焦点を当てて、当時の孤児、孤児院、児童を守る法律などに言及しながら論じる。第2章ではジェーンが二度目に作家になった瞬間とされている1924年のマザリング・サンデーの日に焦点を当てて、ジェーンとポールの関係性やポールの死の意味に言及しながら論じる。第3章ではジェーンが三度目に作家になった瞬間とされているパクストン書房の店主パクストン氏 (Mr. Paxton) からタイプライターを譲り受けた時に焦点を当てて、当時の教育制度やタイプライターについて言及しながら論じる。

第1章 孤児という境遇に屈しない人生

本章では、ジェーンにとっての母親の存在や孤児として生きることの現実を明らかにしながら、ジェーンがどんな想いで子ども時代を過ごしてきたのか、そして生まれた時が本当に作家になった一度目の瞬間であったのかを考察する。

ジェーンが孤児であったことは序論でも触れたが、ただの孤児ではなく捨て子であった。

でははじめに、捨て子院の歴史を確認しておこう。本書では孤児院と表記されているが、孤児院の先駆けとなる施設の名称が捨て子院であるため、本論文において歴史の確認でのみ捨て子院と表現する。イギリスで初めて捨て子院が創設されたのは1741年である。しかし収容されたのは路上に遺棄された捨て子ではなく、母親が子どもの受け入れを請願し、審査で認められた子どものみが収容された。審査対象は母親である。受け入れの条件に関して中村勝美は『保護と遺棄

の子ども史』において次のように述べている。

受け入れの条件は、女性が「救済に値する」ことであり、具体的には、長年の恋愛の末、相手の男性が職を失い転居してしまい望みどおり結婚に至らなかったケース等である。捨て子院の収入役によると、重視されるのは「母親の経済力問題ではなくむしろ人柄」であった。19世紀に捨て子院に救済を求めた母親のプロフィールの分析によれば、請願の書類に必要事項を書き込む読み書き能力をもつこと、元の雇主や牧師からの推薦状があること、しかるべき産院か自宅で医師や助産婦の立会いのもとで出産していること、結婚の約束をしていたが男性に捨てられたことが、受け入れ可能性の上昇する条件であった。(108)

そして受け入れが決まると、乳児は地方の乳母のもとで養育され、捨て子院に戻ってからは、男子は14歳、女子は15歳までそこで教育を受けた。その後それぞれに働き口が用意された。

この事実を踏まえると、ジェーンの母親は単にジェーンを育児放棄の末に捨てるような非常識で無情な母親ではなかったことがわかる。彼女がどんな理由で自分の腹を痛めて産んだ娘を手放したのかは明確には書かれていないが、彼女自身も救いを求めていたのかもしれないし、娘を生かすために考え抜いた手段だったのかもしれない。現に、ジェーンは健康に育ち、基本的な教育を受けることができていたし、母親を恨んでいるような記述はどこにもない。むしろジェーンは“you might say it was her good luck to have been raised in a good orphanage, they weren't all evil places rife with abuse. Her mother, whoever she was, had perhaps had some discernment.”「よい孤児院で育ててもらえて幸運だったと言えるでしょう。孤児院が全て虐待のはびこる邪悪な場所というわけではありませんでした。母がどんな人であれ、おそらく目端の利く人だったのかもしれない」(105)と自分の境遇に感謝し、母親を褒めている。彼女にとって母親はたとえどんな人かわからずとも、自分を産んでくれた存在というだけでなく尊敬の対象でもあったのだろう。

次に、上記のジェーンの言葉にある「児童虐待」について、そして弱い立場に

ある児童を守る法律について考察していく。捨て子院による児童の養育と教育は必ずしも順調にはいかなかった。19世紀前半のイギリスでは、非行や放置、虐待など養育上の問題で子どもが要保護状態に陥っていても、そういった事柄に公権力が介入することは、家庭という私的領域への不当な干渉、あるいは個人の自由に対する侵害として避けられてきた。しかし、1870年にロンドンで276体の乳児の遺体が路上で発見されたことやマーガレット・ウォータース事件¹をきっかけとして、1872年に乳幼児生命保護法²が成立した。この保護対策は一見有効にみえたが、現実には死亡した乳幼児を施設内に遺棄する事件を多数引き起こしてしまった。また、1889年には児童虐待防止法が制定された。この法律では、児童を養育する者が故意に放置や遺棄、虐待をおこなった場合、もしくはそのおそれのある行為をなした場合に、その者を刑事的処罰の対象とすることができた。さらに、虐待した親から子どもを強制的に引き離し、血縁者やその他の適任者（友人など）に養育を託すことが可能となった。しかし、この児童虐待防止法にもなお問題点が残っていた。子どもを養育する意志のある血縁者やその他の適任者が存在することが前提となっていたために、虐待した親以外に血縁者や適任者がいない子どもの行き場がなくなってしまうのだ。このような状況を受けて、イギリスでは20世紀になるにつれて、子どもが要保護状態に陥っているなら親の権利に干渉したとしても社会は保護に乗り出すべきであると考えられるようになってきた。そして1908年、児童法が制定された。内容としては児童虐待防止法とほとんど変わらないが、養育の委託先として挙げられている適任者の意味合いに孤児院などの施設が色濃く含まれるようになった。また、施設における児童への故意の暴行、虐待、放置、遺棄の増加を防ぐため、児童虐待に対する罰則の対象者も施設に所属する養育者を含むよう改正された。こうした考え方の変化や法律の改正は行き場を失った子どもを守ることに繋がった。弱い立場にある児童を守る法律はその後も改正されつつ、新しくも作られた。代表的なものを取り上げると、1933年に制定された児童少年法は1952年、1963年、1969年と続々と改正されている。

こういった事実を踏まえると、乳幼児や親をもつ児童、親のいない（捨て子を含む）児童への虐待等の問題は何年経っても改善されていないことがわかる。子どもを守るために存在すると言っても過言ではない孤児院でさえも児童虐待が

蔓延していたのだ。孤児として生きること、その子が普通の生活を送ることがいかに困難であったか。そんな当時の世の中で子ども時代を過ごしてきたジェーンは人一倍生きることに対して強い想いを抱いていたと考えられる。16歳でビーチウッド邸にメイドとして引き取られた彼女の学力は、“It turned out she could read, more than many maids could, more than the word ‘Brasso’ on a tin, and could write more than a shopping list, and could do sums.”「多くのメイド以上に、つまり、缶に描かれた‘ブラッソ’の文字が読める以上に読む力があり、買い物リストが書ける以上に書く力がある、そして計算もできる」(100)と述べられている。つまりジェーンは孤児に与えられる働き口だけでなく、もっと世の中に飛び出してそこで生き抜いていく自分を心のどこかで密かに夢見て勉学に励んでいたのではないだろうか。よい孤児院に恵まれたとはいっても、そもそも孤児院という場所が勉強をする場所に最適であるとは言い難い。そんな環境下で人一倍勉学に励んでいたジェーンには、孤児であろうと自分の努力で少しでも人生を切り拓いていこうとする強い想いが子どもながらにあったのだろう。その強い想いを引き起こさせたのはジェーンの人生の始まりに対する考え方に基づいていると考えられる。財産はなにもなく、父や母、本当の名前や誕生日も知らない人生の始まりを、ジェーンは“the perfect one”「最高の始まり方」(97)と表現している。ただ、ゼロの状態で生まれてくるという点においてはどの子どもも等しい。哲学者ジョン・ロックが生前唱えていた「タブラ・ラサ」の考えを借りるならば、人間の心は誰もが生まれた瞬間は何も書かれていない白紙の状態であり、生きていく中で経験から知識や観念を作り出していく。つまり生まれた時点では先天的な才能は存在せず、その後どれだけの経験を積んできたかで個々の人生が決まるのだ。では、ジェーンと他の子は何が違うのだろうか。それは積める経験の制限の差だと考えられる。一般的な子どもは、ある程度両親の価値観や考え方に沿って育てられる。すると、いくら子ども自身が白紙の状態から始まっても、遊ぶ方法や勉強量、将来に対しての考え方などが両親の既存の価値観の範囲内で収まってしまう可能性が高い。結果、その子どもが積める経験の幅も自然と狭まってしまう。しかし、両親のいないジェーンにはそういった類の既存の価値観が立ちだかることがなかった。そのため、ジェーンは自分が知りたいと思うものを納得するまで勉強できたし、将来に対してどこまでも自由に高みを目指すこと

ができた。この自然な制限は経験の広さ・深さにおいてジェーンと他の子に差をつけたらう。彼女はそんな自分を“the perfect basis for becoming a writer—particularly a writer of fiction”「作家になるのには、特にフィクションの作家になるのには、最高の素地」(97) だったと述べている。もちろん当時からジェーンが作家になりたかったかは本書には書かれていない。むしろ孤児院という環境の中で、作家になりたいという選択肢が出ることは少ないだろう。しかし、自分が何者でもない状態、つまりもともとあった物や状況に左右されることなく全て自分次第で人生を切り拓いていける状態にあったジェーンが、通常の孤児に与えられる生き方以上に羽ばたこうと努力して過ごした子ども時代は、明らかに人一倍生きることに対して強い意志をもっていたと言える。そして彼女は、孤児にとって劣悪な環境であったとも言える時代に誰に制限されることもなく他の子よりも広く深い経験を重ねることで、自分の人生を自分自身で形作ってきた。そんなジェーンの人生の始まりは作家になるための第一歩を踏み出し始めていたと言えるだろう。そして、どんな話も自分の手で自由に書くことができるという作家の特性と、どんな生き方をするのか自分の努力次第で自由に選択することができるジェーンの人生の始まり方を重ねてみても、やはり作家になった瞬間の一度目は生まれたときであると言える。

第2章 7年にわたる恋心の終結

本章では、まずジェーンとポールの関係性の現実を明らかにする。そして1924年マザリング・サンデーの日のジェーンの行動に隠された意味合いを紐解きながら、なぜこの日がジェーンの二度目に作家になった瞬間であったのか考察する。

まずはジェーンとポールの関係性を確認しておこう。ジェーンはビーチウッド邸のメイドで独身、結婚を約束しているような恋人はいない。対してポールはアプリィ邸の息子でホブデイ家の娘、エマ・ホブデイ (Emma Hobday) と婚約しており、二週間後には結婚式が執り行われる予定だ。身分の違いはもちろんのこと、婚約者がいることから表立って言える関係性ではない。彼らは誰にもばれないようにこっそりと会い、体を重ねるだけの関係であった。ジェーンはそんな

ポールの存在を“*She had never exactly had him.*”「彼が私のものだったことは一度もなかった」(20)と述べているうえに、“*He ruled the roost, didn't he? He'd ruled it now for nearly eight years. He had the run. He had the run of her.*”「もちろん主導権を握っているのは彼。もう八年近く握られている。彼が使用権を持っているのだ。私の体を使用する権利を」(13)というように、二人の関係を体だけの関係と割り切っている。そしてポールも“*What the two of them had been doing for almost seven years cost, as he would sometimes remind her, absolutely nothing. Except secrecy and risk and cunning and a mutual aptitude for being good at it.*”「こうやって僕ら二人がかれこれ七年もやっていることは、と彼は時々彼女に言い聞かせた。少しもお金がかからない。必要なのは秘密を守ること、大胆さ、狡猾さ、そしてお互いの上手に楽しむ才能だけ」(4)と関係を割り切ったうえで楽しんでいる。しかし、本当にお互い感情もなく体だけの関係で、必要なのは秘密主義、大胆さ、狡猾さ、楽しむ才能だけだったのだろうか。通常、たとえ売春婦ではなくてもメイドが主人と体の関係を持つとお金や高級品のプレゼントがもらえたが、ジェーンとポールの体の関係にお金は全く介在していなかった。二人の関係において、ジェーンに物質的な得は見当たらない。むしろ、八年近くもの間関係を続けてこられたのは、ジェーンの身体的負担と精神的負担が存在していたからだと考えられる。当時は避妊が積極的には認められておらず、簡便で確実な避妊方法が普及していなかったため、望まぬ妊娠で人生が一変してしまう女性が数多く存在した。そんな時代の中でジェーンがおこなっていた避妊方法は子宮栓（子宮頸部キャップ）を装着することであった。体内に見知らぬ器具を入れるという行為はまさしく身体的負担である。また、この避妊方法はポールが提案し、費用も彼が負担したとあるが、この方法が100%確実な避妊方法であるとは言えない。つまりジェーンは妊娠への不安と隣り合わせであったことがわかる。もしもジェーンが妊娠してしまったらどうなっていたか。メイドである彼女が妊娠したとなれば“*they would have been all her consequences and would have included swift banishment*”「全て彼女の責任になっただろうし、即座に追い出されてしまうだろう」(66)。ジェーンが八年近くポールと体を重ねても妊娠しなかったのは奇跡に近かったのかもしれない。しかしそんなジェーンには妊娠、解雇への不安、居場所を失うことへの恐怖など精神的負担が常にあったと言えるだろう。ではなぜそこまで

してジェーンはポールの傍に居続けたのだろうか。マザリング・サンデーの日のジェーンの頭を駆け巡る感情に着目してみよう。はじめに引用するのは、情事を終えた後、婚約者エマとの約束に出掛けるため服を着るポールを眺めているジェーンの様子である。

She did not giggle at his shirt. It might have been nice to giggle, from her vantage point on the bed. There might have been another world, another life in which all this might have been a regular, casual repertoire. But there wasn't. She might have been some lounging wife in a room in London, watching him dress to be a joke of a lawyer. (55-56)

ワイシャツ一枚の彼をクスクスと笑いはしなかった。ベッドの上という優位な場所から、クスクス笑いをしていたらよかったのかもしれない。別の世界、別の人生ではそんな場面が日常的な当たり前のものになっていたのかもしれない。しかしそうはならなかった。ロンドンの一室で横になったままの妻で、彼が服を身につけながら冗談にしか思えない弁護士になっていくところを眺めていたかもしれないのに。

ジェーンは目の前にいるポールを眺めながら空想にふけっている。別の世界、別の人と仮定して、今の自分の人生ではあり得ないことだとわかっていながらも、自分がポールの妻として彼の着替える様子を眺めている未来を心のどこかで思い描いているのだ。そして、一分の隙もなく完璧に仕上がった彼を見て、*“She felt an actual sting of jealousy for the woman who would be the recipient of all this dawdling decking out.”*「こんなにも時間をかけたお洒落の受け手となる女性に嫉妬して、心が痛くなった」(58)と感じている。また、エマとの約束時間に遅刻しそうでも全く焦らずゆっくりと出発したポールを疑問に思うジェーンは、*“Had that even been his brutal, polished plan? It gave her a brief tingle of hope. To call it off—first clearing his path by causing serious displeasure.”*「ひょっとしてあれは彼の完成された残酷な計画だったのだろうか。つかの間、希望の光が見えた。取りやめる—そのために深刻な不機嫌を引き起こして障害物を除く」(83)と考え始めている。つまり、ポールはエマを怒らせて結婚を白紙にするためにわざと遅刻を

したと考えたのだ。そのうえ、エマを障害物、邪魔者と表現し、結婚が白紙になることに希望を抱いている。これらのことから、ジェーンは、本当はポールに想いを寄せていたことがわかる。八年近くこの恋心が続いていたから、たとえお金やプレゼントがなくても、本当に体だけの関係であってもジェーンはポールの傍に居続けたのだろう。そして、彼女が身体的負担、精神的負担を抱えてもなお変わらずにいられたからこそ、二人はこの関係を楽しむことができたのだろう。しかし彼女はそういった素振りを誰にも一切見せていない。ポールを見つめながら、“She found it difficult, even as she stared, not to let tears come into her eyes, even as she knew that to allow them, use them, would have been somehow to fail. She must be brave, generous, merciless in allowing him this last possible gift of herself.” 「目に涙を浮かべないよう堪えるのに苦労した。涙を堪えないこと、涙を使うことは、どういふわけかうまくいかないとわかっていた。自分は気丈に、気前よく、容赦なく、この最後に贈ることができる自分自身を彼に与えなければならない」(44) と完全に自分の気持ちに蓋をしている。つまり、ジェーンとポールの関係はただの体だけの関係ではなく、ジェーンの気持ちが犠牲になったうえで成り立っていた関係だと言える。そして、本当に必要なのは狡猾さでも楽しむ才能でもなく、負担や不安に耐え続けるジェーンの強い意志だったのだ。

さて、裕福な家庭に生まれ、婚約者も欲を満たす相手もいる、順風満帆な人生に見えるポールだが、このマザリング・サンデーの日にエマとの約束へ向かう途中で事故に遭い、亡くなってしまう。報われない恋だと自覚していたとはいえ、八年近くも想いを寄せていた相手を失ったジェーンは何を感じたのだろうか。また、なぜこの日が作家になった二度目の瞬間になったのだろうか。そこには悲しみと解放という一見相容れない二つの感情が存在し、それが合わさってジェーンに作家への道を拓かせたと考えられる。

まず一つ目は「悲しみ」である。ビーチウッド邸の主人ニヴン氏からポールが亡くなった知らせを受けたジェーンの様子はニヴン氏に“**You have gone very pale, Jane,**” 「顔が真っ青だよ、ジェーン」(117) と言われ、失神するかもしれないと思われるほどだった。そして“**Inside the house—inside another empty house—her face had momentarily flooded, before she drenched it anyway with cold water. She might even have stifled a scream.**” 「屋敷の中で—二度目の誰もいない屋敷の中で—彼女の顔

は冷たい水でびしょぬれに洗い流す前に、一瞬洪水が起こった。悲しみの叫びを押し殺していたかもしれない」(130)と、表立っては表せられないが悲痛と驚きに満ちている。また、ポールが亡くなったという現実をまだ受け止め切れていないようにも見える。このようなジェーンの様子から、愛する人を突然失ってしまい悲しみに打ちひしがれていることは確かだろう。そんなジェーンは、この日の夜、眠ることも休むこともできなかったので、ジョゼフ・コンラッド (Joseph Conrad) の『青春』を手を取った。コンラッドは16歳で船乗りになり、世界を航海した。彼の作品には、「生来の神経症的な気質や、深い懐疑、現在および将来の生活に対する不安が相まって彼の人生観が紡ぎ出されていることが」多く、「物語の時間を前後に移動させ場面の意味を重層的に深めたり、効果的なアイロニーを演出している」(デジタル版集英社世界文学大辞典)ので、心の支えでもあり愛していた人を突然失い、将来の自分が見えなくなっているジェーンは、現在および将来に不安をもつコンラッドに対して親近感を抱いたのではないだろうか。そして、時間を前後して場面を行ったり来たりすることは、一つの世界に留まらず別の世界へと行き来することを意味する。そういった作品を読んだことでジェーンは、メイドとしての自分とポールと秘密の関係を結ぶ自分がいたこと、つまり二つの世界を行き来する自分と重ね合わせたのではないだろうか。『青春』を読み終えると、コンラッドの本をもっと手に入れなくてはいけないと感じるようになり、本を郵送してくれる書店に手紙を書いた。今までビーチウッド邸の図書室の本にしか触れてこなかったジェーンがこの時初めて書店について考え始め、外の世界の本と自ら出会おうとしたのである。作家であるコンラッドと重ね合わさった自分が新たな本を求めるということは、作家として新たな世界を渡り歩いてみたいというジェーンの行動だと考えられる。

二つ目は「解放」である。ジェーンはアプリー邸から自転車でビーチウッド邸に帰宅する際の感情をこう表現している。“A sudden unexpected freedom flooded her. Her life was beginning, it was not ending, it had not ended. She would never be able to explain this illogical, enveloping inversion.”「突然で意外な自由の感覚が体にあふれた。私の人生は始まったところだ、終わろうとしているのではない、終わったのではない。この理屈に合わない、包み込んでくるような裏切りを一生説明することはできない」(90)。愛する人との最後の楽しい時間を終え、通常であれば

寂しさや名残惜しさを感じるところであるが、ジェーンは体中に自由がみなぎっている。さらに帰り道の途中では

Though for a crippling moment she didn't know which way to turn. It must have been perhaps three o'clock. She had half the afternoon yet. To turn left would have been the quickest way back to Beechwood, so the obvious choice was right. . . . Pedalling hard at first, then freewheeling and gathering speed, she heard the whirr of the wheels, felt the air fill her hair, her clothes and almost, it seemed, the veins inside her. Her veins sang, and she herself might have sung, if the rushing air had not stopped her mouth. (92)

だが一瞬、体が不自由になったように、どちらの方向に漕ぎ出すか決められなかった。おそらく三時頃だったに違いない。まだ午後が半分残っていた。左に曲がるとビーチウッドへ戻る近道だから、自然な選択は右だった。... 力いっぱいペダルを漕いで、ペダルから足を離し、次第に速度が増してきて、車輪の旋回の音がして、風が髪や服を満たし、さらには体中の血管を満たすような気がした。血管が歌を歌い、もしどっと流れ込んでくる空気が口を塞がなければ、自分も歌を歌ったかもしれない。

と全身で自由を受け止めている様子が見られる。歌を歌うという表現からは清々しいような喜びの感情さえ感じられる。ポールが亡くなったのは二時頃である。しかし三時の時点でジェーンはまだ彼の死を知らない。ポールが死ぬという事はジェーンにとって悲しいことであるが、裏を返せば秘密の関係からの解放、自由だと言える。秘密の関係は、通常のメイドより賢く人一倍人生に向上心があったジェーンをメイドという立ち位置に縛り付けていたものとも言えるだろう。なにも知らないジェーンであるがこの時点ですでに、縛られていたものからの解放を無意識に全身で感じて喜びを感じ始めていたのかもしれない。また、この場面の分析では自転車にも注目する必要がある。自転車は1890年代からイギリスで急速に普及し始めた。その蔓延ぶりは中産階級を中心に上は貴族から下は事務員や職人まで、全階級にまたがるほどであった。その効果は女性に活発な運動の機会をもたらしただけではない。自転車の新しい役割について、川

本静子は『<新しい女たち>の世紀末』において次のように述べている。

自転車はとくに<新しい女>にとって行動の自由と精神の自立を象徴する記号の役割を果たした。なぜなら、この簡便な乗りものの普及は、女性の行動範囲を今までになく広げたばかりか、右に左にハンドルを切って自在に進路を選択・決定するサイクリングの特性が、みずからの判断で生きる道を選び取ろうとする<新しい女>の欲求とぴったり重なったからである。(186)

この事実を踏まえると、ジェーンが自転車に乗って解放感を味わっているという描写は、ポールへの依存から脱して自由になったこと、そして今後の人生を自分で選択・決定していくことを示唆していると言える。また、本書の中でどちらの方向に漕ぎ出すか決められない様子や、進んだ道の途中でゆるやかな上り坂や長い下り坂が出てくる点においても、ジェーンがこの先の人生で迷ったり、良いこと悪いこと様々なことが起こるという未来が自転車の持つ特性に重ね合わせて描かれていると考えられる。メイドでいることの最大の意義であったポールを失ったジェーンが無意識に感じた解放感と喜びは、その日の夜に感じる「自分の人生に書店、さらには作家という選択肢を入れていこう」という意思の背中を押しただろう。

以上のことから、悲しみと解放感がジェーンに作家の道を拓かせるきっかけになったと言える。1924年マザリング・サンデーは、ポールの死を通して、今まで雇い主の屋敷という閉ざされた世界にいた彼女がコンラッドと自分を重ね、全身にみなぎった自由の感覚に後押しされたことで作家としての自分の生き方に確信を抱き、そして本を通して外の世界に一步踏み出した日である。よって、1924年のマザリング・サンデーの日は作家になった二度目の瞬間と言えるだろう。

第3章 新たな人生

本章では、イギリスにおける当時の大学教育とタイプライターの歴史を振り

返りながら、ジェーンがどんな新たな人生を送っていたのか、そしてなぜタイプライターを貰った時が作家になった三度目の瞬間であったのか考察する。

ジェーンはビーチウッド邸のメイドを辞めた後、オックスフォードに行き、書店員として働いた。彼女の働きぶりについて本書ではこう語られている。

She went to Oxford, to work for Mr Paxton. She was only an assistant in a bookshop, but an able one, increasingly familiar with books and—what perhaps mattered most—very good with customers, who ranged from mere townfolk to the cream of the university, even professors. . . . And it became clear soon enough too that the increasing familiarity with books went with an increasing familiarity with the customers. The fact was that she began to consort, to go out, even to go to bed with some of them, . . . (112-113)

彼女はパクストン氏のもとで働くためオックスフォードに来た。ただの書店の店員にすぎなかったが、有能な店員で、どんどん本に詳しくなっていくし、一もっと大事なのはこちらだろうが—ただの市民から教授など大学のトップクラスまで幅広い顧客の扱いにとても長けていた。 . . . そして本に対する熟知の度合いが高まるにつれて、顧客に対する熟知の度合いも高まることが、すぐに明らかになったのである。事実、彼女は顧客の一部と交際を始め、一緒に外出し、ベッドを共にさえた。 . . .

メイド時代のジェーンも一生懸命働いていたが、書店員としての働きぶりを見るとまさに天職だと言える。通常メイド以上の学力や語彙力を備えていたこと、向上心が人一倍あったこと、そして何より本好きで勉強熱心であったことが功を奏したのだろう。また、彼女は大学に通う人や教授を始めとする特権階級の顧客と対等に関係を結ぶことができた。では、当時のイギリスにおいて大学に行く人とはどんな人だったのだろうか。

「イギリスの大学は、オックスフォード大学とケンブリッジ大学をその源流とし、ヨーロッパ大陸における大学とはやや異なった成立発展の経緯を有しながら、長くイギリス社会における政財界のトップエリートの供給源として文化的な側面においても大きな影響を及ぼし続けてきた」(角替 72)。当時はまだ限

られた階層の人たちしか大学に通うことができない時代であった。さらに女子大学生の数は著しく少なく、男性中心の世界であった。教育の内容も階級制度に基づき、技術教育は職人や下層中産階級に任せておけばよいという考えのもと、教養教育の理想を擁護し続けてきた。両大学に通う人たちはいわば「学識あるジェントルマン」であった。メイドの職についていたジェーンは技術教育すらまともに受けていない労働者階級であり、オックスフォードには行ったが、オックスフォード大学に行けたわけではない。そんな彼女が上層中産階級以上の知識人たちと親しい間柄になった。これは本当に大学に行っている人よりも自由に学習を進められたうえに大学人の交流の輪に気軽に入っていたことを意味している。実際に、ジェーンは“*She could even pass herself off quite convincingly as that rare and frightening creature, a female undergraduate.*”「あの珍しくて恐れられた存在、女子大学生であるかのように通用した」(113)と述べられている。これらのことから、ジェーンは努力と才能によって出会った天職、書店員として働く傍ら、今までにないより良い環境下でこれまで以上に勉学に励んで新たな人生を送っていたと言える。そして彼女の新たな人生は、初めて自分自身で選択した人生である。愛する人の死と自分が生きているという感覚を充分に感じながら、メイド時代よりもさらに向上心を持って、自分の気持ちや疑問に貪欲に真っ直ぐ向き合い、生きていたことだろう。

さて、新たな人生を歩んでいたジェーンはその後自分がものを書いていることを周りに公言できるようになる。ジョゼフ・コンラッドの作品を読み進めるうちに自分も作家になりたいと感じていたが、それは秘密の願いであり、未だ趣味の範囲内だった。これまでものを書くという行為は男性の特権であった。読み書きの普及によって年々多くの女性が文字を覚えたとしても、書く女性の数は圧倒的に少なかった。そんな状況を変えたのがタイプライターの出現である。1865年にデンマークのラスムス・マリング＝ハンセンが製品としてタイプライターを発明したことをきっかけに、様々な国と人が改良を重ね、性能も上がっていった。それに伴い、基本的には男性ばかりであった帳簿係や事務員、作家、その助手たちは女性の手にとって代わっていった。読み書きの普及とタイプライターの出現によって 19 世紀の終わりごろから事務職に就く女性が増え始め、「労働者層から、あるいは中産階級とブルジョワ階級から、上昇志向や経済的理由など

によって、あるいは純粋な女性解放願望によって、何百万人もの女性秘書が誕生した」(キットラー 297)。パクストン氏もタイプライターを持っていたが、それは仕事用だったためジェーンが私用でものを書く際には手書きで書いていた。しかしある時、パクストン氏からそのタイプライターを譲り受ける。その日が作家になった三度目の瞬間とされているが、なぜジェーンはそう感じたのだろうか。タイプライターの利点として、手書きと比べて書く速度が上がること、綺麗な文字で出来上がることが挙げられる。作家を職業にしていく以上、ある程度文章を限られた時間で書き上げなければならない。そして出版社などに提出する場合、他人に読んでもらうため字の綺麗さは必須である。勉強の合間に趣味としてもものを書いていたジェーンにとってタイプライターを手に入れたということは、作家として書くという仕事を確立することに繋がったと言える。加えて、そんな作家の象徴とも言えるタイプライターを、仕事の面で今のジェーンを一番よく知るパクストン氏から貰うことで、初めて認められたと感じたとも考えられる。人生の拠り所である本とものを書くことへの純粋な学習意欲や熱心な努力が報われ、新たな人生を全力で生きるジェーンの秘密の願いが現実になった瞬間、それがタイプライターを手に入れた瞬間なのだ。以上のことから、タイプライターを譲り受けた時が作家になった三度目の瞬間と言えるだろう。

結論

本論文では、ジェーンの人生のターニングポイントを振り返りながら、作家になった三度の瞬間について考察した。その中で彼女の様々な想いや人生観に触れてきた。

第一章では、ジェーンが「生」に対して誰よりも強い意志をもっていたことをもとに、自分の努力次第で自由に人生を描ける環境に生まれたことと作家の特性である自分の手で自由にものを書けることを比較して、生まれた時が一度目に作家になった瞬間であると論じた。

第二章では、愛するポールを失ったジェーンが、悲しみの渦中にいながらも無意識に包まれた解放感について述べた。そしてその感覚に背中を押され作家という生き方に確信を抱き、本を通して初めて自ら外の世界に踏み出したことから、1924年のマザリング・サンデーの日が二度目に作家になった瞬間であると

論じた。

第三章では、ジェーンのこれまで培った能力や行動が新たな人生を豊かなものにしたことを明らかにした。さらにタイプライターという道具が、仕事としての作家活動の確立を意味することから、タイプライターを譲り受けた時が三度目に作家になった瞬間であると論じた。

ジェーンは孤児、そしてメイドという世間的に弱い立場にありながらも、置かれた環境の中で常に考え、行動していた。実際に起こったことはもちろんのこと、起こらなかったことをも想像した。人生は何が起こるかわからないということ、ポール之死で再度感じたジェーンは「生きること」にさらに真摯に向き合い、自分自身で人生を選択することに成功した。どんな状況にいようと屈することもおごり高ぶることもなく、向上心を持ちたくましく生き抜く姿を貫き続けたことが、彼女が人生を切り拓いていけた理由と言えるだろう。

注

1 イギリス全土をモラル・パニックに陥れたとされる事件。ウォーターズは妹とともに、複数の偽名を使い、新聞広告を通じて里子を引き取り養育することで生計を立てていた。しかし衰弱した11人の乳幼児が自宅で発見され、うち五人が死亡したため、彼女は殺人罪に問われ死刑となった。(中村 101)

2 金銭を得て六歳以下の子どもを24時間以上養育する全ての乳母を免許・登録制とし、査察を実施するという内容。(中村 112)

引用文献

Swift, Graham. *Mothering Sunday*. Scribner UK, 2017.

秋元美世『児童青少年保護をめぐる法と政策——イギリスの史的展開を踏まえて——』中央法規出版、2004年。

川本静子『＜新しい女たち＞の世紀末』みすず書房、1999年。

キットラー、フリードリヒ『グラモフォン・フィルム・タイプライター』石光泰夫・石光輝子訳、筑摩書房、1999年。

[Kittler, Friedrich. *Grammophon Film Typewriter*. Brinkmann&Bose, 1986]

佐野晃「ジョーゼフ・コンラッド」 Japan Knowledge Lib デジタル版集英社世界文学大辞典

<<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=52310h0004286>>

(参照日 2020年12月6日)

スウィフト, グレアム『マザリング・サンデー』真野泰訳、新潮社、2018年

[Swift, Graham. *Mothering Sunday*. Scribner UK, 2017]

スノードン, ポール/大竹正次『イギリスの社会——「開かれた階級社会」をめざして——』川勝平太監修、早稲田大学出版部、1997年。

角替弘志・角替弘規「教育」『イギリス文化を学ぶ人のために』小泉博一・飯田操・桂山康司編集、世界思想社、2004年。

中村勝美「近代イギリスにおける子どもの保護と養育」『保護と遺棄の子ども史』橋本伸也・沢山美果子編集、昭和堂、2014年。

『若草物語』における結婚 — 「心」と「魂」のありか

野口 暁生

序論

『若草物語』(*Little Women*, 1886) は、ルイザ・メイ・オルコット (Louisa May Alcott) による、主に少女向けとされた長編小説である。物語にはマーチ家 (the Marches) の四姉妹が、南北戦争期、出兵した父の帰りを待ちながら、母に導かれ、父が示す「小さな婦人 (little women)」を目指し成長する姿が描かれる。“Not a bit sensational, but simple and true, for we really lived most of it; and if it succeeds that will be the reason of it” 「少しも扇情的でないし、簡素で真実味がある。というのも、ほとんどその通りに私たちは生きてきたのだし、もし売れるならそれが理由だ」(Cheney 199) と作者自身が日記に書くように、『若草物語』の四姉妹のモデルはオルコット自身の姉妹であり、次女のジョー (Jo) は作者自身を投影した存在である。また、オルコットには女性活動家としての側面もあり、作中でのジョーの言動や思想、特に「女性」の在り方に関しては、オルコット自身のそれが強く反映されていると考えるのは妥当であり、通説である。

物語は第 23 章で一度幕を閉じ、「第二部 (Part II)」とされる第 24 章からは、翌 1869 年に書かれた続編という位置づけで、成長した姉妹の結婚をテーマに物語が展開される。その中でジョーは、生涯にわたり独身を貫いたオルコットとは異なり、年の離れたドイツ人男性のフリッツ・ベア (Fritz Bhaer) と結婚し、二人の男児を授かる。「第二部」に着手する際、日記には “Girls write to ask who the little women marry, as if that was the only end and aim of a woman’s life” 「少女たちは、小さな婦人たちが誰と結婚するのかと手紙をよこしてくる。まるでそれが女性の一生のただ一つの結末かつ目標であるかのように」(Cheney 201) と綴られており、この一文からは、読者の要望と自身の結婚観との差から生じるオルコットの苦悩が読み取れる。姉妹の結婚という「第二部」の結末は、出版社や読者に後押しされたものとされ、オルコットの意に反する展開は、男性優位の社会制度に対する敗北と読まれることが多い。

『若草物語』を論じるにあたり、「第二部」で描かれた「結婚」に対し、悲観的な議論が多くされていることに疑問を感じる。確かに、「結婚」がオルコットの望んだジョーの結末かについては議論の余地がある。しかし、日記には先の一文中に、“I won't marry Jo to Laurie to please any one”「私は誰かを喜ばせるためにジョーをローリーと結婚させたりなんかしない」(201)と続けている。ここから、「結婚」という結末のみを批判するのではなく、それまでの過程として、幼馴染のローリー (Laurie) の求婚を断り、ベアを相手として選んだことを紛れもないジョー (オルコット) の意思として考察すべきではないか。この読者に対する裏切りともいえる「結婚」を、求められた女性の結末に対する挑戦として、肯定的な視点から読むことができないかという疑問が本論の出発点である。

本論では、『若草物語』について、オルコットに影響する超越主義的思想や時代背景をもとに登場人物の精神性を観察し、「結婚」の考察につなげる。そのきっかけとなったのが、第 24 章「噂話」(“Gossip”)の中で、「マーチ家」という一家庭を読者に向けて説明する地の文中での、次の一文である。

The girls gave their hearts into their mother's keeping—their souls into their father's; and to both parents, who lived and labored so faithfully for them, they gave a love that grew with their growth, and bound them tenderly together by the sweetest tie which blesses life and outlives death
娘たちはその心を母の、魂を父のもとに預けた。そして、彼女らのために誠実に生き、働いてくれる両親に成長と共に深まる愛情を注いだ。また、人生を祝福し、死後もなお残る最愛の絆により、彼らは優しく結ばれていた (237)

本論ではこの一文の中にある、「心 (heart)」と「魂 (soul)」という言葉に注目する。両親は姉妹に最も近い「家庭内の男女」であり、「結婚」の結末の一つである。つまり、ここで「心」と「魂」とされる表象が、家庭における性差を読み解く手がかりとなり、『若草物語』における「結婚」の謎を解明し得るのではないかと考えた。

第 1 章では、ここに挙げた「心」と「魂」の定義をし、作中でそれらがどのように描かれているかを論じる。第 2 章では、「心」と「魂」の観点から、

ジョーを中心に『第二部』における「結婚」が何を表すのかについて考察する。

第1章 心と魂

1.1 引用文の解釈

「心」と「魂」を考察し定義する前提として、本論では、“The girls gave their hearts into their mother’s keeping—their souls into their father’s”「娘たちはその心を母の、魂を父のもとに預けた」(237) という表現を、「成長した姉妹の精神に、父母それぞれが体現する精神性が存在する」ことを表していると解釈した。

その解釈に至る理由として、「第二部」から姉妹は、成長した「女性(women)」として描かれている点を読み解く。引用文の前段落では、マーチ家が“the five energetic women”「五人の活動的な女性」(237) と“husband and father”「夫であり父」(237) で構成されていることが示される。ここで、一家が「男性」と「女性」の関係で描写されているのに対し、そのあとに続く引用文では、「娘たち」と「父母」の関係で述べられている。そして、同文中の“a love that grew with their growth”「成長と共に深まる愛情」(237) や、“the sweetest tie which blesses life and outlives death”「人生を祝福し、死後もなお残る最愛の絆」(237) などの時間の流れを感じさせる表現は、マーチ家の娘が「女性」として着実に成長していることを示している。この表現から、マーチ家の成長した娘たちと両親の関係を描く一文で使われる「心」と「魂」という言葉は、姉妹の「女性」としての成長に関わるものと考えられる。

「心」と「魂」は、意味通りの解釈をすれば、姉妹の精神面を表す言葉である。しかし、その精神は二つの言葉に分けられ、それぞれが母と父に対応して表現されている。そして、その表現が姉妹の成長を確認する一文で用いられていることから、本論ではこの「心」と「魂」が成長した姉妹の精神を表すとともに、姉妹が父と母それぞれの精神性を備えていることを示すものであると考えた。本章では、この「心」と「魂」の意味と二つに分けて表す意義を、姉妹の成長の過程を描く「第一部 (Part I)」と作品の背景から考察する。

1.2 「心」の定義

母の精神性を表すと考えた「心」の意味を探るにあたり、オルコットと関係が深く、彼女の思想に影響を与えたとされる超越主義者たちの女性観をヒントにした。西尾によると、ラルフ・ウォルドー・エマソン (Ralph Waldo Emerson) は女性が「感情」を体現する存在であり、その情け深さや情緒の豊かさが人間性に必要な一断面とみなしたという (108)。また、マーガレット・フラー (Margaret Fuller) は、『19世紀の女性』 (*Woman in the Nineteenth Century*, 1845) の中で、“the feminine side, the side of love, of beauty, of holiness” 「女性的な、愛、美、高潔さの側面」 (22) と述べ、“If you have a power, it is a moral power” 「もしあなたに力があるならば、それは道徳の力である」 (98) と、女性の道徳心を力として認めている。この「女性の力」、すなわち愛や道徳心が『若草物語』全体のテーマであることは周知のとおりである。したがって本論では、「心」を「道徳的な感情及びその感情を制御するもの」と定義した。

その「心」が母によって示される場面を作中から挙げる。エイミー (Amy) は第7章「エイミーの屈辱の谷」 (“Amy’s Valley of Humiliation”) で自身のわがままや虚栄心のためにルールを破り、学校で体罰を受け、そのことがきっかけとなり、学校を辞めることになる。マーチ夫人 (Mrs. March) は体罰には反対するが、“You are getting to be altogether too conceited and important, my dear, and it is quite time you set about correcting it” 「愛するエイミー、あなたはうぬぼれで尊大になってきていますし、もうそれを直し始める時ですよ」 (70) とエイミーの欠点を認め、“the great charm of all power is modesty” 「謙遜が最も人を惹きつける力なのです」 (70) と説く。また、ジョーは自制心に欠け、第8章「ジョー、アポリオンに会う」 (“Jo Meets Apollyon”) では、ジョーの原稿を焼いたエイミーに腹を立て、怒りを治められずに彼女を無視し続けた結果、危険にさらしてしまう。自責の念に駆られ、救いを求めるジョーにマーチ夫人は、自分にも同様の悪い性質があったと同情し、ジョーに自制心の大切さ、そして忍耐を教える。メグ (Meg) の欠点は自尊心が強いことであり、第9章「メグ、虚栄心の見本市に行く」 (“Meg Goes to Vanity Fair”) では、その性格のせいで苦しむ様子が描かれる。メグは上流家庭の生活を経験するが、窮屈な生活や結婚のうわさに振り回され、その経験を経て彼女は虚飾の愚かさを知る。その後母はメグに、誠実にふるまうこと、真の

愛に貧富は関係ないと説く。このように、母の「心」はそれぞれが自分の悪性から経験する困難を通し、姉妹に伝えられている。

また、ベス (Beth) には他の姉妹のように、「自身の欠点からそれに対応する美德を学ぶ」という流れはないが、彼女の描写からは、最初に母に示された「隣人愛」を読み取ることができる。この「隣人愛」は第2章「楽しいクリスマス」(“A Merry Christmas”) でフンメル家 (the Hummels) に朝食を分け与える場面に描かれるのだが、この教えを体現するのはベスである。第17章「小さな忠誠」(“Little Faithful”) では、姉妹の代わりにベスがフンメル家に赴き、そのために猩紅熱にかかってしまう。ジョーは看病の際、ベスの“the worth of Beth’s unselfish ambition”「ベスの利他的な大望の価値」(184) を知り、他人のために生きることの尊さを学ぶ。そしてまた、ベスの身を心配する人の多さに、周りの人間は驚くことになる。この一連の流れは、母が不在のマーチ家で、日々の善い行いを怠けた姉妹に対し、ベスが母の代わりに「隣人愛」や「自己犠牲」の精神を再度示す場面と読むことができる。

以上の場面から、母が示し、成長した姉妹が持つ精神性と考えた「心」を、「道徳的な感情及びその感情を制御するもの」と定義づけた。すると「第一部」は、娘が母に導かれ「心」を成熟させる物語と読めるが、ここで「魂」の存在に疑問が残る。父は「第一部」ではほとんど不在であり、彼から精神的な教えを受ける場面はないが、「第二部」では「魂」が「心」と並び示されている。次節から述べるのは、「心」という側面の成長を支えるものとして、「魂」が提示されている可能性である。

1.3 「魂」の定義と超越主義

本節では「魂」の定義を先んじて提示し、その定義に至る理由として、オルコットと超越主義 (Transcendentalism) の関係性について論じる。

超越主義は、直観と良心に頼る哲学に基づき、人間の本質に肉体を超越したものが存在すると主張する、1830年代に始まる文学運動である (アイスレイン 361)。その代表的な人物であるエマソンはオルコット家の長年の後援者であり、若いオルコットにとっての師であった (107-108)。また、フラワーの論文や生涯はオルコットに大きく影響し、女性の自己実現というテーマは生涯を通しオルコットにインスピレーションを与えたという (126)。オルコットの父ブロンソン (Amos Bronson Alcott) も超越主義者であり、彼をモ

デルとしたマーチ氏 (Mr. March) の示す「魂」には、超越的な精神観が示唆されていると考え、本論では「魂」を「経験から自分の精神を観察し、神を認識する力」と定義した。

ブロンソンの超越主義思想は人間精神に神性を認め、絶対の信頼を置くものであり、それが彼の教育思想において、子どもを主体的な存在とみなし尊重できる根拠であった (山本 5)。超越主義において、人間と自然は「神の精神」、すなわち、エマソンの言う「大霊」(the Over Soul) を持ち、その本質の普遍性及び神性が、彼らが人間精神を神聖と考える根拠であった (67-68)。そしてブロンソンは、すべての神の被造物の中でも、人間は神が真・善・美の認識を可能にする「天才」(genius) を与えたものとして特別視した (68-69)。また、彼はその「天才」の中でも、道徳的習慣にあたる「良心」(consciens) の働きが最も重要とし、覚醒および教育の対象と考えた (73,78)。

オルコットがこのブロンソンの教育思想を肯定していたことは、結婚後にベアと運営するプラムフィールド (Plumfield) の学園で、ブロンソンの学校の方針を汲んだ教育が行われていることから明らかである。しかし、第7章の時点ですでに、彼の思想を物語に取り入れていることが読み取れる。エイミーはデイヴィス先生 (Mr. Davis) に鞭を打たれ、そのことを聞いた家族は憤慨し、学校を退くのだが、デイヴィス先生は“nervous gentlemen with tyrannical tempers”「専制的な性質を持つ神経質な男」(67) の一人であり、“manners, morals, feelings, and examples were not considered of any particular importance”「作法や道徳、感情や手本といったものを特に大切とは考えていなかった」(67) と、道徳教育には関心がない教師として描かれている。先述のとおり、ブロンソンの教育理論においては、「良心」すなわち道徳的習慣を覚醒させることを目標としていた。また、ブロンソンは教育現場において、体罰への恐怖は学習の妨げとなると考え、温厚さと穏和によって学習させようとし、教室においては、子供たちに信頼を置き、彼ら自身に学級運営をさせ、悪や不正に対しても、彼らの共同体としての意識を重視していた (山本 29-30)。このような事実を考えると、エイミーの学校への非難は、ブロンソンの教育思想の肯定と考えられる。

そして、この思想は『若草物語』における姉妹の成長を支えるものである。以下の第1章「巡礼ごっこ」(“Playing Pilgrims”)での父の手紙には、姉妹の成長の指針となる父の教えが綴られている。

I know they will remember all I said to them, that they will be loving children to you, will do their duty faithfully, fight their bosom enemies bravely, and conquer themselves so beautifully, that when I come back to them I may be fonder and prouder than ever of my little women

彼女らは私の言ったことをすべて覚えていることと思います。だから、彼女らはあなたにとって愛すべき存在になり、誠実に義務を果たし、心の中の敵と勇敢に戦って、美しく自分を征するでしょう。そして私が戻るときには、私は我が小さな婦人を、今までよりもずっと愛しく誇りに思えることでしょう (8)

この一文の中にある「心の中の敵と勇敢に戦う」、「美しく自分を征する」という言葉に注目する。この言葉はブロンソンの道徳教育の方法の一つである、自分の精神を観察する「内省 (self-contemplation)」を想起させる。超越主義において、人間精神と自然は本質的に同じであり、したがって人間の精神に宿る神の精神は、自然を直観的に観ることによって類推が可能と考えられた (山本 100)。そしてブロンソンは、その考えを教育論に持ち込み、自然を類推によって学ぶ前段階として、子供たちに自らの内なる精神 (自然) を自覚させるために「内省」をさせた (100)。つまり、ここで父が勧める精神の観察は、自分の中に「神の精神」及び「真理」を見出させるためであり、このような「超越主義的な精神の成長」を娘たちに望んでいるということは、彼女たちの中に「神の精神」の存在を信じていることに他ならない。また、「義務を果たす」という一文や、姉妹が日常で直面する困難を経て成長する『若草物語』の構成を踏まえると、この教えは、ただ精神修養に励むのではなく、日々の生活、すなわち経験からこの精神を観察し、真理を見出すことを望むものと考えられる。

したがって、「魂」は父と同じ超越主義的な精神性であり、父に認められ、精神的な成長を保証するものと考えられる。本論ではその「魂」を、父の思想と手紙の言葉をもとに、「経験から自分の精神を観察し、神を認識する力」と定義した。オルコットは物語の1章ですでに、父の手紙を通じ、姉妹の中に超越主義的な「魂」の存在を主張しているのである。

1.4 女性に「魂」の存在を主張する意義

女性と「魂」の関係について、一人の「女性」に与える影響は、次のように考察できる。「魂」が姉妹の精神的成長を保障するものと考えれば、「第一部」に描かれるのは「魂」の存在を前提とした成長である。その成長と「魂」との関係が、第8章でのジョーとマーチ夫人の会話に読み取れる。ジョーが自分の悪性に苦悩し助けを求める場面で、マーチ夫人は、“you can overcome and outlive them all, if you learn to feel the strength and tenderness of your Heavenly Father as you do that of your earthly one” 「もしあなたが、お父様にするのと同じように、天の神様の力や優しさを感じられるようになれば、全部乗り越えることができるのよ」(81) と諭す。ここには、苦難を乗り越えた先に、直接的に神を認識できる可能性が示唆されている。「地上の」(earthly) と、家庭内の父とはっきりと分けていることから、この「神」は超越的な真理を表す存在と考えられる。姉妹の「心」の成熟は「魂」に保障されたものであり、その「心」を母から教えられる精神的な成長の過程は、「魂」を持つ人間としての「神」の認識に繋がるのがここに示される。「心」と「魂」は相互に作用しながら、それらを持つ人間の精神を高めていくのである。

つまり、「第一部」を通じて成熟する「心」という精神性は、「魂」の存在を前提とするものであり、精神的な成長の結果の一つである。この関係性は、女性の精神的な成長を母親の「心」だけに限定しないための、性別を超えた人間の本質的な成長の可能性の提示と考えられる。「結婚を、少女と大人の間を分かち境目と考えている人がほとんどだった」(ジョンストン 178) と、「女性」になるために結婚が通過儀礼的に考えられていた時代背景を踏まえると、父に示される「小さな婦人 (little women)」という目標は、結婚を経ずに一人前の女性となる可能性を示唆している。「魂」を精神に宿している「少女 (girls)」は、「結婚」という男性との関係からではなく、経験を経て自立した「女性 (women)」になれることが手紙に示されているのである。オルコットにとっては、女性も「神」を認識できる存在であり、超越主義的に考えれば、そのための成長も「神の精神」によって保障されている。ジョーは執筆、エイミーは芸術活動をそれぞれの夢として掲げるが、それらは「心」とは関係のないもの、特にジョーの「仕事」に対する姿勢は、男性的な印象を与えるものとして描かれている。この性の規範を超えた女性の活動も、オルコットの「魂」の存在の主張を証左とすることができる。

また、「魂」の存在の主張は、超越主義の平等かつ普遍的な精神観をもとに、「第二部」のテーマである「結婚」に影響を与えている。西尾はエマソンの精神観について、「現世における性別から魂は自由であり、我々の存在において、性別という要素は決して普遍的でも本質的でもない。人間の真の姿は、自己のなかに存在する「大霊」という性別を超越した神性にこそあるとするのである」（203）と述べる。つまり、超越主義的な「魂」には、両性の平等を導く効果も期待される。加えて、「魂」という言葉の使用には、フラーの女性観、結婚観が読み取れる。フラーは、男性が女性に対して抱く考えの一つとして、“that the infinite soul can only work through them in already ascertained limits; that the gift of reason, man’s highest prerogative, is allotted to them in much lower degree”「無限の魂も女性の中では既定の範囲内ではしか働かず、男性の最上の特権であるとされる理性という天賦の才は、私たちには限りなく低い程度にしか割り当てられていない」（18）という。男性は、女性に対し、奴隷に対して抱くものと同じ考えを持っているというのである。ここでは、「心」のような女性的な力と対比してはいないが、男性的な力を自分たちだけのものとする態度に「魂」という語を用いて難色を示している。この一文に見る「魂」という言葉と、男性の特権に対する言及は、オルコットの「魂」の存在の主張に通ずるものがある。

また、伊藤の解説をもとに、『19世紀の女性』での結婚に関する主張をまとめると、フラーは男女が共にバランスの取れた存在であり、精神的な成長のために相手を認め、互いを必要とする関係を結婚に見出そうとした(211)。フラーは、片方が成熟し、もう一方が未熟なままでは、互いに影響を与えることはできず、純粹に人間的な存在となることはできないと考えたのである(211)。そして、男女はまだ同じ条件に置かれていないのに、それ以前に性を規定すべきではないと主張する(213-14)。ここから、「魂」という言葉のもつ平等な価値、普遍性は、フラーが主張する結婚の理想に近づくためものと考えられる。

オルコットは、女性の力としての「心」と、その成長を保証する平等な精神として、「魂」の存在を主張した。「結婚」を扱う「第二部」の初めに「魂」の存在を再確認することで、「対等な結婚」を描く布石を打ち、「結婚」を終着点とせず、精神的に成長し続ける「女性」の姿を示したのである。そして、その性の平等、女性の精神的な成長の可能性の主張は、ベアとの結婚を以て

完成する。当時の女性の最大の幸福であり、オルコットにとっては最大の挑戦である「結婚」を通し、彼女の目指す女性像や男性との関係がいかに関示されているかを次章で論証する。

第2章 結婚

2.1 オルコットの結婚観

当時の結婚は、一人前の女性と社会に認められるために、避けては通れない道であった。しかし、オルコットは、メグのモデルである姉アンナ (Anna May Alcott) とその夫ジョン・プラット (John Pratt) の新婚生活を見た際の日記に、“Very sweet and pretty, but I’d rather be a free spinster and paddle my own canoe” 「とても快くてきれいだった。でも、私は自由な独身夫人のまま、自分の船を自分で漕いでいきたいと思う」 (Cheney 122) と記し、その宣言通り生涯未婚であった。また、ジョーもローリーに求婚される場面で、“Nothing more,—except that I don’t believe I shall ever marry; I’m happy as I am, and love my liberty too well to be in any hurry to give it up for any mortal man” 「もう何も言うことはないわ。私が結婚するつもりはないということ以外は。私はいま幸せよ。およそ考えつく誰かに急いでそれをやっつけてしまおうなんて思わないくらいに、私は私の自由を愛しているのよ」 (*Little Women* 365) と言う。ここから、オルコットは結婚に対し、「自由を妨げるものである」という考えがあり、ジョーとそのモデルが、当時の社会通念とは異なる結婚観を抱く女性であることは明白である。

しかしながら、オルコットは結婚そのものの否定はしていない。オルコットは 1858 年の 5 月、アンナの婚約について、“I moaned in private over my great loss, and said I’d never forgive J. for taking Anna from me” 「私は大きな喪失を個人的に嘆いていた。そして、アンナを私から奪っていったジョンを決して許せなかった」 (Cheney 99) と日記に綴るが、ジョンが亡くなった後には、彼を “the best husband ever known” 「知る限りで最良の夫」 (99) とし、“For ten years he made her home a little heaven of love and peace” 「それから十年間、彼はアンナとの家庭を愛と平和の小さな天国にしてくれた」 (99) と 1873 年に書き足している。1878 年の日記にも、“A happy event” 「うれしい

出来事」(315)という書き出しで、妹のアビゲイル・メイ・オルコット (Abigail May Alcott) の結婚を祝福している。

この一見矛盾するオルcottの結婚観を、本論の主題である精神性の議論と結びつけて考察する。オルcottは「結婚」を描く「第二部」の初めに、「心」と「魂」の存在を主張した。そして、第1章で述べたように、その二つが女性の精神的な成長を示すものと考えたと、オルcottの忌避する結婚はその成長を妨げるものと考えられ、また、男性と女性の役割を明確にする当時の結婚は彼女の思想と相対するものである。つまり、オルcottの批判は、結婚そのものではなく、その先にある男女の関係性にあると考えられる。女性が男性と主従関係で結ばれ、権利や自由が抑圧されること、つまり「魂」をもつ女性の精神的な成長の機会（経験）が失われ、家庭内で「心」を男性のために働かせるだけの存在になることを危惧しているのである。

2.2 結婚相手としてのローリー

ローリーとジョーを結婚させない理由として考えられるのは、彼の経済力である。「第一部」において、ローリーの家であるローレンス家 (the Laurences) はマーチ家を後援する隣家として描かれてきた。マーチ伯母さん (the Aunt March) やローレンス家が金銭的な援助を度々施すように、マーチ家の経済力は、徹底して一家の外に置かれている。つまり、姉妹は「貧しいマーチ家」での「重荷 (burden)」を通じて精神的な成長を果たしてきたのである。その中でもジョーは、貧しさを解消する「仕事」を「特質」としたキャラクターとして描かれている。そしてこの「特質」は第1章第4節で述べたように、「魂」を持つ女性の、「心」とは別の成長の手段かつ目標として設定されている。したがって、ローリーとの結婚がジョーにもたらす「裕福」は、ジョーに「仕事」の必要性を無くし、精神的な成長の機会を失わせるものと考えることができる。

ここで、「特質」と精神的成長の点から、他の姉妹の結婚についても触れておく。最終的にローリーと結婚するエイミーも、貧しいマーチ家で育った姉妹の一人であるが、彼女のアイデンティティは「芸術活動」にある。エイミーの成長はむしろローリーとの結婚を以て継続されるのであり、都合よくローリーの伴侶とされたのではなく、その結婚は彼女の「芸術活動」の可能性を維持させるものである。また、メグの性格は、横川が「世間が若い女性

に期待する女らしさや女性役割などのジェンダー規範をそのまま受け入れることに、何の疑問も困難も感じておらず」(77-78)と指摘するように、この時代の女性の典型として描かれる。ジョーが姉の結婚を嘆き、「第二部」でメグが結婚生活を通し、当時の「家庭の女性」の困難を経験することを考えると、オルコットはメグの結婚に、結婚によって家庭に縛られた女性の姿を描いたと読むのは簡単である。しかし、当時の女性らしさを体現していたメグが、家庭内の女性の苦難を経験し成長する流れは自然であり、メグの「家庭的な女性」という「特質」は変わらずに、彼女の結婚において精神的な成長を助けるものとして機能している。第28章「家庭内の経験」(“Domestic Experiences”)では、メグは新妻として思うように振舞えず苦悩し、貧しいにもかかわらず浪費に走ってしまう。それはメグの抱く「家庭的な女性」の理想と現実とのギャップから生じる経験であった。しかし彼女は、その「家庭内の経験」を経て、未だ残る自尊心に適う忍耐を学ぶ機会を得ることができたのである。このように、姉妹は各々の「特質」とそれに伴う「重荷」を経て成長してきたことを踏まえると、彼女らの結婚は、「魂」を持つ女性の精神的成長の可能性を失わせない形をとっていると言える。

最後に、ジョーに求婚する際のローリーの言葉を読み解き、オルコットの彼に対する拒絶を明らかにする。ローリーは求婚を拒み、結婚すれば互いに不幸になると言うジョーに対し、“Marry,-no we shouldn't! If you loved me, Jo, I should be a perfect saint,-for you can make me anything you like!”「結婚したら一不幸になんてならないよ！もし君が僕を愛してくれたら、ジョー、僕はすっかり聖人になるよ—君は僕を君の好きなようにできる！」(364)と哀願する。このローリーのセリフは、女性と男性の力関係を逆転させるセリフと読むことができる。しかし、そもそもこの「一方がもう一方を支配下に置く」関係は、第1章第4節で述べたフラワーの結婚観である「両性の成熟」という理想に反するものである。ローリーのこのセリフとその否定は、単に男性と女性の優位を逆転させるのではなく、フラワーに影響を受けた、真に平等な関係を求めるオルコットの意思と読むことができる。そして、その理想をベアとの結婚に求めたのである。

2.3 結婚相手としてのベア

田辺は、「ジョーのロマンスの対象は父なのである」(85)と述べ、ベアが精神的に依存する対象としての「父親のダブル」(88)であると指摘し、彼との結婚を父との類似点から考察している。ベアが初めてマーチ家の人々と対面する場面での、“Mr. March, feeling that he had got a kindred spirit, opened his choicest stores for his guest’s benefit”「マーチ氏は同種の精神をもつ人間にめぐりあったことを感じながら、客人のためにとっておきの貯蔵庫を開けた」(*Little Women* 451)という一文から、田辺は「父親と「同種の精神をもつ人間」であったがために、ベア教授がドイツ人であろうが年長であろうが貧しかろうが、マーチ家のだれもベアを批判することはなかったのである」(88-89)と、二人の精神的な類似を指摘する。また、成田は「精神の上では、ベア先生はドイツ哲学、とりわけカントを中心としたドイツ観念論哲学の嫡子と言って良いアメリカ超越主義とのつながりを感じさせる人物であり、ルイザの父親エイモス・ブロンソンその人に他ならなかったろう」(70)という指摘する。これらの指摘から、ベアは父親と同じように、超越主義的な「魂」を示す男性として描かれていると考えられる。

また、ベアは「心」をその精神に宿す男性である。ジョーは文筆で稼ぎを得ようと試み、その過程で通俗小説に手を出す。そして、扇情的な物語のネタを探すことに没頭するが、そんな彼女は“unconsciously, she was beginning to desecrate some of the womanliest attributes of a woman’s character”「無意識に、彼女は女性の性質の中で最も女性らしい特性のいくつかを汚し始めていた」(349)と語られる。そして、そのような小説への傾倒から彼女を救い出すのがベアである。その後、作風を変更した小説が成功したことに驚くジョーに、マーチ氏は“**There is truth in it, Jo**”「その中に真理があるのだよ、ジョー」(436)と評し、成功の理由としている。ここで書かれる小説は、扇情的ではない「愛の物語」と考えられ、両親のいないところで金欲と成功に囚われるジョーをベアが矯正した経緯を踏まえると、ベアには「第一部」で姉妹の成長を促した母のように、「心」を示し導く役割を持つといえる。ベアは道徳のある人物として描かれ、“**I haf a heart and I feel the thanks for this**”「私には心があり、そのことに感謝しています」(341)というセリフからも、彼が道徳的な「心」を持った人物であるとわかる。

つまり、ベアという人物は父の影を見せ、「魂」を持つ存在であると同時に、「心」としての側面も垣間見せる人物である。「第二部」のジョーと父マーチ氏との関係は、“for the time had come when they could talk together not only as father and daughter, but as man and woman, able and glad to serve each other with mutual sympathy as well as mutual love 「父娘だけでなく、一人の男と女として、彼らは語り合えるようになり、互いの愛のような思いやりで、喜んで互いに奉仕できるようになっていた」(433) とあるように、ジョーとマーチ氏は互いに「魂」を持つ存在として平等であり、その父に似るベアは、「魂」を持つ精神のレベルにおいて対等な結婚相手なのである。

さらに、ジョーとの関わりを生むベアの「欠点」にも触れておく。ベアのセリフにはスペルのミスがあり、英語が堪能でないことを表している。加えて、ジョーがベアと距離を縮めるきっかけとなる、ずぼらな生活や私物管理の適当さも、魅力とは考えにくい。決定的なのは彼の年齢であり、ジョンやローリーなど、他の姉妹の結婚相手と比べると、明らかに「時期を逃した」男性である。そんな彼との結婚が、オルコットの抵抗であるという考察が多くされているが、ここでは彼の欠点に対するジョーの行動に注目したい。ジョーはベアの身の回りの整頓をし、彼の私物に刺繍を施すなど、「家庭的な」能力を発揮する。それを知ったベアは、彼女にドイツ語を教えるのだが、重要なのは、ジョーの仕事に対し、ベアがただ受け取るだけではないという点である。また、『若草物語』の中でジョーがベアに英語を教える場面はないが、『若草物語 第三部』(*Little Men*, 1871) 以降の彼の英語には問題がなく、ある程度彼女が指導に関わったことは想像できる。つまり、二人の関係においては、女性がただ男性に尽くすだけの関係に転換が図られている。成田の「単に声や、思想ではない、現実にしっかりと根を張った「父親」をジョーは希求したのである」(70) というベアとの結婚に対する見解をもとに考えると、ベアの「欠点」は、ジョーが直接的に支えるきっかけとして描かれていると言える。つまり、ベアは「魂」と「心」を持つ、精神面でジョーと同等であり、お互いに支え合える関係にある人物なのだ。

2.4 ベアと結婚することの意味

ジョーがローリーを拒絶してまで、言い換えれば、オルコットが読者の期待を裏切ってまで描いたベアとの結婚にはどのような意義があるのか。

結婚後、プラムフィールドでのジョーは、“Jo was in her element that day, and rushed about with her gown pinned up, her hat anywhere but on her head, and her baby tucked under her arm, ready for any lively adventure which might turn up” 「その日ジョーは本領を発揮し、ガウンを留め上げ、帽子は頭の上になど置かず走り回った。脇に赤ちゃんを抱え込み、これからのどんな冒険にも準備万端であった」(487) とあるように、結婚後もジョーの活発なキャラクターは健在である。ここからは、ジョーもベアのように、未だに自身の性の規範や魅力とされる姿から逸脱していることがわかる。加えて、プラムフィールドで育てる子供たちに混血児や障害児がいたと描かれるのは、ブロンソンの学校の方針を踏襲していることに加え、外見ではなく内面、すなわち精神性を重視する描写と読むことができる。このような「外見的な不完全さ」は、「魂」を持つ彼らの「精神的な完全さ」及び精神のレベルでの平等を強調している。ベアとジョーは双方が「心」と「魂」を持つ存在であり、ベアの外見を読者に望まれない姿にしたのは、単なる抵抗に加え、その内面に目を向けさせる意図もあったと考えられる。ベア夫妻含む、学園の人間の外見的な不完全さが、精神的な優位、「魂」を持つ人間の精神的な成長の可能性を際立たせるのだ。

また、ジョーの執筆活動は、ベアとの結婚のために中断され、ジョーは家庭に落ち着いてしまったと読むこともできる。しかし、「執筆活動」は一つの「仕事」の手段であり、結婚後のジョーは学園の共同運営に携わる「教育者」として、新たな「仕事」を得た。つまり、ジョーの「仕事」は失われず、成長の機会は残されているのである。ベアを貧乏なキャラクターにしたのは、マーチ家に親近感を抱かせることに加え、ジョーに働く理由を与える効果があり、これはローリーとの結婚ではかなえられない結婚の結末である。

『若草物語』以前のオルコットの作品には、「女性」が「女性の力」を以て「男性」を征する、その弱さを暴く、または成長させるという筋の作品がある。これらの男性との力関係を逆転させ、女性に「男性的強さ」を与えるような作品は、「男」と「女」という二元的な対立を前提としたものである。しかし、「結婚」を描くにあたり、オルコットは同じ精神を持つ両性の結びつき、すなわち、エマソンやフラーが訴える「男女の精神の平等」をジョーの結婚を通して描いたのである。「平等」を目指し、超越的な「魂」の存在を主張し、同じ精神を持つ父のような人物と結婚させた。加えて、その相手

を外見的な魅力に欠け、金銭的に余裕のない男性とすることで、精神の完全さを際立たせると共に、結婚後のジョーに精神的な成長の可能性を残したのである。

結論

本論では、『若草物語』における「結婚」について、男性優位社会に対する敗北の結末ではなく、そこに至る過程をジョーの意思として観察した。「結婚」が描かれる「第二部」の初めに、「心」と「魂」という二つの言葉で姉妹の精神が分けて表現されている点に注目し、その精神性の意味とそれぞれを持つ意義から、ジョーがベアを結婚相手として選んだ理由を考察した。

第1章では、「心」を「道徳的な感情及びその感情を制御するもの」、「魂」を「経験から自分の精神を観察し、神を認識する力」と定義し、父母の示す姿と思想が姉妹に与える影響について論じた。「心」は「第一部」を通じて姉妹が母から伝えられたものであるが、オルコットは「心」に加え、父にはじまる超越主義者たちに影響された「魂」という精神性を主張することで、「心」として姉妹に宿る精神的な成長が「神の精神」に保障されたものであるとした。「心」はその成長の一つの形に過ぎず、したがってこの主張は、「女性」にその性の規範に収まらない様々な成長の可能性をもたらすものである。

第2章では、「結婚」を「心」と「魂」という精神観をもとに、ローリーを否定し、ベアを選択した理由を考察した。ローリーがもたらす「裕福」な家庭は、ジョーから「仕事」の必要性を奪い、「魂」を持つ人間としての精神的な成長を制限するものである。また、ジョーの「仕事」のような姉妹の「特質」は、「魂」を持つ女性に成長の機会をもたらすものであり、メグとエイミーの結婚においても、その「特質」は変わらず、精神的な成長の継続が予期される。そして、ベアは精神の上でジョーと平等な存在であり、外見の不完全さはその精神の完全さを強調し、経済的な余裕のなさは、ジョーに「仕事」の機会を与えるもの、すなわち、成長の糧を与える。彼との結婚は、ジョーに精神的な平等と成長をもたらし、肉体的には相互扶助の関係を生むものである。

ジョーの結婚は男女が精神的に平等な関係で結びつくものであり、最終目標ではなく、通過点である。彼女は物理的な諸問題を二人で乗り越え、精神的に高め合う相手として、ベアを選んだ。オルコットは『若草物語』の「結婚」に、精神のレベルでの自由と平等を描いたのである。

引用文献

Alcott, Louisa May. *Little Women*. Edited with an introduction by Elaine Showalter and with notes by Siobhan Kilfeather and Vinca Showalter, Penguin Classics, 1989.

Cheney, Ednah D. *Louisa May Alcott, Her Life, Letters, and Journals*. Roberts Brothers, 1889.

Fuller, Margaret. *Woman in the Nineteenth Century*. Edited by Larry J. Reynolds, W. W. Norton & Company, 1998.

グレゴリー・アイスレイン、アン・K・フィリップス編著『ルイザ・メイ・オルコット事典』、篠目清美訳、雄松堂出版、2008年。

田辺千景「ルイザ・メイ・オールコットと大衆小説」平石貴樹・後藤和彦・諏訪部浩一編『アメリカ文学のアーリーナーロマンス・大衆・文学史』、松柏社、2013年、69-99頁。

成田雅彦「父なき世界の感情革命—『若草物語』とアメリカン・ルネッサンス」高田賢一編著『シリーズ もっと知りたい名作の世界① 若草物語』ミネルヴァ書房、2006年、57-71頁。

西尾ななえ『エマソンと社会改革運動—進化・人種・ジェンダー』、彩流社、2018年。

ノーマ・ジョンストン『ルイザ—若草物語を生きたひと』、谷口由美子訳、東洋書林、2007年。

マーガレット・フラワー『19世紀の女性—時代を先取りしたフラワーのラディカル・フェミニズム』、伊藤淑子訳、新水社、2013年。

山本孝司『超越主義と教育—ブロンソン・オルコット思想研究序説』、現代図書、2011年。

野口 暁生

横川寿美子「思春期の三人—ジョー、ローリー、そしてメグ」高田賢一編著
『シリーズ もっと知りたい名作の世界① 若草物語』ミネルヴァ
書房、2006年、75—87頁。

日本語を母語とする英語学習者による動詞補部の選択：
小節か定節か

若林 知也

1. はじめに

英語においても、他の言語においても、一つの動詞が異なる構造を持つ補部を取る場合があります、そのような場合、第二言語学習者はある形式を他の形式よりも好む傾向があることが知られている(例 Ohba 1988)。本論文では、補部に小節 (small clause) および定節 (finite clause) をとる hear や find などの動詞について、英語を第二言語として学ぶ、日本語を母語とする学習者が、どの補部を好むのか、それはなぜかについて、実証的なデータに基づいて考察する。

英語は一般に、五文型の考えの下に文構造を五つに大別する事ができる。その中でも(1)のような、動詞の後ろに目的語と補語が続く型を「第五文型」と呼ぶ。

- (1) a. I heard her singing.
 b. I saw him walking.
 c. I found him honest.

また、第五文型を取る事ができる動詞の多くは(2)のように、埋め込み文を含む第三文型も取る事ができる。

- (2) a. I heard (that) she sang.
 b. I see (that) you have lost weight.
 c. I found (that) he was honest.

このような一つの動詞で異なる文型の文章を構築できる場合、文型が変われば文の意味や動詞そのものの意味が変わるものがある。例えば(1a)と(2a)を比較すると、(1a)では彼女が歌っている最中に歌声を直接耳にしたのに対し、(2a)では彼女が歌っていたという事実を人から聞いたことを意味する。

(1b)と(2b)に関しては *see* 自体の意味が異なり、(1b)では知覚的な「見る」という意味になるのに対し、(2b)では視覚による思考や判断を表す「分かる」といった意味になる。このような動詞に対して、*find* や *consider* といった一部の動詞は、第五文型と *that* 節を用いた第三文型とで概ね同じ意味を表す。つまり、(1c)と(2c)のように、同じ動詞を用いて同じ意味を表すが構造が異なる文が互いに存在する事がわかる。これらの文のどちらでも表現可能な場面、文脈において英語母語話者と日本人英語学習者では用いる文型に違いが生じるだろうか。また、二者の間に違いがある場合、それは何が原因となっているのだろうか。

本研究では、英語母語話者と日本人英語学習者との間で、英語の第五文型と *that* 節を含む第三文型の使用頻度の違いを調査し、文構造や母語の影響に着目してその原因を探っていく。本論文の構成は以下の通りである。まず、第2章では第五文型の言語的事実を取り上げ、本実験に適する第五文型の文章を検討する。次に、第3章では三つの先行研究を取り上げる。一つ目は北京語と英語の第五文型を比較した Chen (2005) を取り上げる。Chen (2005) は、北京語の母語話者を対象に、英語の第五文型の理解に母語が影響しているかを調べた研究である。この研究結果と残された課題に着目して、理想的な実験方法について検討する。二つ目に取り上げる太田(2000)の実験1は、日本語と英語の第五文型を比較し、英語の第五文型に相応する日本語の構造について調査したものである。この実験結果を考察し、日本人が英語の第五文型を理解する際、日本語の影響を受けている可能性があるかを検討する。三つ目に取り上げる Ohba (1998) では、日本人を対象に補文標識の *that* の扱い方について調べた研究である。この実験結果の考察から、日本人が第五文型を避け、埋め込み文を含む第三文型を使う場合、補文標識の *that* をどのように扱うのかを検討する。第4章では、本研究における仮説と実験について述べる。第2章と第3章での検討を基に、日本人英語学習者は埋め込み文を含む第三文型を第五文型よりも好むという仮説をたて、15人の日本人英語学習者と英語母語話者に実験を行い、結果を分析し仮説を検証する。その上で第5章では、そのような結果となった原因を考え、コーパスなどを用いて複数の原因を論じる。最後に第6章では、本研究の結論と今後の課題について述べる。

2. 言語的事実

英語の第五文型は図1のように、SVOCと表す事ができる。また、目的語と補語で一つの小節 (Small Clause) を作る。この目的語と補語は意味上、主語と述語の関係になっている。

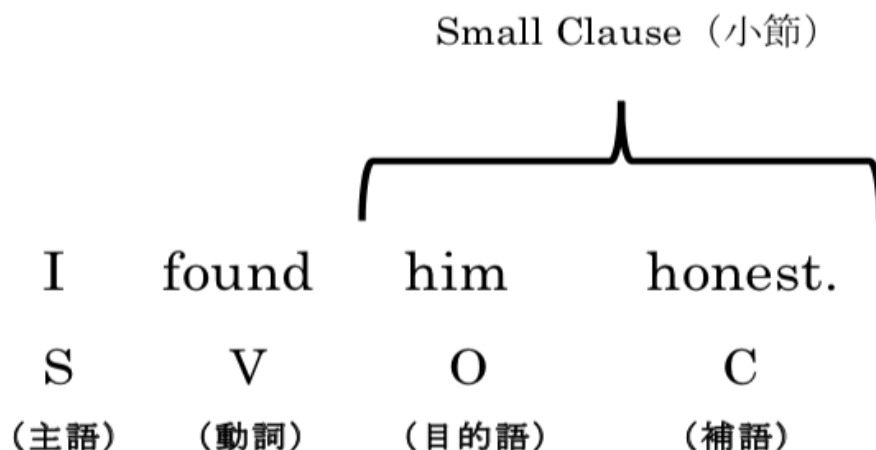


図1. 第五文型の SVOC 構造

英語の第五文型を構築する動詞については、数多くの種類が存在する。本研究では下の表1に示したように、いくつかの動詞を共通の性質や意味によってグループ化した (to不定詞型動詞や意味保存型動詞は、本研究において命名したものである)。また、makeなどのように複数の第五文型の形を作ることのできる動詞も存在する。

表1. 第五文型動詞のグループと主な動詞例

第五文型を構築する動詞群	動詞の例
使役動詞	make, let, have, get
to不定詞型動詞	want, need
知覚動詞	see, watch, look, hear
意味保存型動詞	think, consider, believe, find
その他	keep, leave, help, make

使役動詞は一般的に「～させる」と訳され、目的語に対する主語の使役を表す。to 不定詞型動詞は不定詞が補語になる動詞である。この二つのグループと、その他の動詞は、基本的に埋め込み文を含む第三文型を作ることができない、もしくは、作ることができたとしても第五文型の文とは動詞の意味や文の意味が異なってしまうものである。知覚動詞に関しては第 1 章で述べた、(1a) と (2a) のように、同じ背景を第三文型の文でも表現することはできるが、第五文型で表現する場合、感覚的に知覚したニュアンスになるのに対し、埋め込み文を含む第三文型では、知覚による考えや判断を表す表現となり、完全に同一の意味とはならない。それに対し、第 1 章の (1c) と (2c) のように、意味保存型動詞では、第五文型の文とほとんど同じ意味となる第三文型の文を作ることができる。

第五文型の C (補語) にあたるものも、動詞によって共起するものが変わるため、以下のように多岐に及ぶ。

- (3) a. I found him a kind man. [C = 名詞]
- b. He left the door open. [C = 形容詞]
- c. I saw Mary crossing the road. [C = 分詞]
- d. I want him to clean the room. [C = to 不定詞]
- e. I can't see her as a group leader. [C = as + 名詞/形容詞]
- f. I helped my mother wash the dishes. [C = 原型不定詞]

本研究では、埋め込み文を含む第三文型と、第五文型のどちらも表現可能な場面、文脈において英語母語話者と日本人英語学習者では用いる文型に違いが生じるかを調査する。よって、第三文型と第五文型で文の意味がほとんど異ならない意味保存型動詞が本実験に適していると考えられる。補語に関しては、意味保存型動詞と共起するものが複数あるが、補語の種類によって実験結果が左右するのを避けるため統一するのが望ましいと考えられる。

3. 先行研究

3.1. Chen (2005)

3.1.1. 実験概要

Chen (2005) では、北京語と英語の第五文型を比較し、北京語母語話者が英語の第五文型を使う際、母語である北京語の影響を受けているかどうか研究した。(4)は北京語の第五文型の文章である。この場合、英語の *is* を表す *shi* が省略可能である事から、一見(4)の文は(5a)の第五文型構造なのか、(5b)のような *that* 節を含む第三文型構造なのかが分からない。

(4) Women renwei Mali (shi) hen congming.
We consider/think Mary (is) very intelligent.

(5) a. We consider Mary very intelligent.
b. We consider Mary is very intelligent.

しかし、そもそも北京語は第二文型（補語が形容詞）の時、英語の *be* 動詞を表す *shi* を省略してもしなくても構わない特性を持っている。そのため、(6a)のような英語では非文となる構造も、北京語では可能である。

(6) a. Mali hen congming.
*Mary very intelligent.
b. Mali shi hen congming.
Mary is very intelligent.

また、英語では小節内に否定語を置くことはできないが、(7)のように北京語は否定語をおく事ができる。

(7) Women renwei Mali bu (shi) hen congming.
*We consider/think Mary no (is) very intelligent.

そして、(8)のように北京語では小節が主語位置に来る事ができる。

- (8) Mali hen congming (shi) zhong-suo-zhou-zhi.
Mary very intelligent is well-known.

上記の(4)から(8)までの特性から Chen (2005) では、北京語の第五文型（補語が形容詞）の OC 部分は小節ではなく埋め込み文であると結論付けた。これによって、「北京語母語話者は母語の影響を受け、英語の第五文型（補語が形容詞）よりも、埋め込み文を含む第三文型の方を使用する傾向が高い」と仮説を立てた。

3.1.2. 実験方法

Chen (2005) の実験方法について述べる。被験者は、北京語を母語とし、英語を第二外国語とする中国人 26 名（以降 Group CH）と、統制群として英語母語話者 26 名（以降 Group EN）を対象とし、文法性判断タスクを用いて実験を行なった。実験文に用いられる動詞は **find** と **consider** の二つのみ、また、補語は形容詞のみとした。被験者は、与えられた英語の副詞句に続く、五種類の文の容認度を五段階（1~5）で評価する。文の種類については、① **to be** を省略した第五文型（以降 AP 型）、② **to be** を省略しない第五文型（以降 TO BE 型）、③ **that** を省略した第三文型（以降 FULL 型）、④ **that** を省略しない第三文型（以降 THAT 型）、⑤ 補語に **as** を含む第五文型（以降 ASAP 型）である語種類で一組の問題を **find** と **consider** で二つずつ、計四組 20 文の問題を被験者に解答させた。

(問題例) **find**

(問題文) After talking to Mary for a while,

- ① We found Mary interesting.
- ② We found Mary to be interesting.
- ③ We found Mary was interesting.
- ④ We found that Mary was interesting.
- ⑤ We found Mary as interesting.

3.1.3. 実験結果

二つの動詞を区別せず、各文の種類ごとに容認率の平均をとった結果が下の表 2 である。また、consider と find の二つの動詞で実験を行なったが、動詞の種類によって容認度に差がほとんど見られなかったため、動詞別の結果は省略する。

表 2. Chen (2005, p18) 各実験文の容認度の平均

	<i>n</i>	Mean	Standard deviation	<i>f</i> -value	<i>p</i> -value	Minimum	Maximum
<i>AP</i>				9.025	.004		
Group CH	26	3.73	1.19			2	5
Group EN	26	4.50	0.55			3	5
<i>TOBE</i>				56.245	.000		
Group CH	26	3.02	0.79			2	5
Group EN	26	4.44	0.55			3	5
<i>FULL</i>				2.291	.136		
Group CH	26	4.19	0.83			2	5
Group EN	26	3.86	0.73			2	5
<i>THAT</i>				0.784	.380		
Group CH	26	4.62	0.61			3	5
Group EN	26	4.46	0.65			3	5
<i>ASAP</i>				0.000	1.000		
Group CH	26	2.69	0.80			2	5
Group EN	26	2.69	0.74			2	4.5

Notes: *df* = (1, 50), *p* < .05

表 2 から分かるように、Group CH は③FULL 型と④THAT 型で容認度が高くなり、①AP 型と②TO BE 型では容認度が低い傾向が見られた。よって、北京語母語話者は、英語の第五文型（補語が形容詞）よりも、埋め込み文を含む第三文型の方を使用する傾向が高いという仮説は成立すると考えられる。また、⑤ASAP 型に関しては、統制群の数値が低いため実験文として不適の可能性が高い。

3.1.4. 問題点

Chen (2005) の問題点と今後の課題について述べる。まず、北京語の小節を that 節の埋め込み文と結論づけた点に疑問が残る。(7)では、英語の否定

語は小節内に入らないという前提に対し、北京語の OC 内には否定語が入ることができる事から、北京語の OC は小節ではなく埋め込み文だと仮定した。しかし、(9a)と(9b)のように英語は埋め込み文の中にも基本的に否定語は入らないため、それだけで北京語の OC が埋め込み文だとは仮定できない。

- (9) a. ?I thought that he wasn't honest.
b. I didn't think that he was honest.

また、(8)では北京語の OC が主語の位置に置ける事から、OC が埋め込み文だと仮定した。しかし、(10)のように、英語の小節も主語位置に置けるため、節の位置だけでその節が小節か埋め込み文かを判断することはできない。

- (10) [Workers angry about pay] is the last thing we need now.
(Haegeman & Gueron 1999:109)

最後に実験文についてだが、⑤ASAP 型の実験文の容認度は統制群でも低い。この事から、第五文型として補語の位置に来る語は、その動詞と確実に共起するものでない場合、実験は成立しない。

以上のことから、Chen (2005) では、北京語母語話者は英語の第五文型よりも、埋め込み文を含む第三文型の方を使用する傾向が高い事は分かったが、それが母語の影響であるかは言及することができない。確実に母語がそのような影響を与えている事を証明するためには、その母語と英語の構造的違いや第五文型の訳出の違いを明確にしなければならない。

3.2. 太田 (2000)

3.2.1. 実験概要

太田 (2000) では、英語の第五文型と、それに相応する日本文の比較を通して、日本人が SVOC の文章をどのように日本語訳するのかについて研究している。(11a)は英語の第五文型の文を、(11b)はその構造を示し、(11c)と(11d)はそれに相応する日本語の文とその構造を表している。

- (11) a. I consider [sc him kind]
b. S V [sc O C]
c. 私は [sc 彼を 優しく] 思う。
d. Sは [sc Oを Cく /Cに] Vする。

しかしながら、(11)と同様に(12a)の文を訳出した場合、(12b)のような意味の通じない文、もしくは(12c)のような異なる意味の文となってしまう。この場合、(12a)の適切な訳は埋め込み文を用いた(12d)となる事がわかる。

- (12) a. I found this book easy.
b. *私はこの本をやさしくわかった。
c. 私はこの本を簡単にわかった。
d. 私はこの本が/を やさしいと/簡単だと わかった。

このように、英語の第五文型を日本語に訳出する際、(11a)のようなそのままの形で訳出できる場合と、(11a)のように訳出できない場合とで別れる事がわかった。これに対し太田（2000）では、日本人母語話者を対象に、英語の第五文型に相応する日本語がどのような文なのか実験を行い、その統語構造が英語と相応しているのかを考察した。

3.2.2. 実験方法

太田（2000）の実験方法について述べる。被験者は日本人 11 名を対象とし、日本語の文法性判断タスクを行なった。各設問にあるイラストとその説明を見て、選択肢の日本語が説明文の最後の空欄に入るものとして適切かを四段階で問う実験である。実験文は三パターンあり、①「SはOをCく/CにVする」、②「SはOをCだとVする」、③「SはOがCだとVする」である。①は小節を含む文である。②と③は時制節を含む文であり、小節は含まないが「OはCである」という叙述関係を表すことができるため、小節と同じ意味内容を表すことができる。

(問題例)

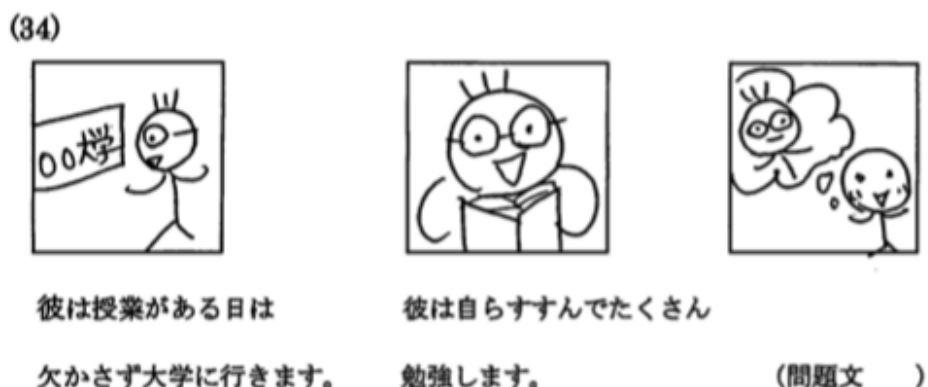


図 2. 太田 (2000, p28) 実験イラスト

- ① 私は彼をまじめに 思います 正 1-2-3 誤 ・ ?
- ② 私は彼をまじめだ と 思います 正 1-2-3 誤 ・ ?
- ③ 私は彼がまじめだ と 思います 正 1-2-3 誤 ・ ?

また、この実験の中で、①の小節として出題されたものは「C く /C に」が V,O のどちらを修飾できるか、またどちらを叙述するイラストと説明を与えたかによって四タイプで区別する事ができる。この区別をマテリアルタイプと呼ぶ。

・ マテリアルタイプ 1

C が V,O 両方に修飾できる問題文、かつ C は O を修飾するイラストを与える。

(例) 私は彼女の話をもとに信じます。 イラスト：話は本当

・ マテリアルタイプ 2

C が O のみ修飾できる問題文、かつ C は O を修飾するイラストを与える。

(例) 私は彼をまじめに 思います。 イラスト：彼はまじめ

・ マテリアルタイプ 3

CがVのみ修飾できる問題文、かつCはOを修飾するイラストを与える。

(例) 私はこの本を簡単にわかりました。 イラスト：本が簡単

・ マテリアルタイプ 4

CがVのみ修飾できる問題文、かつCはVを修飾するイラストを与える。

(例) 私は彼女の話簡単に信じてしまった。 イラスト：簡単に信じる

3.2.3. 実験結果と考察

各問題に正しいと答えた人数の割合について、実験結果を実験文パターン及び、マテリアルタイプ別に示したものが下の表3である。

表 3. 太田(2000, p31) 実験文パターン別/マテリアルタイプ別結果(% , n=11)

	マテリアル タイプ1	マテリアル タイプ2	マテリアル タイプ3	マテリアル タイプ4
実験文パターン1：小節 SはOをCく/CにVする	55	33	20	92
実験文パターン2 SはOをCだとVする	55	60	40	5
実験文パターン3 SはOがCだとVする	82	63	100	3

実験文パターン1、マテリアルタイプ4において92%の被験者が正しいと答えている。よって、「SはOをCく/CにVする」の文は、Cが形容詞ではなく、副詞としてVを修飾すると解釈されることが分かる。また、実験文パターン3、マテリアルタイプ1,3の割合が、82%と100%である。よって、OCを小節として解釈する場合、日本人母語話者は「SはOがCだとVする」の文を用いることが分かる。

以上の点から、日本人が英語の第五文型を、統語構造が相応する日本文(実験文パターン1「SはOをCく/CにVする」)で訳出すると、語彙の組み合わせによって以下の2点の問題点が発生する可能性がある」と太田は考えた。

1. 不自然な印象を与える日本語になる。
2. 「C く / C に」の部分を副詞として考え、主語の動詞を修飾していると解釈してしまう。

また、日本語で SVOC 文を表す場合、小節の代わりに「S は O が C だと V する」といった埋め込み文の構造を用いることがわかった。よって日本人は英語の第五文型を日本語訳する際、埋め込み文を含む第三文型の訳で訳出することが考えられる。

3.3. Ohba (1998)

3.3.1. 実験概要

Ohba (1998) は、日本人を対象に補文標識の *that* の省略について調べた研究である。(13)のような、埋め込み文の補文標識 *that* は省略することが可能である。この場合、省略された場合の *that* を Null Complementizer、省略されていない *that* を Overt *that* と表す。この省略を日本人英語学習者が行う割合について、英語の習熟度と関係していると考え実験を行なった。

(13) I think [CP [C' [C that] [IP John will come]]].

3.3.2. 実験方法

Ohba (1998) の実験方法について述べる。まず、101 人の日本人大学生に英語の習熟度を行い、上位 28 人を高習熟度グループ（以降 Group A）、下位 29 人を低習熟度グループ（以降 Group B）として被験者に選抜した。実験は 2 つのタスクに分かれている。一つ目のタスクは前半と後半に分かれており、前半では被験者に英文で書かれた手紙を与え、それに対する返答を英語で書かせる。後半は、被験者に六つの英文のトピックから一つを選ばせ、それに対する自身の意見を 150 語以上で書かせる。二つ目のタスクは、埋め込み文を含む日本語の文章を被験者に与え、指定した動詞を用いて英文に訳させる。これらのタスクの中で被験者が用いた Null Complementizer と Overt *that* を数え、その割合を調べる。

(タスク 2 : 問題例)

Watasi-wa John-wa asu kuru darou to omou. (Use the verb “think”)

3.3.3. 実験結果と考察

各タスクで出現した Null Complementizer と Overt *that* を数と割合をまとめたものが、下の表 4 と表 5 である。

表 4. Ohba(1998, p129) タスク 1 で出現した 2 種類の *that* の数と割合

	Null Complementizer		Overt <i>that</i>	
	No.	%	No.	%
Group A	31	50.00	31	50.00
Group B	20	32.26	42	67.74

表 5. Ohba(1998, p129) タスク 2 で出現した 2 種類の *that* の数と割合

	Null Complementizer		Overt <i>that</i>	
	No.	%	No.	%
Group A	24	21.43	82	73.21
Group B	13	11.20	95	81.89

タスク 1 では、Group A では一対一の割合で *that* の省略を使い分けるのに対し、Group B は Overt *that* にやや偏りが出ている。このことから、習熟度が低いと *that* を省略しない傾向があることが分かる。それに対しタスク 2 では、両グループとも大きく Overt *that* に偏っている。つまり、日本語を和文英訳する場合はたとえ高習熟度の日本人英語学習者でも *that* を省略しない傾向があると分かる。Ohba (1998) ではこの結果を、被験者が与えられた日本語の問題文に影響を受け *that* を省略しなかったと考察している。(14a)と、その日本語訳である(14b)で示すと、(14a)の補文標識 *that* は(14b)の *to* (と)の部分にあたる。日本文では、この補文標識「と」を省略することができないため、このような日本語を英訳する際、日本人英語学習者は日本語の影響を受け、英文においても補文標識の *that* を省略しない傾向があると考えることができる。

- (14) a. Taro thinks *that* Hanako will have that cat.
 b. Taroo-ga [CP [IP [VP Hanako-ga sono neko-o ka] u] *to*] omotteiru.

以上のことから、日本人英語学習者の補文標識 **that** の省略は、学習者の習熟度と関係がある。またそれ以上に、母語である日本語の影響を大きく受けていることがあり、**that** を省略しない傾向があることがわかった。

4. 実験

本研究では、第3章で取り上げた先行研究の結果と考察をふまえた上で、英語母語話者と日本人英語学習者の間での、第五文型と埋め込み文を含む第三文型の使用頻度の違いを調べるための実験を行なった。

4.1. 実験方法

4.1.1. 参加者

本実験の参加者は、日本語を母語とする英語学習者 14 人と英語母語話者 10 人である。日本人参加者は大学生 11 人、大学を卒業した者（二年以内）三人で成り立っている。彼らはそれぞれ、高校、大学で英語を授業の中で学習しており、参加者全員が大学で英文学を専攻分野としていた。英語母語話者に関しては Amazon Mechanical Turk を用いて募集し、全員が米国で生まれかつ、現在も米国に在住している者に限定した。

4.1.2. タスク

本実験では、英文そのものの解釈を見るために、文法性判断タスクを用いた。また、実験問題は Google フォームを用いて作成し、被験者はオンラインで回答した。各設問に、英語で書かれた文と文の意味と一致する絵が一つずつ示されている。次に示されているのが問題の例である。参加者は、英文が絵の内容を文法的に正しく説明できているかを五段階(正しい、多分正しい、判断できない、多分間違っている、間違っている)で判断するよう求められる。出題された問題は計 30 題（ターゲット文: 12 題 フィラー文: 18 題）で、15 分～20 分程度を目安に実験を行った。

(問題例)

Tom finds the book is interesting.

Tom



図 3. 実験イラスト

問題文に使われる動詞は、think、believe、consider、find の四種類である。また、問題文は三種類の構文タイプに分かれており、各構文タイプに上記の動詞を用いた四種類の文が出題された。

構文タイプ 1 は(15)のように、that 節を省略した第三文型の埋め込み文である（以降 SV S'V' と示す場合あり）。

構文タイプ 1

- (15)
- a. John thinks Sarah is beautiful.
 - b. Jessica believes David is handsome.
 - c. Mary considers James is kind.
 - d. Tom finds the book is interesting.

構文タイプ 2 は(16)のように、that 節を省略しない第三文型の埋め込み文である(以降 SV that S'V' または、that SV と示す場合あり)。

構文タイプ 2

- (16) a. Tom thinks that the book is interesting.
b. Mary believes that James is kind.
c. Jessica considers that David is handsome.
d. John finds that Sarah is beautiful.

構文タイプ 3 は(17)のように、第五文型の文である（以降 SVOC と示す場合あり）。

構文タイプ 3

- (17) a. Mary thinks James kind.
b. John believes Sarah beautiful.
c. Tom considers the book interesting.
d. Jessica finds David handsome.

以上の四種類の動詞を使用した三構文タイプ、計 12 題の問題のほかにフィラーが 18 題あった。フィラーに関しては本研究の調査とは無関係の問題文のため分析の対象外とする。

4.2. 仮説

第 3 章で取り上げた、太田(2000)の実験結果から分かるように、英語の第五文型は、日本語の小節構造「S は O を C へ / C に V する」と対応せず、むしろ埋め込み文である「S は O が C だと V する」と対応している。このことから、以下の仮説を立てる。

仮説 1. 日本人は英語の第五文型よりも第三文型を好む傾向がある

また、Ohba (1998) から分かるように、日本人は埋め込み文の文章において、補文標識の *that* を省略しない傾向があると考えられる。よって以下の仮説を立てる。

仮説 2. 補文標識の **that** を省略しない埋め込み文を含む第三文型の容認率が、省略している第三文型、または第五文型の文章よりも高い。

4.3. 実験結果

この実験の結果からはまず、日本人英語学習者は構造タイプに容認率の差があることがわかった。表 6 は英語母語話者全体（以降 E 群）と日本人英語学習者全体（以降 J 群）の構造タイプごとの容認率の平均値を示した物である（数値は、五段階の容認度を 2 から -2 に数値化し平均をとった）。

表 6. 米国人参加者と日本人参加者の構造タイプ別の容認度平均

	E群	J群		E群	J群		E群	J群
タイプ 1 (SV S'V')	1.4	0.8	タイプ 2 (that SV)	1.5	1.2	タイプ 3 (SVOC)	1.3	-0.9

E 群の容認率を見ると、タイプごとに大きな差はないのが分かる。しかし J 群に関しては、タイプごとに容認率に差が生まれている。タイプ 2 がタイプ 1 と差をつけて最も容認率が高く、E 群との違いもほとんどないことから、日本人英語学習者は補文標識の **that** を省略しない傾向があると言える。よって仮説 2 は成立する。また、タイプ 1 の容認率も低くはないことから、**that** が省略されていても概ね容認することが分かる。しかしながらタイプ 3 に関しては全く異なり、概ね容認しないことがわかった。したがって、日本人英語学習者は第五文型の SVOC 構造よりも埋め込み文を持つ第三文型の SV (that) S'V' 構造を好むと言える。よって仮説 1 も成立する。

次に各動詞別の容認度に着目し、E 群と J 群とでどのような違いがあるか検討する。表 7 は、E 群と J 群の問題ごとの容認率の平均値を示した物である。

表 7. 米国人参加者と日本人参加者の問題別の容認度平均

タイプ1 (SV S'V')	E群	J群	タイプ2 (that SV)	E群	J群	タイプ3 (SVOC)	E群	J群
think	1.2	1.6	think	1.4	1.4	think	1.2	-0.9
believe	1.7	1.3	believe	1.6	1.6	believe	1.0	-1.4
consider	0.9	0.1	consider	1.0	1.0	consider	1.7	-1.1
find	1.7	0.2	find	1.8	0.9	find	1.4	0.1

まず **think** についてだが、タイプ 1 と 2 の間での違いは両群ともにほとんどない。また、J 群の方が E 群よりも容認度が高い傾向があり、他の動詞にはほとんど見られなかった。タイプ 3 に関しては、E 群と J 群で大きく異なり、構造タイプ別の結果同様、日本人は第五文型の SVOC 構造を避ける傾向があると言える。しかし **think** のみ、タイプ 2 よりタイプ 1 の方が、容認率が高い結果となった。つまり **think** のみ仮説 2 に反して、日本人も **that** を省略する傾向がある可能性がある。次に **believe** についてだが、全てのタイプで構造タイプ別の結果と同様の結果となっている。タイプ 1 と 2 に関しては、**think** と同様に概ね容認することが分かる。タイプ 3 においては、容認度が全動詞の中で最も低く、ほとんど容認されていない。**consider** に関しては、両群ともタイプ 1 での容認度は高くない。逆にタイプ 3 で E 群の容認度が高いことから、**consider** は第五文型の SVOC 構造で用いられることが多いことが分かる。それに対してタイプ 3 の J 群の数値が低いことから、日本人が第五文型を避けていることが分かる。最後に **find** についてだが、E 群に関しては全タイプで容認率が高い。それに対し、J 群はタイプ 1 とタイプ 3 の容認率が低い。ただし、他の動詞と異なりタイプ 3 の容認率がマイナスになっていない。このことから、日本人は他の動詞の第五文型と **find** の第五文型構造である **find OC** では認知や容認に何らかの違いがあると考えられる。また、J 群において **consider** や **find** の容認率が全体的に低く、**think** や **believe** のタイプ 1 とタイプ 2 の容認率が非常に高いことから、各動詞別で影響を与える要因があると考えられる。

5. 考察

実験結果から、まず二つの疑問点が挙げられる。一つ目は、なぜ日本人にとって、第五文型を認識することが埋め込み文を含む第三文型を認識することよりも難しいのかということである。日本人は英語の第五文型を日本語の埋め込み文を含む第三文型の形で訳出する機会が多いため、母語の影響を受けて第三文型を好むという考えが正しいならば、第五文型の容認率は動詞の種類に関係なく一律して低くなるはずである。しかし実験では、タイプ3の容認率はどれも低かったものの、**find** と他の動詞とでは明らかに容認率に違いが生じている。これは二つ目の疑問点である、動詞の種類によって容認率に差が生じている原因は何かということと結びついて考えることができる。

したがって、日本人が第五文型よりも第三文型を好む原因は、英語の第五文型に対応する日本語が、埋め込み文を含む第三文型の形であるがゆえに、母語の影響を受けていることのみ起因しているとは言えず、動詞の種類と関係する何らかの別の要因が存在していると考えられる。

5.1. 動詞の使用頻度調査

動詞の種類が関係しているとなると、考えられる要因として動詞の使用頻度や認知度の違いが挙げられる。**think** はおそらく実験参加者の誰もが第三文型の形で使用したことがあるから容認率が高くなり、**find** や **consider** は使用機会が **think** と比べて少ないため全体的に容認率が下がっていると予想できる。これを確かめるために、日本人英語学習者を対象としたコーパスを用いて各動詞の使用頻度を文型別に調べた。

この調査では **JEFL Corpus**（日本人の中学一年～高校三年を対象とした英作文のコーパス）を用いた。各動詞の現在形と過去形の二つで検索し、実験同様、構文タイプ1（SV S'V'）、構文タイプ2（SV that S'V'）、構文タイプ3（SVOC）の三タイプに当てはまる文の数と割合を下の表8にまとめた。また、学習者を対象としたコーパスのため非文も数多く存在するが、(18)のような文型が判断できるものは対象とし、文型が判断不可能なものとして上記の構文タイプに該当しない者はその他としてまとめた。

(18) But I think our school festival is [JP:つまらない].

(JEFLL 1148 05880)

(非文だが、構文タイプ 1(SV S'V')として数える。)

表 8. コーパス内における各動詞の構文タイプごとの使用数と割合

	タイプ1 (SV S'V')	タイプ2 (SV that S'V')	タイプ3 (SVOC)	その他
think (2566) / thought (799)	59.7% (2009)	29% (976)	0.7% (24)	10.6% (356)
believe (101) / believed (21)	7.4% (9)	14.8% (18)	0% (0)	77.8% (95)
consider (10) / considered (6)	0% (0)	0% (0)	0% (0)	100% (16)
find (209) / found (345)	6.9% (38)	6.5% (36)	4.6% (23)	82% (457)

think に関しては、圧倒的に検索数が多かった。また使用頻度の割合も、数が最も多かった構文タイプ 1 (SV S'V') と、次に多い構文タイプ 2 (SV that S'V') の割合に対し、構文タイプ 3 (SVOC) が非常に少ない結果となり、実験結果の数値の比率とも合致する。このことから、think のタイプ 1、タイプ 2 の容認度が高かったのは、その使用頻度が高いことが原因であると考えられる。また、タイプ 2 よりタイプ 1 の方が、倍以上使用数が多いことに関しても、実験の結果と合致する。つまり日本人は think に関していえば、使用する頻度が非常に高いため、補文標識の that を省略する傾向が他の動詞よりも高いと言える。believe に関しては、SVO の形の第三文型が多く、予想よりもタイプ 1、タイプ 2 の数値は多くはなかった。単語の総数も find の半分以下であるのに対して、実験における容認度の数値が大きいことはコーパスからでは判断ができない。しかし、タイプ 3 の文が 100 件以上の中から 1 つもないことは、believe の SVOC 構造の容認率が非常に低かった実験結果と結びついていると考えられる。また、タイプ 1 よりもタイプ 2 の割合が大きいことから、believe は think とは異なり補文標識の that を省略しないで使われる傾向があると分かる。believe の実験結果も同様にタイプ 1 よりタイプ 2 の容認度が高かったため、コーパスでの調査と実験結果は概ね合致している。consider は全体の使用数が非常に少なかったためコーパスから議論できることは少ないが、使用頻度の少なさが実験における consider 全体

の容認率の低さに起因しているとも考えられる。しかし、同様に全体の容認率が低かった *find* に関しては、検索数は 500 件以上あり、全体的に実験の容認率が高い *believe* より使用頻度が高かった。*find* のほとんどは SVO の形の第三文型で使われており、構文タイプ 1~3 の形で使われている割合に差は少なく、それぞれ同程度に低かった。*find* の実験結果も、全てのタイプで差が少なく同程度に低かったことから、実験における容認率の低さは動詞自体の使用頻度ではなく、その動詞が使用される文型の頻度と関係していると結論付けることができる。

以上のことから、実験の容認率は各動詞の文型ごとの使用頻度と関係性があることがわかった。つまり、日本人英語学習者が用いる構文は動詞ごとに偏りがあり、その動詞が複数の文型を持ち、異なる文構造を作れる場合でも特定の文構造に偏る傾向があると考えられる。

5.2. 統語構造の難易度

前述の考察から、日本人が英語の第五文型を避け、埋め込み文を含む第三文型を好む現象は、母語である日本語や各動詞における構文ごとの使用頻度が関係していることが分かった。しかし二つの文型の統語構造に着目すると Wakabayashi, Dueñas, Ota, and Narumi (2016) にあるように、そもそも埋め込み文を含む第三文型が第五文型よりも構造的に単純であるから、話者は簡単に文を作ることのできる第三文型を好むという分析もできる。それぞれの文型の統語構造を以下の図 4、図 5 で示す。

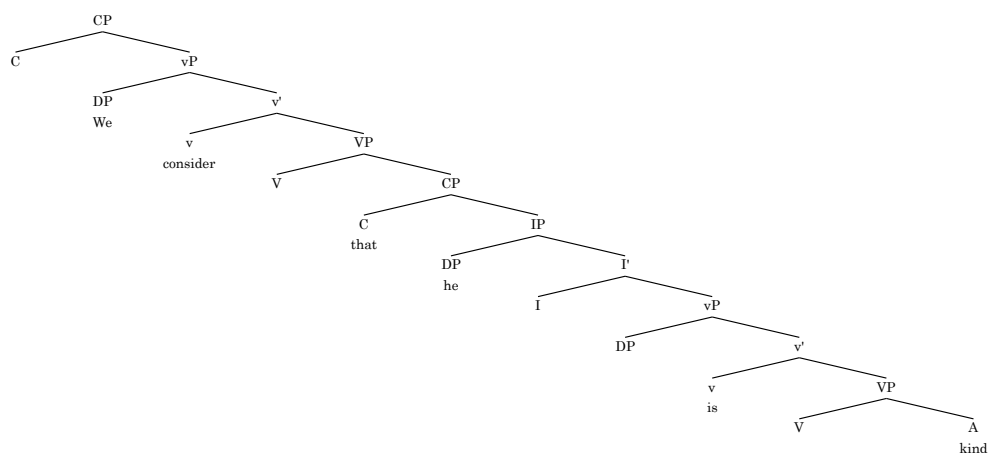


図 4. 補文標識 *that* を含む英文の統語構造

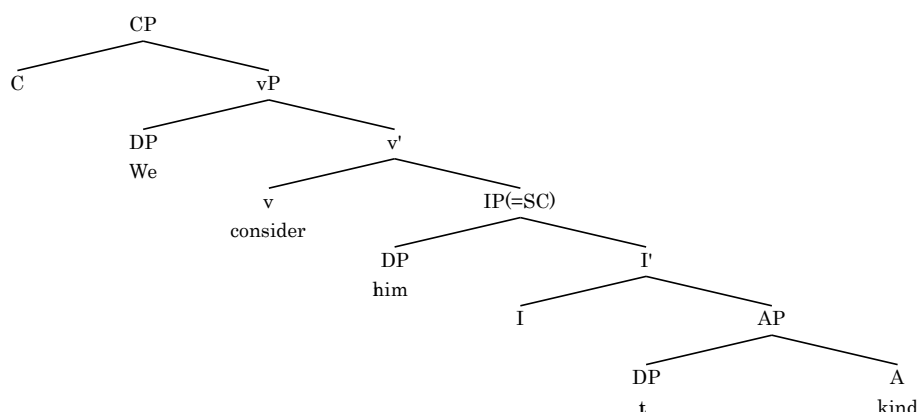


図 5. 小節を含む英文の統語構造

図 4 にあるように、埋め込み文を含む第三文型では CP 以下の埋め込み文の構造を繰り返す形となるのに対し、第五文型では、図 5 のように小節構造を持つため、単純な構造の繰り返しとはならない。同じ構造を繰り返すだけの第三文型の方が、統語構造が簡単であるから、話者が好む傾向がある (Wakabayashi, Dueñas, Ota & Narumi. 2016) と考えることができる。もしこの統語構造の違いが影響を与えている場合、日本人だけでなく、他の言語を母語とする英語学習者も第五文型を避け、第三文型を好む傾向が見られると予想される。

6. 結論と今後の課題

本研究では、(19a) (=1)と(19b) (=2)のような、同じ動詞を用いて同じ意味を表すが、構造が第五文型と埋め込み文を含む第三文型とで異なる文に対して、どちらでも表現可能な場面において英語母語話者と日本人英語学習者との間で使用頻度に違いがあるのかを調べてきた。

- (19) a. I found him honest. (=1c)
 b. I found (that) he was honest. (=2c)

太田 (2000) の実験 1 から、日本人は英語の第五文型を日本語訳する際、埋め込み文を含む第三文型の訳で訳出する傾向があるため、英語の第五文型を避け第三文型を好むと仮説を立てた。また、Ohba (1998) から、日本人は補

文標識 *that* の省略をしない傾向があるため、英語の第五文型を避けて第三文型を用いる際、*that* を省略しない傾向があると仮説を立てた。実験は、北京語の母語話者を対象に、英語の第五文型の理解に母語が影響しているかを調べた Chen (2005) を参考に、文法性判断タスクを用いて、英語母語話者と日本人英語学習者を対象に実験を行った。その結果、使用した動詞ごとで容認度の差に違いはあったものの、日本人英語学習者は英語の第五文型よりも埋め込み文を含む第三文型を、その中でも *that* を省略しない第三文型を好む傾向があった。また、英語母語話者にはこのような結果が見られなかったため、これは母語である日本語の影響を受けている可能性が高いと言える。しかし、各動詞で容認度の差に違いが生じていたことから、動詞の種類による影響も日本人英語学習者は受けていると考え、日本人を対象としたコーパスを用いて、各動詞の使用頻度の調査を行った。その結果、各動詞に日本人英語学習者が使用する文型の偏りがあり、使用度の高い文型ほど容認率が高い傾向があった。よって、各動詞が持つ文型の使用頻度の差も影響を及ぼしていることがわかった。上記二つの調査より、日本人英語学習者の英語構造選択には構造的好みと使用頻度の二要素が存在すると考えられる。つまり、文構造の種類の中に、自然と好んで用いられる物と使用が避けられている物があるのと同時に、各動詞を普段どのような文構造で用いるかが、日本人英語学習者の英語構造選択に影響を与えている。どのような場合でも構造的好みの影響が存在すると思われるが、使用頻度の高い一部の動詞が用いられる場合は、基本的に好む構造よりもその動詞を用いた使用頻度の高い構造の方を優先する傾向があると考えられる。最後に、二つの文型の統語構造に着目し、埋め込み文を含む第三文型の構造では繰り返しの構造となり単純なのに対し、第五文型は小節を含むため第三文型よりも複雑であるから話者は第三文型を好む傾向がある可能性があることも言及した。

今後の課題としては、まず、本研究の結果からでは日本人英語学習者が第五文型を避け、埋め込み文を含む第三文型を好むことが、母語である日本語の影響によると結論付けることはできない。他の言語を母語とする英語学習者のデータを収集していないため、この傾向が日本語を母語とする学習者のみ見られるものであるか、多言語の母語話者にも見られる傾向なのかを判断することができない。また、動詞の文型の使用頻度が影響を及ぼしていることは分かったが、各動詞で頻繁に使用される文型に違いがある場合、なぜ

その偏りが生じているのかは本研究では判断できない。これを判断するには、学校教育による影響が出ていると予想することはできるため、教科書などを用いて使用されている文型のデータをとる必要がある。最後に、統語構造の難易度が影響を及ぼしていることも本実験からは判断できない。これを証明するためには、統語構造に着目した別実験を行う必要がある。

参考文献

- 太田恵美 (2000). 日本人英語学習者におけるいわゆる第五文型(SVOC)の習得について. 群馬県立女子大学文学部卒業論文, 26-36.
- Chen, M, Y. (2005). English Prototyped Small Clauses in the Interlanguage of Chinese/Taiwanese Adult Learners. *Second Language Research*, 21 (1), 1-33.
- Haegeman, L., & Gue'ron, J. (1999). *English Grammar: A Generative Perspective*. Wiley-Blackwell.
- Ohba, H. (1998). The Development of the Tensed Complementizer that in Japanese EFL Learners' Interlanguage. *JACET Bulletin*, 29, 125-135.
- Wakabayashi, S., Dueñas, I, F., Ota, E., & Narumi, Y. (2016, Sep). *JLE's Production of Small Clauses and Post Nominal Modification*. Paper Presented at Pacific Second Language Research Forum (PacSLRF) 2016. Chuo University.
- Japanese EFL Learner (JEFLL) Corpus. '05880'
<<https://scnweb.japanknowledge.com/JEFLL2/>>

Effects of Music Tempo and Lyrics on Physical Activity

Miki Kuwashima

1. Introduction

These days, more and more people are very concerned about being healthy in the world. Therefore, several physical activities are becoming popular. Meanwhile, there are a lot of people wearing earphones during their physical activities. They are listening to some audio content because it can benefit their physical activities. Thus, many researchers have studied the effects of audio, especially music, on physical activity. For example, Waterhouse, Hudson, and Edwards (2009) state that fast tempo music had a greater effect on physical activities than slow tempo music in their study.

In this thesis, I investigate whether not only tempo but also song lyrics have measurable effects. Guyatt, Pugsley, Sullivan, Thompson, Berman, Jones, Fallen and Taylor (1984) report that verbal encouragement can maintain people's walking performance. That is, encouragement can prevent a decrease in performance during physical activities. From the studies, I hypothesize that songs with fast tempo and encouraging lyrics will be more effective in maintaining one's level of physical activity. Therefore, I investigate whether there are any differences between the effectiveness of lyrics in an individual's native language which can understand the meaning and lyrics in a non-native language which cannot understand the meaning. Thus, this study presents the results of the effects of music tempo and lyrics on physical activity.

2. Background

2.1 Previous Research

As mentioned above, in this study, I hypothesize that fast tempo music will have a positive effect on physical activity and encouraging lyrics could support performance maintaining physical activity. The hypotheses are based on the two

previous studies, one conducted by Waterhouse et al. (2009), and the other by Guyatt et al. (1984).

2.2 Waterhouse, Hudson and Edwards (2009)

Several studies say that fast tempo music is preferable to slow for doing physical activity. Among them, Waterhouse et al. (2009) studied the effects of music tempo on performance during bike exercise. The participants included twelve healthy male university students without injury or cardiovascular issues. They studied participants on three occasions, in each case using the same set of six music tracks which differed in duration and tempo. They also used the set of tracks at different tempos: at normal speed, at 10 BPM¹ faster, and at 10 BPM slower. However, the pitch of the song was not changed. They used six music tracks (1-6) in the study, but they analyzed only the results from tracks 2-5 (without tracks 1 and 6), in order to avoid the effects of getting going and being nearly finished. Participant heart rate was continuously measured, and the exercise bikes used gave a continuous record of power output and distance covered. In the study, they made two hypotheses with regard to the effects of music tempo on physical activity performance.

- a) If track tempo is important, the performance results with faster tempo music tracks will be better than slower ones.
- b) If the overall tempo of the program is important, the performance results with fast tempo programs will be the best, and normal tempo will be better than slow tempo.

In the results, analysis of the recorded data supported two of the hypotheses. Waterhouse et al. found significant positive correlations; that is, with a track that had a faster tempo, the rates at which individuals pedaled, the amount of work performed and distance, together with the physiological response to exercise inferred from the heart rate data, all increased. They found that faster music,

whether due to the intrinsic tempo of the music or having increased the tempo artificially, enabled exercise to be performed at a greater work rate, and with greater physiological effects and more positive subjective responses, than did slower music. Also, they concluded these effects were due to motivational influence. In the study, only riding an exercise bike was used. Therefore, I investigated whether fast tempo music had positive effects on other form of physical activities in the same way with bike exercise in this study.

2.3 Guyatt, Pugsley, Sullivan, Thompson, Berman, Jones, Fallen and Taylor (1984)

Guyatt et al. (1984) studied the effects of encouragement on walking test performance in a study that controlled for the nature of participants' underlying disease. There were 43 participants with chronic airflow limitation or chronic heart failure or both. They performed a series of two and six minute walks every 2 weeks for 10 weeks (a total of 5 times) with encouragement or with no encouragement. In addition, the number of times and the order in which the participants were given encouragement were randomized.

During walks, encouragement was given by the supervisor in 30 second intervals, and she delivered the participant predetermined encouraging phrases such as "You are doing well." or "Keep up the good work."

According to the results, the effect of encouragement was greater during the second and third two minute intervals of the six minute walk (that is, four and six minutes after the start of the six minute walk) than during the first. The result suggests that the decrease in walking performance that occurred after the first two minutes of the six minute walk has been attenuated by the supervisor's encouragement. In other words, it appears that encouragement can help and support a person's ability to maintain physical activity performance. Based on the results from this study, I hypothesize that encouraging song lyrics can support maintaining physical activity performance. Moreover, the benefits come from the encouraging meaning in the lyrics and not only from the melody or intonation of the lyrics in

song. Thus, I conducted an experiment with songs that have two kinds of encouraging lyrics, those in the participants' mother tongue (Japanese) and those in another language (English), to test the hypothesis. In other words, in Japanese, it was presumed that the support of the encouraging lyrics would have a positive effect on their physical activity performance because they could understand the meaning of the lyrics. On the other hand, in English, it was presumed that the lyrics would not have a positive effect because they couldn't understand the meaning of the lyrics.

In addition, judging from the two previous studies, the hypothesis that fast music with encouraging lyrics in native language will have the greatest positive effect on physical activity performance.

3. Experiment

3.1 Participants

Twelve people who go to the gym regularly participated in this study. The participants' ages ranged from 20 to 68 years. They were distributed into two groups according to their age and gender. Each group had the same tasks under different situations.

Six participants including four men (A: 20, B: 21, C: 47 and D: 65 years old) and two women (E: 27 and G: 67 years old) belonged to Group1. Group2 also had 6 participants including four men (H: 21, I: 48, J: 43 and K: 68 years old) and two women (L: 22 and M: 66 years old).

At first, they answered a questionnaire (Appendix B). According to the questionnaire, all participants report their mother tongue to be Japanese, and they all have studied English until they were in high school. In addition, they feel that they are not good at English. The questionnaire had a question about which type of exercise they usually do, anaerobic or aerobic workouts or both. In addition, I compared the results of the experiment not only by music tempo and lyric language but also by the type of exercise they perform regularly.

3.2 Materials

3.2.1 Physical Activity Selection

The two exercises which were used for two kinds of physical activity in the experiment were Plank and Running.

Plank is a core training method. This is categorized as a form of anaerobic exercise. It is an exercise that keeps straight from a person's back to legs with one's elbows on the floor while lying on one's face (Figure 1). In the Plank task, it's important how long the participants can keep the form. Therefore, a stopwatch was used to count the time. Also, an iPhone with earphones was used to play music for the participants during the experiment.

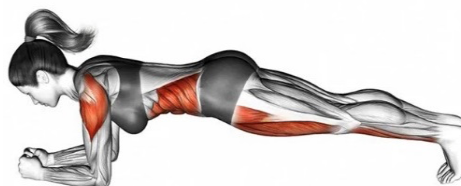


Figure 1

On the other hand, running is categorized as an aerobic exercise. In the Running task, an application, “Runkeeper²,” was used to record several measurements of their physical activity. Also, I created an account so they could log in by their cell phones for the experiment. In addition, the application recorded the routes they ran with GPS, so the records were deleted from the app after the necessary information was copied to protect participant privacy. Furthermore, the participants’ phones were used with earphones to play music during the experiment.

3.2.2 Music selection

Two different songs with fast and slow tempo were prepared for each group. A fast tempo song (FM), “Try everything” (the theme song of the Disney movie “Zootopia” [BPM=116]) was chosen for Group1. In contrast, a slow one (SM), “When You Wish upon a Star” (the theme song of the Disney movie “Pinocchio” [BPM=80]) was selected for Group2. In the previous study by Waterhouse, Hudson and Edwards (2009), there was a difference of 20 BPM between the slow and fast tempo music. Hence, in this study, the difference in tempo between the two songs

was set to more than 20 BPM. The point was to divide participants into two groups to evaluate the effects of music tempo.

Also, both songs had positive lyrics that can encourage people. The purpose of the songs that were chosen is to investigate the effect of encouraging words on physical activity performance. In addition, Japanese and English versions of the songs were prepared to compare the effects of lyrics in native language which they could understand to lyrics in non-native language which they couldn't understand.

In sum, four audio stimuli were used: Japanese (FMJ) and English (FME) version of the fast tempo song and Japanese (SMJ) and English (SME) version of the slow tempo song. Thus, four separate audio files containing these music were prepared, and the audio repeats the same song for 20 minutes.

3.3 Procedure

In this study, the effect of music on physical activity was examined. Thus, to make the necessary comparisons general results were needed for a baseline standard. So, at first, the participants did the tasks with No Music (NM), and the measurements of their performance were used as a baseline for comparison.

Second, Group1 (Fast Music Group) did each task with FMJ and FME audio stimuli; that is, they performed the exercises 3 times for both tasks: NM Plank and NM Running, FMJ Plank and FMJ Running, as well as FME Plank and FME Running. On the other hand, Group2 (Slow Music Group) performed both tasks 3 times with the SM versions. The 3 experiment sessions were done on different days.

At first, the duration of each participant's Plank task was measured and recorded at the gym. Then, after the Plank task, they needed to do a Running task where they could on the same day. Also, they needed to do Running tasks 3 times on the same course. Furthermore, it was necessary for all Running tasks to be done in almost the same climate. Finally, participants were required to do the tasks when they felt good and their physical health was not damaged by sickness or muscle pain, in order to avoid the effects of their health conditions.

3.3.1 Plank

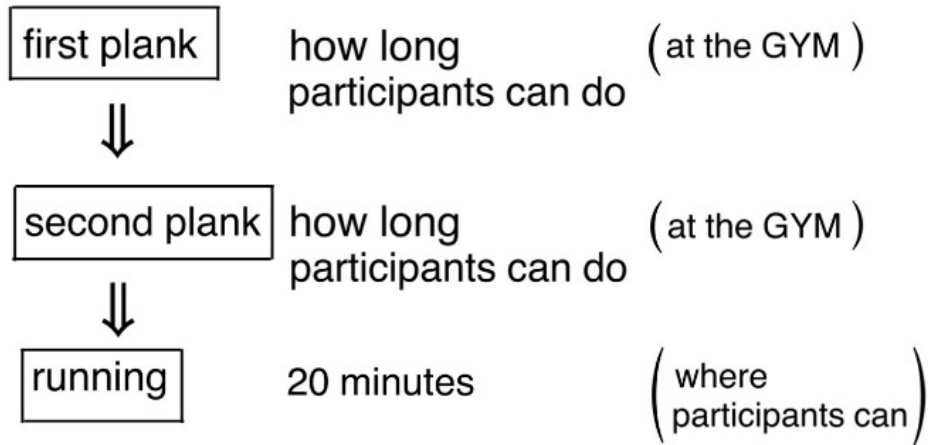
Planking is a core training method. It is an exercise that keeps straight from a person's back to legs with one's elbows on the floor while lying on one's face. By doing planks, people can train their inner muscles such as the oblique, rectus and transverse abdominal muscles. While keeping the plank form, muscle fatigue makes it difficult the longer people stay in that position. Therefore, I compared how long the participants can keep the plank form in this study. It was measured by a stopwatch how long (seconds) participants could keep a plank. In addition, this study considered the effects of music on not only a physical activity but also keeping the performance. Thus, in the Plank task, the participants had to do a plank twice in a row. Also, there was a one-minute break between the 2 Plank tasks. That was how I collected data with non-fatigue (first plank) and fatigue (second plank) conditions. Then, the difference between first score and second score was calculated to consider the effects of music on maintaining performance.

3.3.2 Running

Running is a form of aerobic exercise, which is to run at a slow speed. It is done for various purposes such as training to improve endurance in athletics, long-distance running and other sports, and training for entertainment and health promotion. In addition, it is training that makes people breathless as people continue to run, and keeping up the pace of running has gradually become more difficult. It was measured how fast (meters/minute) they could run. As with the Plank task, it was necessary to consider the effect of music on maintaining performance. Thus, they had to run for 20 minutes, and the application measured the rate every 10 minutes during the 20 minute activity. The first 10 minutes score was used as the non-fatigue result and the second 10 minutes score was used as the fatigue result. Together, the two scores were measured and the difference was calculated to consider the effect of music on maintaining performance.

□

One Day Experiment Progress



□

Three Days Conditions by Group

		Group1	Group2
day1	1. Plank	No Music (NM)	No Music (NM)
	2. Running		
		↓	↓
day2	1. Plank	Fast Music in Japanese (FMJ)	Slow Music in Japanese (SMJ)
	2. Running		
		↓	↓
day3	1. Plank	Fast Music in English (FME)	Slow Music in English (SME)
	2. Running		

4. Results

4.1 Effects of the Music

Figure 2 presents the differences between each participant's results, their score without music (NM) subtracted from the average of the results for each participant when they did tasks with fast music (FM: Group1) or slow music (SM: Group2). Figure 2-1 shows the results of Group1; that is, it shows the effects of fast music (FM). On the other hand, Figure 2-2 has Group2's results, which shows the effects of slow music (SM).

Figure 2-1 indicates that fast music has a positive effect on physical activity, as all the difference scores between the two conditions (except for G) on the Plank task with FME are positive. In the Plank task, the greatest positive score is +36 seconds, the least positive score is +0.5 seconds, and the average is +14.3 seconds. In the Running task, the greatest positive score is +12 m/min, the least is +3 m/min, and the average is +7.0 m/min. There was thus a significant increase in performance on the plank and Running tasks recorded with fast music. However, looking at Figure 2-2, it can be seen that the majority of the performance scores were worse than the results without music. From this, it can be inferred that slow music has a negative effect on physical activity. Also, comparing the averages for each group, the results show that fast music has the positive effect and slow music has the negative effect on both Plank task (Figure 3-1) and Running task (Figure 3-2).

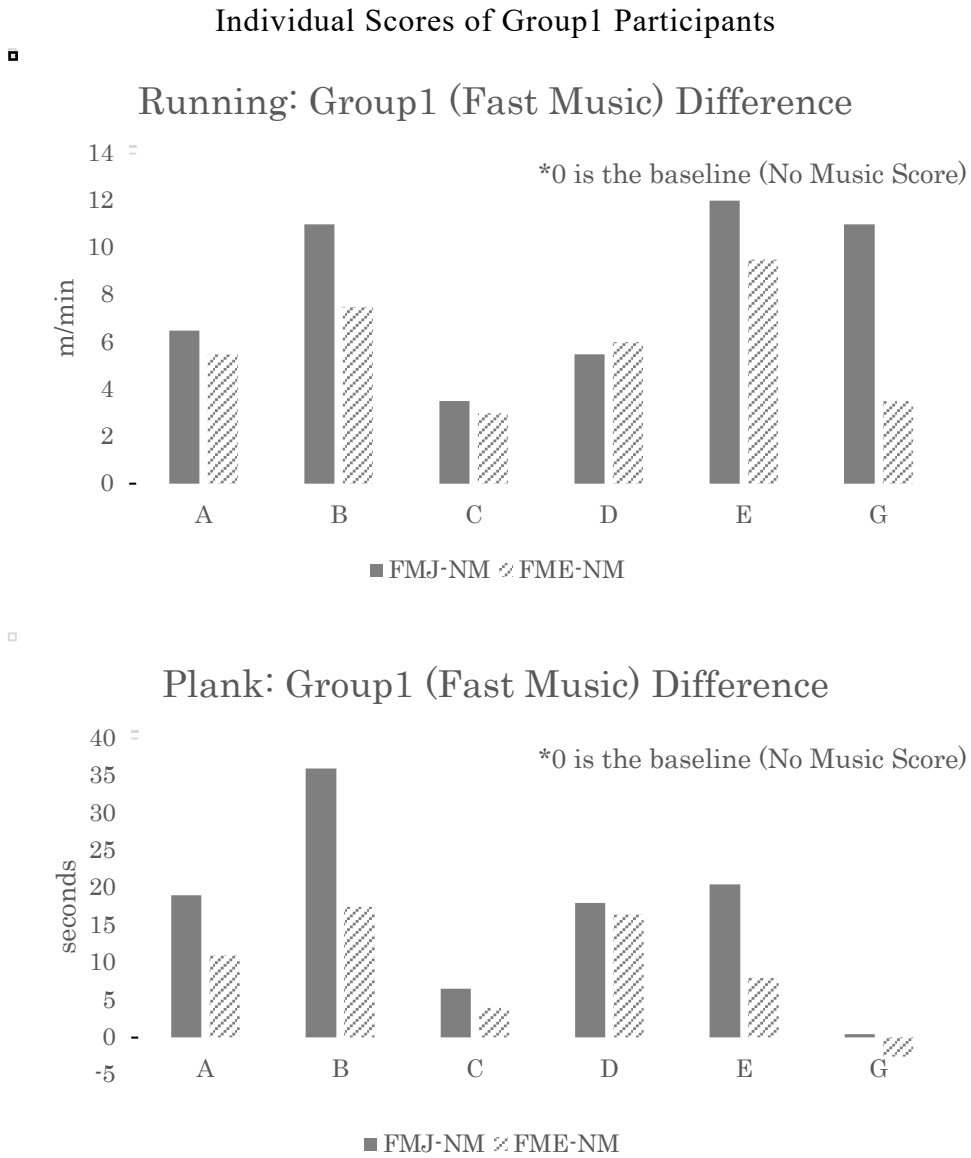


Figure 2-1

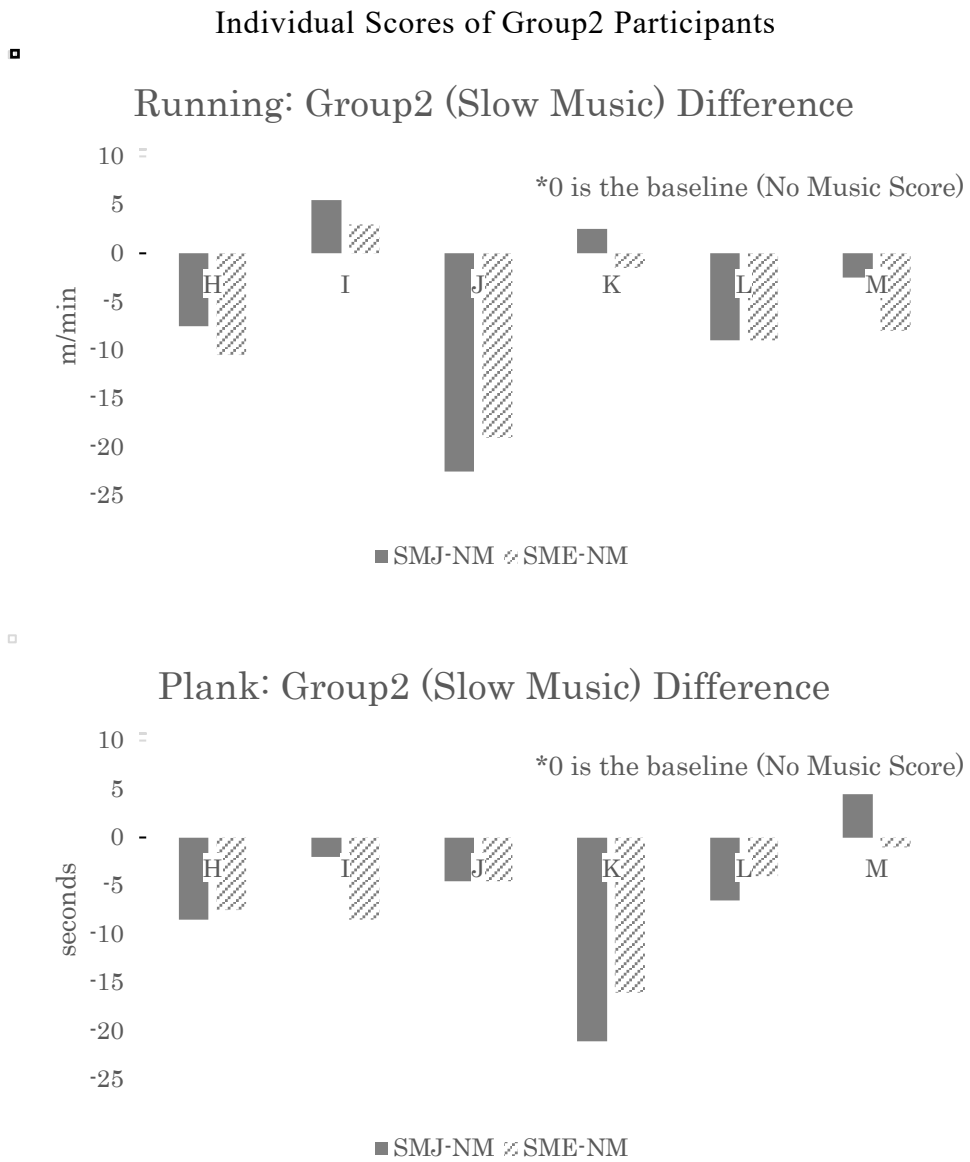


Figure 2-2

Difference in Average Score between the Two Groups by Lyric-Language

□

Plank: Difference from a Baseline by Group (Music Tempo)

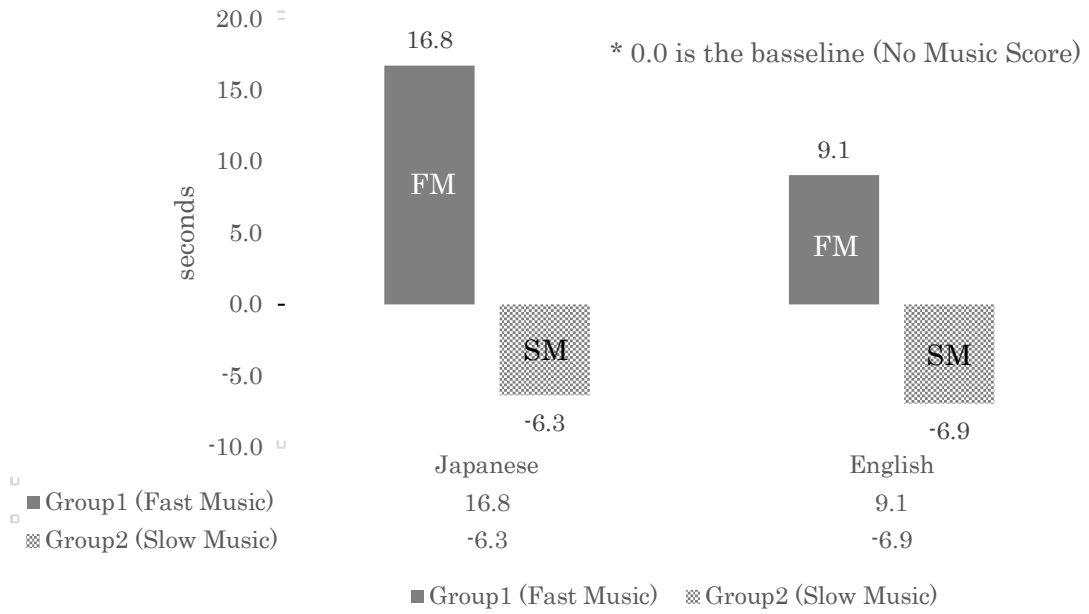


Figure 3-1

□

Running: Difference from a Baseline by Group (Music Tempo)

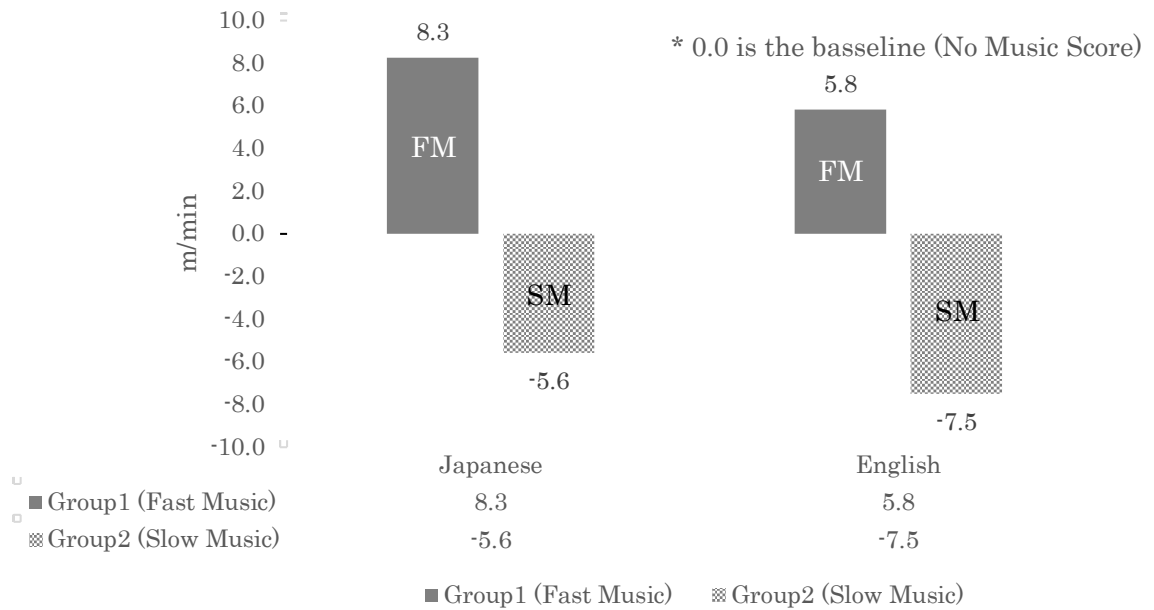


Figure 3-2

4.2 Effect of the Lyric Language

Also, Figures 2-1 and 2-2 are divided by the lyric language. When the participants (Group 1) did two of the tasks with fast music (Figure 2-1), there was a significant increase in the both tasks recorded with Japanese version songs, except D, on the Running task. The greatest difference score on the Plank task with fast music is B (+18.5 sec FMJ>FME), the lowest is D (+1.5 sec FMJ>FME), and the average is +7.7 sec FMJ>FME. Among the Running task scores (except for the negative difference score for D), the biggest difference is from G (+7.5 m/min FMJ>FME), the lowest difference is from C (+0.5 m/min FMJ>FME), and the average is +3 m/min (FMJ>FME). Therefore, it can be seen that, when people do physical activity with fast music, lyrics in one's native language have a greater positive effect on the activity than lyrics in non-native language. In addition, if you look only at the average the slow music lyrics in non-native language seem to have the negative effect (Figure 3-2). However, the individual results of Group 2 (Figure 2-2) shows it varies from person to person that the effect of lyric-language is negative or not negative. Therefore, it cannot be concluded that lyrics in non-native language have the negative effect. Thus, it can be seen that, when people do physical activity with slow music, there is no positive effect on physical activity regardless of the language of the lyrics.

4.3 Effect of Encouraging Lyrics on Maintaining Performance

Table 1 presents the difference between the non-fatigue and fatigue results of the two tasks done by the two Groups: it is the difference between the first and second times for the Plank task, and it is the difference between the first half (10 minutes) and the second half (10 minutes) for the Running task. The Table shows the effect of music on maintaining performance. According to Table 1, the greatest positive (+) score, reflecting the most maintenance, is shown in **bold**. Table 1-1 shows the participants in Group 1 (except for G) maintain their performance the most when they did the Plank task with the Japanese lyric version. Likewise, Table 1-1 says that participants in Group 1 (except for C) maintain their performance

the best when they did the Running task with the Japanese lyric version. Therefore, we can conclude that fast music with lyrics in native language can encourage people while doing physical activity and helps them to maintain better performance. However, it can be seen that Group2’s maintenance scores are inconsistent. It suggests that slow music is not able to help maintain the level of performance. In addition, Figure 4 indicates the change in average of non-fatigue and fatigue scores by task. Also, the average of Group1 (fast music) is shown in Figure 4-1 and the average of Group2 (slow music) is shown in Figure 4-2. There is no significant difference in the Plank task with slow music (Figure 4-2). Furthermore, no music is the most supportive of maintaining performance in the Running task, so there is no positive effect of lyrics (Figure 4-2). However, it is clear that Japanese lyrics had a positive effect on maintaining performance with fast music (Figure 4-1).

Difference between the Non-Fatigue and Fatigue Results by Task

Group1

	PLANK			RUNNING		
	NM2-NM1	FMJ2-FMJ1	FME2-FME1	NM2-NM1	FMJ2-FMJ1	FME2-FME1
A	-58	-32	-56	-21	-16	-20
B	-51	-21	-40	-36	-22	-33
C	-20	-15	-18	12	13	20
D	-37	-25	-34	-3	2	-3
E	-32	-11	-30	-12	4	-5
G	-11	-6	-4	-10	-6	-9

Table 1-1

Group2

	PLANK			RUNNING		
	NM2-NM1	SMJ2-SMJ1	SME2-SME1	NM2-NM1	SMJ2-SMJ1	SME2-SME1
H	-65	-52	-54	-18	-17	-27
I	-28	-36	-29	-20	-15	-30
J	-35	-36	-40	6	1	-6
K	-48	-50	-52	-8	-11	-9
L	-15	-16	-19	2	-8	-12
M	-14	-1	-8	-28	-35	-28

Table 1-2

Change in Average of Non-Fatigue and Fatigue Scores by Task

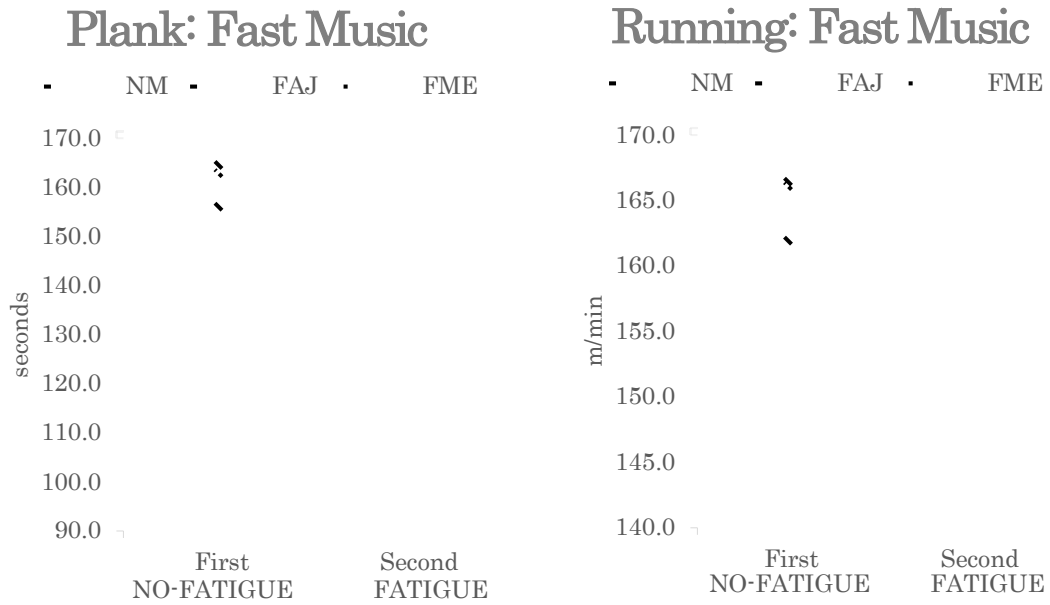


Figure 4-1

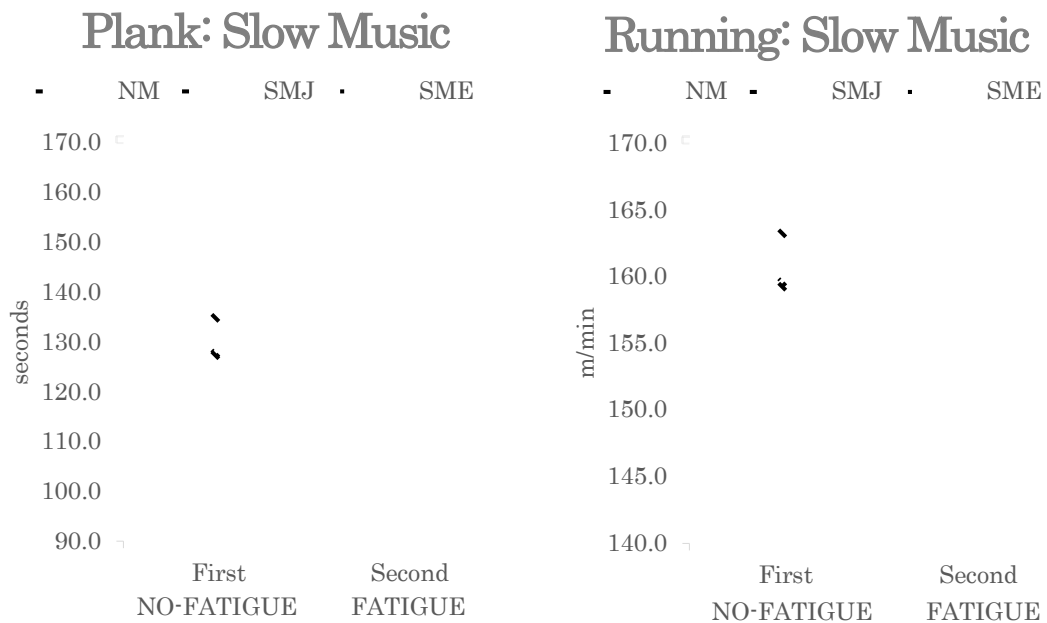


Figure 4-2

5. Discussion

In this study, based on previous research, I hypothesized that listening to fast music would have a greater effect on physical activity than no listening or listening to slow music during exercise. Also, it was hypothesized that if the music has encouraging lyrics, it would have a positive effect on maintaining performance. In other words, the central purpose of this study was to examine the effects of music on physical activity. Within that, I focused on two influences: the difference in the effects of musical tempo and the effect of the encouragement from lyrics. The results supported the main hypothesis and showed that fast music had a significant effect on physical activity. However, the results also showed that slow music had a negative effect on the performance of physical activities. From the results, it is concluded that fast music made participants positive and active, and that feeling helped them to maintain good, hard work during the exercises.

Furthermore, it was only in the case of fast music that there was a significant difference in the results between lyrics in the participants' mother tongue and lyrics in another language. The results showed that encouragement and support from positive lyrics in native language could help maintain an individual's performance in physical activity. From that finding, we can conclude that people who are doing exercises concentrate not only on the tempo of music but also on the lyrics and benefit from encouragement from the lyrics when they experience increasing fatigue from continuous physical activity. In addition, we can infer that the reason why participants concentrate on the lyrics is that they have a growing desire to get encouragement or to focus on their physical activity in order to reduce the effects of fatigue. In the case of slow music, however, there was no significant effect of lyrics. Therefore, in order for positive lyrics to influence the maintenance of performance, it is necessary to set preconditions that the music must be fast music which can inspire people to be active.

When the two tasks were observed separately, the quality of the results for maintaining performance in each physical activity was affected by the type of

exercise that the participants usually do. In the Plank task, an anaerobic activity (weight or resistance), there was no tendency. However, in the Running task, an aerobic physical activity (i.e., cardio), there was a particular tendency to maintain performance. The tendency was that participants who usually do aerobic exercise exhibited a smaller difference between less fatigue and greater fatigue, regardless of the difference between fast and slow music or the languages of the lyrics. In Group1, participants A, C, D and G were individuals who usually do aerobic exercise. Looking at the results of the Running task, the difference in their running speed between the first 10 minutes (no fatigue) and the second 10 minutes (fatigue) is within 10 m / min. Looking in detail at the Running task data in Table 1, the maximum difference between the results of each participant is A ± 6 , C ± 8 , D ± 5 and G ± 4 (plus B ± 14 and E ± 16). In Group2, three of the participants (H, K and M) usually do aerobic exercise. Also, the difference in their running speed between the first half and second half is also within 10m/min. Looking in detail at the Running task data in Table 1-2, the maximum difference between the results for each participant is H ± 9 , K ± 3 and M ± 7 (plus I ± 15 , J ± 12 and L ± 14). Therefore, we see that people who usually do aerobic exercise can maintain their physical performance better than others under any circumstances. It may be due to getting used to aerobic physical activity.

6. Conclusion

Fast tempo music enables physical activity to be performed at a greater work rate than slow tempo music. Also, positive lyrics have the effect on maintaining quality of performance, but only when the music is fast tempo.

However, although all participants in this study regularly listen to music while exercising, it is possible that different results could be obtained if participants were people who did not typically listen to music or who listened to other kinds of audio while exercising. In addition, there was no uniformity in gender or age of the participants. Therefore, if the experiment were conducted with these conditions

controlled, we may be able to see different results. Also, results from the experiment showed that there was a difference in maintenance of the level of physical activity depending on the type of exercise that individual participants usually do. Thus, it may be possible to obtain further insight in future research by dividing participants into groups according to the type of exercise (i.e., aerobic or anaerobic) they usually do.

By analyzing the data of this experiment, various perspectives were taken into consideration. However, the effect of music on physical activity is thought to be related to the emotions and feelings of people who are exercising that changed with music. It is impossible to understand and measure a person's emotion and feeling using on physical performance measures, so there may be some possible limitations in this study. On the other hand, I found some problems in this study, and brought fresh perspectives to study this theme thoroughly.

Notes

¹ BPM: an Acronym for Beat Per Minute. It means, how many beats in some song appear in a minute, and it describes the tempo of the song. (<https://www.urbandictionary.com>)

Accessed December 4, 2020.

² Runkeeper: (<https://runkeeper.com/cms/ja/>) Uploaded July 17, 2020.

References

Previous Studies

Guyatt, G.H., Pugsley, S.O., Sullivan, M.J., Thompson, P.J., Berman, L., Jones, N.L., Fallen, E.L., & Taylor, D.W. (1984) Effect of Encouragement on Walking Test Performance (pp. 818-822).

———<https://thorax.bmj.com/content/39/11/818.short>. Accessed December 4, 2020.

Waterhouse, J., Hudson, P., & Edwards, B. (2009) Effects of Music Tempo upon Submaximal Cycling Performance (pp. 662-667)

———<https://onlinelibrary.wiley.com/doi/full/10.1111/j.16000838.2009.00948.x>.

Accessed December 4, 2020.

Used Music

Dream Ami. “*Torai Evurishingu*” [“Try Everything”].

———<https://youtu.be/EIunkyaRII>. Accessed December 10, 2020.

Ichigo Club. “When You Wish upon a Star”.

———<https://youtu.be/mTgKvRXaKMY>. Accessed December 10, 2020.

Linda Ronstadt. “*Hoshi ni Negaiwo*” [“When You Wish upon a Star”].

———<https://youtu.be/cti8308y4VY>. Accessed December 10, 2020.

Shakira. “Try Everything”.

———<https://youtu.be/jpqV3dzYOgk>. Accessed December 10, 2020.

Appendix A

1. Individual Data

Fast Music (Group)	First		Second		Average		difference by music situation (for analysis of the effect of tempo)						difference between first and second activity (for analysis of the effect of lyrics)					
	PLANK (seconds)	NMT	FMJ1	FME1	NM2	FMJ2	FME2	NM	FMJ	FME	FMJ-NM	FME-NM	FMJ-FME	NM2-NMT	FMJ2-FMJ1	FME2-FME1		
A	297	303	307	239	271	251	268	287	279	19	11	8	-58	-32	-56			
B	277	298	289	226	277	249	251.5	287.5	299	36	17.5	18.5	-51	-21	-40			
C	117	121	120	97	106	102	107	113.5	111	6.5	4	2.5	-20	-15	-18			
D	95	107	110	58	82	76	76.5	94.5	93	18	16.5	1.5	-37	-25	-34			
E	107	117	114	75	106	84	91	111.5	99	20.5	8	12.5	-32	-11	-30			
G	39	37	33	28	31	29	33.5	34	31	0.5	-2.5	3	-11	-6	-4			
Average	155.3	163.8	162.2	120.5	145.5	131.8	137.9	154.7	147.0	16.8	9.1	7.7	-34.8	-18.3	-30.3			
RUNNING	First (1-10min)		Second (11-20min)		Average													
(m/min)	NMT	FMJ1	FME1	NM2	FMJ2	FME2	NM	FMJ	FME	FMJ-NM	FME-NM	FMJ-FME	NM2-NMT	FMJ2-FMJ1	FME2-FME1			
A	171	175	176	150	159	156	160.5	167	166	6.5	5.5	1	-21	-16	-20			
B	177	181	183	141	159	150	159	170	166.5	11	7.5	3.5	-36	-22	-33			
C	198	201	197	210	214	217	204	207.5	207	3.5	3	0.5	12	13	20			
D	162	165	168	159	167	165	160.5	166	166.5	5.5	6	-0.5	-3	2	-3			
E	155	159	161	143	163	156	149	161	158.5	12	9.5	2.5	-12	4	-5			
G	107	116	110	97	110	101	102	113	105.5	11	3.5	7.5	-10	-6	-9			
Average	161.7	166.2	165.8	150.0	162.0	157.5	155.8	164.1	161.7	8.3	5.8	2.4	-11.7	-4.2	-8.3			
Slow Music (Group)	First		Second		Average													
PLANK	First	SMJ1	SME1	NM2	SMJ2	SME2	NM	SMJ	SME	SMJ-NM	SME-NM	SMJ-SME	NM2-NMT	SMJ2-SMJ1	SME2-SME1			
(seconds)	NMT	SMJ1	SME1	NM2	SMJ2	SME2	NM	SMJ	SME	SMJ-NM	SME-NM	SMJ-SME	NM2-NMT	SMJ2-SMJ1	SME2-SME1			
H	306	291	293	241	239	239	273.5	265	266	-8.5	-7.5	-1	-65	-52	-54			
I	87	89	79	59	53	50	73	71	64.5	-2	-8.5	6.5	-28	-36	-29			
J	161	157	159	126	121	119	143.5	139	139	-4.5	-4.5	0	-35	-36	-40			
K	147	127	133	99	77	81	123	102	107	-21	-16	-5	-48	-50	-52			
L	72	66	70	57	50	51	64.5	58	60.5	-6.5	-4	-2.5	-15	-16	-19			
M	32	30	28	18	29	20	25	29.5	24	4.5	-1	5.5	-14	-1	-8			
Average	134.2	126.7	127.0	100.0	94.8	93.3	117.1	110.8	110.2	-6.3	-6.9	0.6	-34.2	-31.8	-33.7			
RUNNING	First (1-10min)		Second (11-20min)		Average													
(m/min)	NMT	SMJ1	SME1	NM2	SMJ2	SME2	NM	SMJ	SME	SMJ-NM	SME-NM	SMJ-SME	NM2-NMT	SMJ2-SMJ1	SME2-SME1			
H	183	175	177	165	158	150	174	166.5	163.5	-7.5	-10.5	3	-18	-17	-27			
I	132	135	140	112	120	110	122	127.5	125	5.5	3	2.5	-20	-15	-30			
J	210	190	197	216	191	191	213	190.5	194	-22.5	-19	-3.5	6	1	-6			
K	166	170	165	158	159	156	162	164.5	160.5	2.5	-1.5	4	-8	-11	-9			
L	174	170	172	176	162	160	175	166	166	-9	-9	0	2	-8	-12			
M	113	114	105	85	79	77	99	96.5	91	-2.5	-8	5.5	-28	-35	-28			
Average	163.0	159.0	159.3	152.0	144.8	140.7	157.5	151.9	150.0	-5.6	-7.5	1.9	-11.0	-14.2	-18.7			

*NMT: no music FM: fast music SM: slow music J: Japanese E: English 1: first time 2: second time

2. Detail of Participants

Group1	Male/Female	Age	the participants usually do	
			cardio exercise	weight exercise
A	M	20	○	○
B	M	21	×	○
C	M	47	○	○
D	M	65	○	×
E	F	27	×	○
G	F	67	○	×
Group2				
H	M	21	○	○
I	M	48	×	○
J	M	43	×	○
K	M	68	○	×
L	F	22	×	○
M	F	66	○	×

*○: do ×: NOT do

Appendix B

アンケート

2020年 月 日

運動能力検査に参加いただきありがとうございます。
以下の質問にお答えください。

1. 性別
 男 女

2. 年齢
_____ 歳

3. あなたは普段どのぐらいの頻度で運動しますか。
約週 _____ 回

4. 普段行っている運動のタイプはどのようなものですか。以下から選択してください。
また、「その他」を選択された方は、どのような運動を行っているかを下線部にお答えください。
 瞬発系 例) 筋力トレーニング・ウェイトトレーニング
 持久系 例) ランニング・サイクリング・水泳
 瞬発系と持久系の両方
 その他 _____

5. 普段の運動中に音楽は聞きますか。
 はい いいえ

6. 5. で「はい」と答えた方は、その音楽の曲名をお答えください。

7. 英語はどのくらい話せますか。
 ほとんど話せない 日常会話程度 流暢に話せる

8. 英語の学習歴は何年ですか。また何歳から何歳までの期間ですか。
_____ 年間 _____ 歳～ _____ 歳

9. 海外留学、もしくは海外居住経験はありますか。
 はい いいえ

10. 7. ではいと答えた方は、その国・期間・当時の年齢を教えてください。
国： _____ 期間： _____ 当時の年齢： _____

お答えいただきありがとうございました。

中央大学 栗島深姫